広島平和記念資料館資料調査研究会

研究報告

第 19 号

令和 5 年（2023 年）11 月

広島平和記念資料館資料調査研究会

あいさつ

「広島平和記念資料館資料調査研究会」は、広島平和記念資料館の展示の充実に資するため、歴史、物理、国際関係、平和教育、情報など各方面の専門家を集めて、平成 10 年（1998 年）8 月に発足しました。以来、資料館と共に、資料の保存や展示、それらの基礎となる事項についての学術調査研究を積み重ねてきました。その成果は、資料の展示や保存等に活かされています。本書は、この調査研究活動成果の一部を研究報告という形で発表するものです。

本号には特別寄稿 2 本と会員による研究報告 2 本を掲載しています。元中国新聞記者の西本雅実氏は、広島の原爆被災を撮影した松重美人氏の写真撮影の経過を詳細に検証するとともに、広島原爆の写真撮影者の一覧を作成されました。広島平和記念資料館初代学芸員である横田禎昭氏は、在職当時にたずさわった当館開館以来初の展示更新と収蔵資料の保存対策についてふりかえり、今後の被爆資料の保存のあり方について提言されています。

久保田会員は、広島平和記念資料館所蔵の相原秀二資料の持つ価値と、資料デジタル化の意義について論じています。高妻会員は、広島平和記念資料館本館の展示環境改善のための新しい試みとして、光触媒を用いた有機酸除去について報告しています。

最後に、当研究会の活動に協力いただいている方々に厚くお礼を申し上げます。これからも当研究会は、広島平和記念資料館を学術面から支援する研究者の組織として、関係各方面と連携・協力を図りながら、学術的考証、分析、研究、調査などの活動に努めてまいりたいと思います。

令和 5 年（2023 年）11 月

広島平和記念資料館資料調査研究会　　会長　水本　和実

目　次

■特別寄稿

西本　雅実　　1945 年 8 月 6 日松重美人撮影写真を読み取る
～「広島原爆の撮影者」とともに～…… 1

横田　禎昭　　被爆資料の永久保存対策についての覚書
～窒素ガス封入実験に関して～…… 43

■広島平和記念資料館資料調査研究会　研究報告

久保田明子　　相原秀二資料と「平和データベース」
－広島平和記念資料館の文書資料の在り方…… 65

高妻　洋成　　展示環境改善の新たな試み（1）
エアタイトケース内の有機酸除去への光触媒の検討…… 79

■資料

広島平和記念資料館資料調査研究会　規約…… 83
会員名簿…… 86

※研究報告のカラー版は広島平和記念資料館のホームページで公開する予定です。

特別寄稿

1945 年 8 月 6 日松重美人撮影写真を読み取る
～「広島原爆の撮影者」とともに～

西本　雅実（にしもと　まさみ）

元中国新聞記者／「ヒロシマ通信」研究会会員

1956　広島市生まれ
　80　中国新聞入社、2021年　退職
現在　「ヒロシマ通信」研究会（代表：宇吹暁）会員

原爆関連の主な取材
平和記念公園となった爆心地一帯の住民・勤務者・動員学徒ら2369人の死没状況を追った「遺影は語る」（1998～2000年）　被爆70年企画「伝えるヒロシマ」（2014～15年）など。

共著
『世界のヒバクシャ』（講談社、1991年、90年度日本新聞協会賞）
『検証ヒロシマ』『年表ヒロシマ－核時代50年の記録』（中国新聞社、1995年、同年度日本新聞協会賞）
『広島市被爆70年史』（広島市、2018年）など。

単著
『1945原爆と中国新聞』（2012年、中国新聞社）

連絡先　nishimoto731@gmail.com

はじめに

1945 年 8 月 6 日、米軍爆撃機「エノラ・ゲイ」が投じた史上初の原子爆弾は、広島市の上空約 600 メートルでさく裂し、七つの川が織りなすデルタの街は「崩れ墜つ　天地のまなか」にたたき込まれた[1]。

ひとたび核兵器が使われたら、人間はどうなるのか－。今を生きる私たちに未来にも警鐘を鳴らしているのが、「原爆記録写真」である。

広島原爆の惨禍をめぐる写真撮影は自ら被爆した人たちによって当日に始まった。甚大な被害を免れた陸軍船舶司令部の写真班員や、大阪や東京からも入った海軍の調査団、新聞・通信社のカメラマン・記者、ゆかりの人たち、研究者、記録映画製作班員らが続いた。

筆者は、中国新聞記者だった 2007 年、これら撮影者や遺族たちの証言や資料を追い、平和記念資料館（以下、原爆資料館と記載）などの収蔵写真などを基にして「原爆写真の撮影者たち」をまとめた[2]。以降も壊滅直後の写真を掘り起こして紙面で報じてきた。

ロシアがウクライナへ侵攻した昨年来、核兵器使用の可能性が公然と語られ、世界を震撼させている。日本では「核抑止」論にとどまらず「核共有」を唱える声も上がっている。

まさに今こそ、原爆記録写真を見つめ直すときではないだろうか。さらなる「全体像」を深めるため、原爆資料館へ新たに寄せられていたり、検証が進んだりした収蔵写真や、各報道機関の未公開写真にも当たり、全面的に洗い直した。

原爆の惨禍を1945年8月6日から12月末までに写真で記録した撮影者は(2023年10月末現在)、計70人・3団体（前回2007年、56人・1団体）を数え、少なくとも2945枚（同2571枚）を収め､2856枚の現存を確認した。うち2345枚（同1819枚）が原爆資料館で収蔵・保存されている。

人間が「天地のまなか」にたたきこまれた当日は、市民の惨状をデルタで唯一撮影した5枚をはじめ、原子雲を市内外から収めた27枚（うち24枚が現存)、炎上する市街地が3枚（組み写真)、被災者を乗せたトラックを市郊外で撮った1枚の計36枚が確認できた。

本稿では、1945年8月6日松重美人撮影写真を読み取り、同年末までの撮影者一覧を作成する。松重が撮り残した写真ネガフィルム原板5点は2021年3月26日に広島市重要有形文化財に指定された。御幸橋西詰めでの1・2枚目は、原爆資料館での展示や国内外の「原爆展」、被爆証言・講話のみならず、デジタル画像がさまざまな場でも使われている。

しかし、取り上げられることが多い分、風説や誤解もたびたび引用・紹介されている。自省を込めて記せば、メディアが「原爆神話」も広めてもいる。

未曾有の渦中の撮影状況をはじめ、写っている人たちについて一から追った。自らが名乗り出ていた、遺族が指摘していた、各資料から裏付けられた、御幸橋西詰め1・2枚目に写っているとみられるのは9人を数える。それぞれの詳細を確かめることができた。

被爆地ヒロシマの願いも伝える原爆記録写真には、顧みられていない変遷や証言､埋もれていた記録があった。「定説」を揺さぶる「疑問」も浮かび上がってきた。

午前8時15分、広島市翠町1551番地

松重美人（1913～2005年）は亡くなる前年の3月、人工透析の体調を押して広島市安佐南区の自宅で資料を携えた筆者を迎え入れ、こう語ったことがある[3]。

「生き運があったから撮れたと思います」。当時32歳の中国新聞社写真部員は、広島城本丸に構える中国軍管区司令部の報道班員でもあった。宇品線の路面電車が走る通りに面した「翠町1551番地」（南区西翠町1-2）に住み、妻スミヱ（1915～2007年）はそこで松重の妹夫婦が営む理髪店を手伝っていた。二つになって間もない長女と両親は愛媛県・大三島に疎開していた[4]。

1947年正月の松重美人家族。両親を中央に後列左端が本人、手前が妻や娘2人。修繕した自宅兼理髪店前で（長女提供）

1945年8月6日朝は、前夜から断続的に続いた警戒警報による司令部での待機が明け、いったん帰宅する。食事を済ませて自転車で出勤したが、「トイレに行きとうなり」御幸橋の手前で引き返した。広島城址の報道班員室にとどまっていたら、自宅から上流川町（中区胡町）の新聞社へ向かっていたら、助からなかっただろう。

「生き運があった」と述懐したゆえんだ。撮影

に欠かせないカメラも無事だった。

午前 8 時 15 分、自宅兼理髪店は、爆心地から南東約 2.8 キロとなる[5]。家屋の内部は散乱し、窓枠の一部は吹き飛ばされた。

「永かった大東亜戦争に終止符を告げた世紀の一閃(せん)が広島に落ちた。乳黄色の原子雲に包まれ、屋外に飛び出したものの何も見えない／広い道路には人影一人もなく、こわれたかわらや、木片が散乱している。はっと気がつき腰に手をやってみると写真機は腰にぶらさがっていた／当時私は『マミヤシックス』を愛用していた。カメラを焼かないにしても、体からはなしていたらこの写真は撮れていなかったのではないかとさえ思える」

撮影について松重が初めて書いた手記である（旧仮名遣いを改めた）。『原爆第 1 号ヒロシマの写真記録』に残る。連合国軍総司令部（GHQ）の占領統治が明けた 52 年の 8 月に出た写真集は、市民の無残なまでの姿を御幸橋西詰めで写した 1 枚目を見開きで、近づいて撮った 2 枚目と、被災者に囲まれた男性を収めた 5 枚目の計 3 枚を掲載した。併せて「八月六日の朝　キャメラマン松重美人」の一文を収め、筆者は「御幸橋々上のあの記録的写真撮影」と紹介している[6]。

国産のマミヤシックスは 40 年に発売が始まり「名機」と評された。距離計連動スプリングカメラは、操作性に優れ連写もこなせた。重さは 750 グラム[7]。中国新聞社の人事記録によると、松重は戦況が険しくなる 43 年の 2 月から写真部で働き、翌 44 年 5 月に採用され 11 月社員となった[8]。先輩部員らが召集され、軍報道班員も務めるカメラマンにとって、自らが購入したマミヤシックスは、掛け替えのない商売道具であり貴重な家財でもあった。

松重は 63 年に書いた「あるカメラマンの記憶」では、「散乱した壁土のなかから、上着や帽子、編上靴、そして私にとって何よりもだいじなカメラを掘り出した」とする[9]。70 年の「陸軍報道班員ヒロシマ日記」は、「あみあげ靴を掘り出し、新聞社と司令部へいく仕度をした。カメラ（私はとうじ、マミヤシックスを愛用していた）を点検してみたが、狂っていなかったことはたいへんうれしかった」と書き、掘り出したかどうかは判然としない[10]。

後述するように、松重の撮影写真は 70 年代に入って広く知られるようなる。証言活動に最期まで取り組み、メディアや継承に努める市民が取り上げ、カメラを「がれきから掘り出した」という話も散見されるようになる[11]。被爆 7 年後の手記「八月六日の朝」の記述を確かめた 2004 年こう答えた。「マミヤシックスは腰の革バンドにくくりつけていました」。カメラが実際がれきに埋まっていたら、撮影にはとても使えなかっただろう。

現存ネガ 5 点の撮影行程

電車通りの周辺が見えるようになると、自宅北側の広島地方専売局（南区皆実町の猫田記念体育館）前を通り、京橋川に架かる幅 22 メートル・長さ 162 メートルの御幸橋（中区千田町－南区皆実町）を渡り、右岸そばの文理科大グラウンド（中区の平野公園）辺りまで進んだ。しかし、火勢の勢いに阻まれて橋へ引き返す。手記「八月六日の朝」を再び引く。

「御幸橋交番の前には男とも女とも判断のつかない地獄から出てきたような、

髪も皮膚も焼けただれ背中、肩、腕に水袋をつけたように火傷がふくれあがった、この世の人間とは思えぬ者ばかりが何十人もうめき泣いたりしている。『ひどいことをしやがった』といいながら一枚写真を撮った。憤激と悲しみのうちに二枚目のシャッターを切るとき、涙でファインダーがくもっていたのをいまも脳裏のどこかにはっきりと記憶している。一息ついて時間を見たら十時半だった」[12]

想像を絶する惨状を前にして、真っ先に沸き上がった憤怒、自分は無事だったという申し訳なさ、しかし、新聞社・軍報道班カメラマンの務めは非情であっても果たさなくてはならない…。70年の手記では「自身が鬼畜にもひとしい冷酷な者にみられているようである／〈いま私はみなさんの死の苦しみにあるその姿を写真に撮るがゆるしてくださいよ〉と、相手には通じない謝罪をしながらシャッターを切った」と書く。被災撮影者らによる85年の座談会では「幸い師団司令部の腕章を付けていたので写すことができた。それがなかったら撮らなかったと思います」と率直に語っている[13]。

「涙でファインダーがくもった」。この記憶・証言は終生変わることはなかった。

ただ、松重の手記や証言、関連する記録をあらためて集めると、今は「午前11時すぎ頃」が「定説」である御幸橋西詰め1・2枚目や、5枚目の撮影時間は、変遷していた。詳しくみる前に、松重が代表を務めて81年に編さんした写真集『広島壊滅のとき』で自身が記載した時間に沿って、御幸橋から自宅に戻った3枚目以降の撮影行動をたどる[14]。

「午後2時頃」、窓枠やガラスが吹き飛ばされた自宅兼理髪店内を妻スミエを入れて撮り、続いて窓枠越しに、電車通りを歩く男性と倒壊した東側の2階建て西消防署皆実出張所を収めた[15]。当時29歳の妻は身重だった。次女は翌46年2月に生まれ今も健在である。

さらに「午後4時すぎ頃」、広島地方専売局前の電車回り角で、被災者に囲まれて「罹災証明書」を書く宇品署員を収めた。この証明書があれば、食糧配給や列車の切符を手にすることができた。「8月6日」撮影現存ネガで最後の5枚目である。

自宅兼理髪店にはこの間、妻スミエの姪が「ひぶくれ」で助けを求めに来ている。京橋川に架かる鶴見橋（中区鶴見町－南区比治山本町）一帯の建物疎開に学徒動員されて被爆。松重は「うちわであおいでやるのが精いっぱいだった」という[16]。

未曾有の事態に陥った中でも、松重はそれ以上に撮ろうとし、また撮ってもいた。

「（午後）二時半すぎ、どうでも中央部へ出てみようと、哀れな姿の行列を見るともなしに家の前にいたら」同じ翠町に住む政経部の高橋慶彦（当時22歳）が現れた。無事を互いに喜び、一緒に社を目指す。京橋川右岸の文理科大グラウンドから、竹屋地区を抜けて、流川筋を通り、全焼した本社に入った。編み上げ靴は灰にすっぽり埋まり、熱気と煙の充満で飛び出た。爆心地近く紙屋町では、焼けた電車の中で数十人の遺体が折り重なっていたのを目撃した。「自失から覚めたようにカメラに手をかけたが、目を開く生不動の形相にシャッターが切れなかった。結局、中央部では写真を一枚も写すことができなかった」[17]

「松重美人著」として2003年に出た『なみだのファインダー』には、「8月6

1945 年 8 月 6 日午前 9 時半ごろ～11 時ごろ、松重美人撮影御幸橋西詰め 1 枚目。爆心地から南東に約 2.2 キロ、千田町の動員先で被爆した女子学徒や近隣住民らが逃げてきたのに続き、宇品署は備蓄の食用油を千田派出所に運び、署員らが応急手当てをした（中国新聞社所蔵のネガ 5 点は 2021 年広島市重要有形文化財に指定。日本写真保存センター寄託を通じて、現在は国立映画アーカイブ相模原分館で保存されている）

1945 年 8 月 6 日午前 9 時半ごろ～11 時ごろ、御幸橋西詰め 2 枚目。手前の三角襟のセーラー服が阪本光子、左隣が同級生の松林節子、中央の男性が宇品署・藤川勝行、その右が光子の父・阪本儀三郎、さらに右の背中が沓木明、皮膚も焼けただれた女性の奥に見える帽子姿が同署・藤田徳夫とみられる（松重美人撮影／中国新聞社所蔵）

1945 年 8 月 6 日午後 2 時ごろ～4 時すぎ　被災者に「罹災証明書」を書く宇品署の藤田徳夫。署の臨時本部を設けた広島地方専売局前の宇品線電停「皆実町三丁目」（現在の「皆実町六丁目」）の南側で撮られたとみられる（同）

1945 年 8 月 6 日午後 2 時ごろ　爆心地から約 2.8 キロ、翠町 1551 番地の自宅兼理髪店内。奥に写るのが松重の妻スミヱ（同）

1945 年 8 月 6 日午後 2 時ごろ　窓枠も吹き飛んだ理髪店内から撮った宇品線の電車通りや、倒壊した西消防署皆実出張所

日に使用したフィルムは、5 枚だけです」とある[18]。しかし、後述するように、広島地裁へ 94 年に起こされた「著作権確認等請求訴訟」で、一方的に被告となった松重本人が「夜には、千田町の火災の状況を撮影した」と供述している[19]。では、そのネガはどうなったのか。現存ネガ 5 点以外にも、「フィルムを入れかえて四、五枚写しておいたが、あとは感光していたのか、現像はしたがかぶっていた」。被爆 7 年後の手記で言及していた。

松重は極限状況にあって、新聞社・軍報道班カメラマンの務めからシャッターを切った。同時に、人間としての感情や葛藤が屍（しかばね）の街を歩く中での撮影を押しとどめた。原爆を自ら体験した市井の視線から撮影して残したのが、現存するネガ（6 × 6 センチ判）5 点である。

変遷していた「撮影時間」

今は「午前 11 時すぎ頃」が「定説」の御幸橋 1・2 枚目の撮影時間は、掲載紙・誌をさかのぼると歳月とともに変遷していた。現行に落ち着くまでには 4 半世紀がすぎていた。

御幸橋西詰めの 2 枚が「世紀の記録写真　人類平和のスタート」の見出しで初公開されたのは、中国新聞が別会社で発行した『夕刊ひろしま』46 年 7 月 6 日付 2 面である[20]。「世紀の記録写真」の見出しを取りながら、本紙ではなく夕刊にとどめたのは、GHQ が前年 9 月 19 日に発した「プレス・コード」、民間検閲局（CCD）による検閲・監視を強く意識していたからだろう。

物資不足が続いた戦後の混乱期。紙面の印刷状態はいいとは言えない。しかし、逃げてきた御幸橋で倒れ込む姿や、皮膚も焼けただれた女性らしき人もはっきりと見える。右端を除きほぼ全構図で載せた、1 枚目の写真説明は「力盡（つ）きて地べたにくづをれたり仆（たお）れてゐる悽惨な情景（九時半ごろ御幸橋の西袂（たもと）で撮（うつ）す）」である。2 枚目は中央より右側に見える上記女性に焦点を当てトリミングした構図。掲載後、「夕刊ひろしま新聞社」の幹部ではなく、中国新聞社写真部員の松重と『夕刊ひろしま』整理部記者が呼び出された。

「この写真を複写してもらえないか、というような話しで、焼いて届けました。どうということも無かったですよ」と 91 年、堀場清子に答えている。原爆をめぐる表現に対する検閲ぶりを米メリーランド大所蔵の「プランゲ文庫」資料から掘り起こした堀場は、松重が向かった先は、上流川町（中区幟町）の広島中央放送局（NHK）に入っていた CCD 第 3 地区検閲局（福岡）の広島分局であったことを突き止めている[21]。松重はそれ以前の 88 年、「たいした小言もなく、御幸橋で撮影の写真を提供することで許された」と紙面掲載後に呼び出されてプリントを提出したことを自身が明かしてもいた[22]。

それを裏付ける紙面掲載とほぼ同じ構図のプリント 2 枚が、広島大放射線医科学研究所が所蔵する「米軍病理学研究所（AFIP）返還資料」にあった。米軍が接収した、原爆を落とされた側から撮った写真（広島関係は 1205 枚）や原爆死没者の病理標本が 73 年 5 月、前身の放射能医学研究所を窓口に返還された。返還時のプリントや資料を整理して収めた箱を開けると、撮影は「午前 9 時」とする英文キャプションが付いていた[23]。

「世紀の記録写真」御幸橋西詰め 1・2 枚目の撮影を、松重は提出時には「午前 9 時」とも説明していたのか。あらためて掲載紙・誌に戻ってみる。

御幸橋での惨状写真を中国新聞本紙が本格的に扱ったのは、見落としがない限り 65 年 7 月 11 日付だった。朝刊 1 頁を充てた特集連載「ヒロシマ二十年」第 4 回で 1 枚目が掲載されている。写真説明は「被爆 4 時間後の惨状／放射能を浴びた人人がつぎつぎに集まってきた／いまではこの人たちのほとんどは生きていない。松重中国新聞写真部員が写す。」。紙面で写真部員の名前がクレジット表記されるのは当時極めてまれだ [24]。

松重は戦後、肺結核を煩い体力も必要な写真部を 54 年に離れ、1 年半に及ぶ休職・闘病から内勤の校閲部を経て、ようやく 63 年古巣に復帰したが 65 年 8 月に事業局へ異動となる。満 56 歳を迎えた 69 年に定年退職した。

撮影が「午前 11 時すぎ」と、いわば統一されていくのは 70 年代に入ってからだ。

原爆資料館の小堺吉光が 6 年がかりで担当した、広島市 71 年発行の『広島原爆戦災誌』全 5 巻。その第 1 巻総説編は、扉ページで 1・2 枚目と 5 枚目を続けて収めた。撮影は 1 枚目を「午前 11 時過ぎごろ」、2 枚目を「午前 11 時ごろ」として、5 枚目は「午後 2 時ごろ／宇品署の藤田警察官が、被災者に罹災証明書を書いて渡した」と説明。クレジットはいずれも「松重美人　撮影」である。ネガは松重が当時は旭町（南区）の自宅で保管していた。

73 年の「AFIP 返還資料」を基に、中国新聞社が急きょ編集して同年 8 月に発行した『原爆の記録ヒロシマ－米国返還資料から』は、松重「8 月 6 日」撮影の 5 枚すべてを初めて収録するが時間は入れていない。御幸橋西詰めの 2 枚は、「返還資料」に含まれていた松重提出のプリントではない。松重所蔵ネガから焼いたとみられる 5 枚を載せて、残り 3 枚は、いずれも「この写真は返還資料には含まれていない」と注釈を付けて紹介した。

同じ 73 年 8 月に出た、仁科記念財団編さんの『原子爆弾』で収録された 1 枚目は撮影を「午前 11 時」と記載し、松重の談話を添えている。2 枚目は時間を入れていない。写真説明の作成は、学術研究会議の「原子爆弾災害調査研究特別委員会」に同行して壊滅の広島・長崎へ入った原爆記録映画の製作者だった相原秀次（本名・秀二）が当たっている [25]。

「人類が核時代に踏み入ってから三十年たった今日、広島・長崎の体験はより一層その深い意味においてとらえられなければならない」。中国新聞社は『ヒロシマの記録－被爆 30 年写真集』を発行。撮影 1 枚目は「午前十一時過ぎ」、2 枚目を「午前十一時ごろ」、5 枚目を「午後二時ごろ」と説明した。被爆 35 年、40 年、50 年の各写真集もこれを踏襲する。

被爆 30 年の 75 年夏には、広島県・市、NHK 中国本部、中国新聞社の 4 者実行委員会による「ヒロシマ・原爆の記録展」が札幌、仙台、東京、大阪、名古屋の順で開かれた。御幸橋西詰めの惨状や「AFIP 返還資料」のパネル写真、市民が描いた「原爆の絵」、実物資料が反響を呼び、5 会場で約 22 万 6 千人が入場する。「原爆展」は市長 2 期目で同年 1 月に死去した山田節男が訴えていた。広島市にとって地元以外で主催する初の展示となった。

81 年、松重は代表を務めた「広島原爆被災撮影者の会」が出した『広島壊滅のとき』で、御幸橋西詰め 1・2 枚目の撮影は「午前 11 時すぎ頃」と自らの筆記

で結論付ける。5枚目は「午後2時ごろ」ではなく「午後4時すぎ頃」とした。同会は、松重や中国軍管区司令部報道班員でもあった岸田貢宜（1916～88年）らが78年に発起人となって発足。地元の計20人が未発表を含めて寄せた285点を収録し、2000部を発行した[26]。

御幸橋西詰めで市民の惨状を撮った2枚の写真は、「8月6日午前11時すぎ撮影」が定着する。相原秀次が説明を手掛けた81年の『写真集原爆をみつめる』[27]や、東京都写真美術館が95年に開いた「核－半減期」展[28]は、1・2枚目とも「午前11時すぎ」だ。

筆者自身、『広島壊滅のとき』に重きを置いてきた。2004年「ヒロシマの記録－原爆・平和写真データベース化」と題した特集[29]で松重「8月6日」撮影全5カットの紙面掲載や、21年3月にネガの広島市重要有形文化財指定に伴う特集でも、撮影時間は「定説」を踏まえた。日本写真保存センター（東京）が22年6月に「写真原版データベース」で公開を始めた「松重美人撮影」ネガ13点（うち45年末まで10点）の時間・場所・発表媒体などを退職後に作成した際も、記者時代の取材を基にした。しかし、並行して進めていた今回の調査を踏まえると、「定説」は本当なのだろうかと疑問が膨らんできた。

御幸橋西詰めでの撮影は「九時半ごろ」だったのか、撮影に「一息ついてみたら十時半」となっていたのか、「午前11時すぎ頃」がより正確なのか。違いはそれほどないとみられるかしれない。松重の撮影は極限状況下でなされた。腕時計はしていたが時間を書き留める余裕など、とうてい持ちようがなかったからだ。

しかし、「私が写っている」と名乗り出た人たちの行動や、御幸橋での救護をめぐる記録を掘り起こしていくと、撮影は今の「定説」より早かった可能性がぬぐえない。なぜなら、松重自身が「一息ついて」の後を書き残している。「時間が経(た)つにしたがって負傷者は数多くなり／橋上の両側に牛肉をならべたようにずらり横たわり、水をくれ水をくれとうめき苦しんでいる」地獄絵のような光景が広がり続いた。その始まりを、私たちは御幸橋西詰めで写された1・2枚目で見知ったつもりになっているかもしれないからだ。

名乗り出た元女子学徒

「確かに私の後ろ姿です」。河内光子（1931～2018年）は1973年6月23日、「ヒロシマ・ナガサキ返還被爆資料展」を開催中の平和記念館（原爆資料館東館）を訪れ、御幸橋西詰めの惨状写真に自身がいることを明かした。新聞・放送局のカメラが取り囲んだ。

資料展は、米国から前月28年ぶりに戻ってきた返還資料群の中から写真134枚（米軍撮影のカラー29枚を含む）をパネル展示した。被爆地の市民も大半が初めて目にする原爆記録写真とあって、地元のみならず全国的にも注目を集めた。6月16日～25日の期間中、入場者は8万人を超える。廃虚の本通を歩く少年、熱傷の跡を逓信病院で撮られたカスリの若い女性…。計7人が「自分が写っている」と名乗り出た。

旧姓阪本光子は広島女子商業学校2年生だった。千田町1丁目（中区）の広島貯金支局に動員されて支局2階にいた。「Bちゃんが来とるよ」。窓からB29の

機影が見え、仲間に声がけしたが、自身は気にもとめず机についた。そこで吹き飛ばされた。爆心地から南東に約1.6キロ。押されるように階段を降りて電車道に出た。掃除のおばさんは既に死んでいた。

阪本儀三郎（次男提供）

「光子はおらんか！」。阪本儀三郎（1890～1966年）の声がした。東千田町の関西病院で修理仕事をしていた大工の父が現れた。声を聞かなければ見分けがつかないほどやけどした父を伴い、同級生との計7人で避難する。電車道沿いに市役所方面へ向かったが、「髪の毛は逆立ち、皮膚はずるむげ」の人たちが来るのを見て立ちすくむ。南に転じ、広島工業専門学校（千田町3丁目）から修道中（南千田町）へと逃げた。地面は熱く、路上の散乱物で足は傷つく。はだしだった。土手に落ちていたズックをはいて、御幸橋へ向かった。

御幸橋西詰め2枚目、中央の背の高い男性の後ろに立つ「三角襟のセーラー服」が阪本光子であり、男性の右肩越しに見える頭髪も皮膚も焼かれていたのが父の阪本儀三郎である。

河内は名乗り出た73年、「下関のいとこからもらった三角襟に黒い一本線が入った白いセーラー服」は「絶対私です」と会場に展示された2枚目のパネル写真前で指さしてしている。

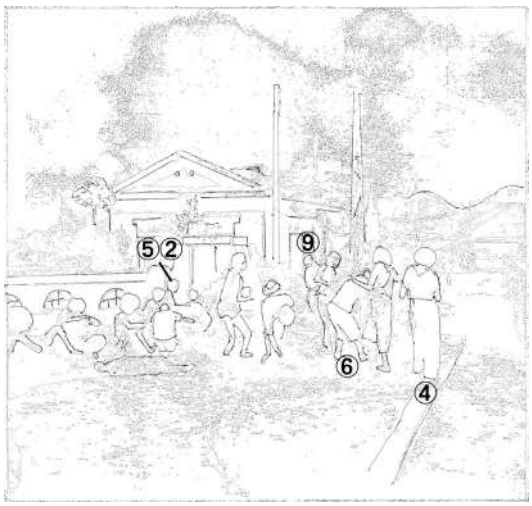
その時のテレビ映像も残っている[30]。一方、父が写っていることは明かしていない。

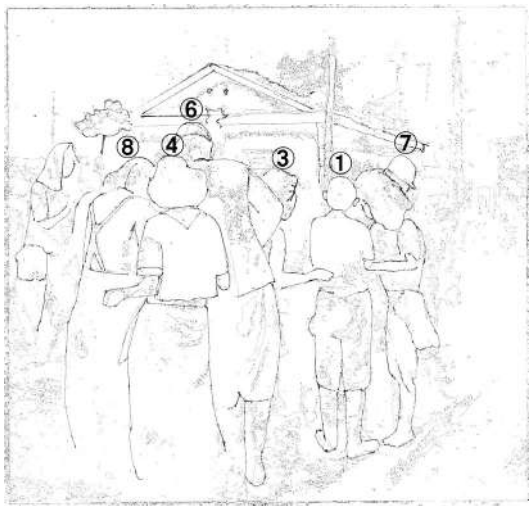
それ以降は、家族を世間の目から守るためにもメディアに出ることは避けた。NHK広島放送局が原爆資料館の展示品に焦点を当て、吉永小百合が語りを務めた82年8月6日全国放送の『きみはヒロシマを見たか』で応じていたが、匿名で御幸橋を歩く後ろ姿。同名の書籍化では「K・M」で証言し、阪本姓を伏せて「父儀三郎」も写っていることを明かす。名乗り出たのは父の形見ともなった写真が欲しかったからだという[31]。

ようやく筆者は2007年に取材がかなった。中区の自宅を訪ね、御幸橋での写真撮影にも応じてくれた。「橋に近づくと負傷者が列をつくり、何か薬をつけてもらっているのが見えた。『お父ちゃん、塗ってもらおうよ』と言って並びました。そこを撮られたんです」。三角襟の後ろ姿が右側に写る1枚目にはこう語った。「それはむごかったですよ。子どもを両手に抱えた、この女性は名前を叫んで気が狂ったみたいにぐるぐる回っていました」

河内は、旧厚生省が95年の被爆者実態調査で初めて求めた体験記（自由記述欄）で御幸橋後の避難も書いていた。「川岸に降り汐の引くのを待って歩いて吉島に上陸、伝馬船で江波の一軒茶屋に渡して貰い、やっと人心地がついた心境でした」[32]。元安川と太田川（本川）を何とか渡って舟入川口町（中区舟入南）に上がった。女子商の同級生も一緒だった。自宅は住吉橋近く舟入幸町にあった。母フミ（当時44歳）は焼け死んでいた。

今回、佐伯区在住の8歳違いの弟に会うことができた。「おやじも自分が写っているのは早くから知っていましたよ。姉が独身だった頃に気づいて報告すると『口外するなよ』と言ったのをそばで聞きました」「姉には母親代わりをしてもらっ





表：1945 年 8 月 6 日御幸橋西詰めで写っているとみられる人たち

	名前（年齢）	所属・職業	被爆場所
①	沓木明（12）	広島市立中学校 1 年	小網町の建物疎開作業現場
②	先小山勝（33）	旅館業	千田町 3 丁目の自宅
③	阪本儀三郎（55）	大工	東千田町の関西病院
④	阪本光子（13）	広島女子商業学校 2 年	千田町 1 丁目の広島貯金支局
⑤	坪井直（20）	広島工業専門学校 3 年	富士見町の路上
⑥	藤川勝行（29）	宇品署巡査部長	皆実町 1 丁目の自宅
⑦	藤田徳夫（28）	宇品署巡査	宇品町の宇品署
⑧	松林節子（13）	広島女子商業学校 2 年	千田町 1 丁目の広島貯金支局
⑨	松林保太郎（54）	医師	千田町 2 丁目の医院兼自宅
⑩	松重美人（32）	中国新聞社写真部員兼中国軍管区司令部報道班員	翠町の自宅兼理髪店

（注記）御幸橋西詰め 1・2 枚目に写っているとみられる 9 人と撮影者松重の被爆場所を 1945 年 8 月 11 日米軍撮影写真地図や、イラストに番号で示した。

N
W
E
S
中国軍管区
司令部
①
爆心地
中国新聞社
市役所
⑤
③
④⑧
⑨
文理科大
グラウンド
⑥
②
御幸橋
地方専売局
⑩
⑦
0 200 400 600 800 1000 m
1945年8月11日米軍撮影写真地図 竹崎嘉彦調製

1944 年 1 月、広島師範学校男子部付属国民学校に通っていた頃の沓木明（前列左端）。後列左端が父良之

同　明は耳の大きな少年だった（良之の孫提供）

たけれど、原爆のことを人前でよう話すなあと思いました。私はなれません」。母を奪われ自身は舟入国民学校で被爆した日々からを思い起こさせる御幸橋西詰めの惨状写真に複雑な思いを吐露した。

遺骨すら不明の男子学徒

「一年三組故沓木明父　沓木良之」の手記「真如の月やどる」は、息子が御幸橋までたどり着いていたのを知った驚きから始まる[33]。

「昭和四十三年六月五日、広島県動員学徒犠牲者の会発行の学徒誌が、届けられた。家内はむさぼるように頁（ページ）をくった。突如悲痛な声で『明がこゝに居ます』と呼んだ。自分も飛び込んだ」。同会が 1968 年に発行した『動員学徒誌』巻頭で「救護を乞う学徒の一隊」の説明による御幸橋西詰め 2 枚目の写真を見て、父母は「明だ」と確信する。耳の大きな息子の後ろ姿が鮮明に写っていた。中央に立つ背の高い男性の右 2 人目に当たる。

沓木明（当時 12 歳）は、広島市立中学校（基町高）1 年生だった。小網町（中区）一帯の建物疎開作業に出て遺骨すら不明となった。父良之（1893～1979 年）と母ヒサ（1900～1987 年）は「あの日」から末っ子で 6 男の消息を追い求めた。一家は当時、大正橋近くの段原末広町（南区）に住んでいた[34]。

良之は「明の姿を見出したる上は、此（こ）の写真を手がかりとして、当時の模様を探し求めんと」学徒誌の資料収集者を訪ねる。原爆資料館の小堺吉光（『広島原爆戦災誌』執筆者）から撮影者の松重と会い、市内で自動車工業会社を営む「藤田徳夫」にたどり着く。

「当時、藤田氏Ⓣは千田町派出所の警官で、原爆の投下直後、宇品運輸部にゆき、食料油を貰（もら）って来て、同僚の藤川Ⓕ警官と共に、のがれて来た学徒等のシャツ等をちぎって、之に食用油をふくませて、ビチャビチャに塗っている所だとのこと。手当をした学徒其（そ）の外（ほか）、個人については全然記憶はないが、こゝ迄（まで）あえぎあえぎたどりつき、油を塗ってもらって少しはらくになったのか『ありがとう』と礼をのべて引きさがったものもあり、其のそのむごたらしい姿は、今に至りても胸のつまる思いがする」

直接に藤田から聞き取った内容を書き残している。NHK 総合『ひろしま、人、

時、所』で 68 年 8 月 23 日放送の「動員学徒を悼む」座談会に、県動員学徒犠牲者の会関係者と出席し、藤田は手記に表したのと同様の話をしたという[35]。

原爆で遺骨すら不明となった息子への尽きせぬ思いからの探求はさらに続いていた。

「閃光いまも」と題した番組が 73 年 8 月 5 日深夜、『NNN ドキュメント '73』で全国放送される。「返還被爆資料展」会場で「私です」と名乗り出た当日の河内も収めた、広島テレビの制作。25 分番組の終盤、「耳の大きい子をわが子と信じる老夫婦がいる」とのナレーションが流れ、母ヒサが河内を自宅に訪ねて明の様子を少しでも確かめようとする。良之も後日訪ねた。「自分が生きようともがくだけで、何の記憶もなく怖いばかりで、写真もあまり見たくありません」。御幸橋での惨状をめぐる話を聞き、河内の左隣に写っているのは一緒に逃げた女子商同級生と知った。

良之の手記に 2021 年秋初めて接した筆者は不明を恥じるしかなかった。

77 年に書いていた手記は、御幸橋西詰め 2 枚目を載せて後ろ姿の人たちに左から「Ⓜ（同級生の旧姓を指す）Ⓚ（河内光子）Ⓕ（藤川）Ⓐ（沓木明）Ⓣ（藤田徳夫）」のイニシャルを入れていた。河内の父阪本儀三郎は、「藤川」の右肩越しに見えるやけどの男性だが記していない。河内が話さなかったのか、良之が表記を控えたのか…。いずれにしろ、市民の惨状を捉えた御幸橋西詰めの写真で 5 人の名前（姓のみの「藤川」を含む）を、儀三郎を含めれば、写っているとみられる 6 人を亡き明の父がほぼ同定していた。

沓木良之は、市立第一高等女学校（舟入高）で音楽担当の教諭だった。現在の平和記念公園南側に当たる一帯での建物疎開作業に出た 1・2 年生は全滅し、最多の生徒犠牲者が出た。「広島市女遺族会」57 年発行の『流灯』は良之の日記抄を収録している。「八月八日　昨日市女生徒を求めて、材木町をさまよったが、一名の生存者に会えず本日早朝登校して、疎開作業に出動した学徒及七教師全員死亡（但し生徒三名が収容中）の由悲痛の極みである。死体の火葬はじまる」。息子のみならず教え子も捜し回っていたのだ。

東区の専光寺にある沓木家の墓誌には「昭和二十年八月六日学徒動員原爆死明」と刻まれている。

食用油を塗る 2 人の宇品署員

沓木良之の手記にも出てきた、藤田徳夫（1917〜93 年）は、松重 1945 年 8 月 6 日撮影の 5 枚目に横顔がはっきりと写る。血がにじむ布を頭に巻いて被災者に「罹災証明書」を書く宇品署員である。「返還被爆資料展」が開かれた 73 年、「あの時、証明書を渡せたのは百人足らずだったと思います。証明書を書くより、被災者の手当てをする方が先でしたから」と、食用油をやけどした被災者に塗ったことを語っている[36]。

その藤田と同僚の「藤川」が 2 枚目に写る、御幸橋西詰めの千田派出所前で救護に当たる警察官なのか。食用油は未曾有の混乱の中でいつ、どこから持ってきたのだろうか。

宇品署長だった須沢良隆が被爆 13 年後の 58 年、当時の東警察署長や宇品警防

団関係者らと直後の活動を語った座談会で明かしていた[37]。速記の全文が残っている。

須沢は署そばの官舎で被爆し、署員が運転する車で午前 8 時 40 分ごろ、鷹野橋まで入った後の行動をこう証言する。「以前に広島三署の署長で救急用の食用油をビチクしておこうというので当時、西が 60 カン、東が 40 カンかな、宇品が 25 カンか、食用油をチョ蔵して地下に埋設していたのですが、之(これ)を一つほり出してこようというので自動車で千田の交番まで持って来たのが、おそらく 9 時頃から 10 時の間でした。そこで、やけどの応急手当てとして油を塗ってやった／巻ゲートルをはいた巡査が油をつけてやっているのが写真に出ております。あれは千田町の交番に間違いありません」[38]

食用油は午前 9 時から 10 時の間に千田派出所へ届き、署員が塗っていたのだ。翌 46 年初掲載の『夕刊ひろしま』写真説明がいう 1 枚目は「九時半ごろ御幸橋の西袂で撮す」が肯ける。松重は「この 1 枚目のシャッターを切るまでに約 30 分はためらいました」と書いたり話したりしている[39]。食用油の到着が 10 時だったとしても 2 枚目を撮り終え、「一息ついて時間をみたら十時半だった」という 52 年手記の撮影行動と不自然さはないだろう。

「定説」の「午前 11 時すぎ頃」よりやはり早い撮影だったのではないか。だからと言って、原爆による人間の惨禍を御幸橋西詰めで捉えた写真が持つ意味が減じるわけではない。代表的な原爆記録写真の内実をさらに知るため、油を塗る 2 人の宇品署員を追う。

ただ、その前に元署長の証言で見過ごせない点を押さえておく。写真 1 枚目は負傷者の向こう側で腰を屈め、2 枚目では頭から足下までの後ろ姿が見える背の高い男性は、「巻ゲートル」ではなく長靴を履いている。座談会での言い間違えなのか、写真の記憶がおぼろげだったのか。藤田の横顔がはっきりと写る 5 枚目をネガから高精細化したデジタル画像で確認すると、足元は手前の自転車に遮られてはいるが、長靴を履いている。

藤田は「8 月 6 日」朝、泊まり明けの宇品署（南区宇品海岸）で被爆した。爆心地から約 4.6 キロ、飛んできたガラス片で額を切った。妻子や両親と千田町 3 丁目で暮らす地元住民でもあった。1 歳 2 カ月で被爆した長男が今も家族と住む。

「おやじは原爆の話は家ではほとんどしなかったですね」。戦後はトラックの荷台などを造る実家の「藤田自動車工業」を 49 年に継ぎ死去直前まで働いたという。「そういえば、仏さんに参らせてください、と昔の同僚が来られたことがあった。おやじと一緒に油を塗ったが、すぐのうなった、と私の知らない話をした。『藤川』と言ったと思う」。会社敷地をマンションに建て替えた 97 年の頃。とはいえ、沓木良之が 68 年に藤田から聞き取り写真 2 枚目に「Ⓣ」と入れた、やけどを負った女性の向こう側に帽子姿が見えるだけでは、父「徳夫」と断定しようもなかった。

藤田は家業から戦前では珍しく車の運転免許を持っていた。宇品署保管の油 20 かんを宇品町と皆実町の各派出所には「五かんずつ置いて、千田へは十かんほど持ち帰って御幸橋のところで塗ってあげた」とゆかりの千田町住民との座談会で 76 年に語っていた[40]。

「藤川」のフルネームは、広島県警友会が 89 年に 133 編を収めて発行していた『原爆回想録』から分かった。「私は市内皆実町一丁目の自宅で原爆に遭い、窓硝

子で頭に怪我をしました」。それでも宇品署巡査部長は、皆実派出所に出向き、市中心部へ向かう署長須沢に随行して御幸橋を渡った[41]。

藤川勝行（長女提供）

「私たちは、派出所の前で消毒剤や火傷用の油などを負傷者に塗って包帯をしていましたが、何分にも多数の負傷者のことで無我夢中のうちに時間がたち、一八リットル入りの油かんはたちまちにしてなくなりました。中にはその場で倒れ込み動けなくなる者もあり手の施しようもありませんでした」[42]。写真2枚目、右側の負傷者足下には一斗缶のような器も写っている。

藤川勝行（1915～2001年）は当時、身重の妻と2歳を前にした娘との3人家族。長女は、母と広島駅へ向かう途中の的場町（南区）で被爆していた。安芸区の自宅で御幸橋西詰め2枚目を手にすると、中央に写る負傷者に囲まれた背の高い警察官に視線を落とした。

「頭の形や後ろ姿は似ています。父は背が高く、イメージ的には父のような気がします」。同席した夫も「私は身長163センチですが、それより高かった」といい、パソコンに収めていた生前の写真を見せてくれた。晩年も細身で長身だった。藤川は70年に警視正で退職し、安佐南区で暮らした。広島にいれば、御幸橋西詰めの惨状写真を新聞・テレビで目にする機会も多かったはず。しかし、長女夫婦は、生前の藤川から「8月6日」負傷者に油を塗った、写真に撮られたという話は聞いたことはないという。

「午後2時ごろ」または「午後4時すぎ頃」

1945年当時の宇品署は警察官50人とその他職員5人が配属されていた。爆心地から約4.6キロの距離とはいえ、死者2人、重傷5人、軽傷14人をみる[43]。千田派出所勤務の巡査部長金広満は、宇品海岸通りの食堂で閃光とすさまじい爆音に続き、どす黒い煙が市上空に上がるのを見て、取るものも取りあえず自転車で向かった。

「千田派出所に飛び込むと、窓枠、硝子の飛散した中で藤田巡査が一人頭に白い包帯姿で立っていました。私は御幸橋に立ちはだかり、警笛を吹き鳴らし、声を張り上げ」「『電車道を行けば病院があるんだ』『歩け、歩くんだ』と怒鳴る以外に方法はありませんでした」

『原爆回想録』に寄せていた一文である[44]。また、金広は被爆13年後の座談会にも出席していた。そこでは、派出所として「6、7名集まらなければならないものが3名くらいしか集まっていない状況で」と語っていた。新任の派出所勤務者2人のうち1人は広島電鉄本社近くで重傷にあり、もう一人は捜したが見つからなかったという。

署長だった須沢は58年の座談会で、混乱を極めた直後をこうも証言していた。「（午前）十時半頃、私達の宇品警察本部といいますか、私のおる所を今の専売公社の前にガソリンスタンドがありますが、あそこで午後三時頃までおって…」。59年の『西日本住宅詳細図』で確かめると、ガソリンスタンドは現在の宇品線

電停「皆実町六丁目」（45 年時の電停名は「皆実町三丁目」）の南側にあった。そこで「罹災証明書」を書く頭に包帯を巻いた藤田徳夫を撮った 5 枚目も、「定説」より早い午後 3 時までに撮っていたのだろうか。

既に述べたように、71 年発行の『広島原爆戦災誌』第 1 巻に載った 5 枚目の撮影時間は「午後 2 時ごろ」である。説明文は「皆実町の広島専売局前の電車停留所角において、負傷した宇品署の藤田警察官が、被爆者に罹災証明署を書いて渡した」と場所や人物も特定している。松重は写真を提供していた。しかも、御幸橋西詰め 1 枚目の写真が、「著者が自分のカメラ（コダック・レタッチ）で撮影した」とする書籍が翌 72 年に東京から出版され、被爆資料を研究する市民グループが抗議文を送った際にこう語っていた。「原爆投下後二時間余りたった十時半ごろ撮影した。負傷した警官が証明書を書いている写真など一連の写真は五コマあり、最後のコマは自宅内の妻も写っている」[45]

窓枠も吹き飛んだ自宅兼理髪店のさまを妻スミエを入れて撮ったのは「午後 2 時ごろ」。この撮影時間は一貫して変わっていない。72 年の証言をそのまま受け止めると、5 枚目はもっと早い時間帯にとどまらず、撮影ネガの順番も「定説」と違ってくる。松重は 81 年発行の『広島壊滅のとき』で 5 枚目を「午後 4 時すぎ頃撮影」とし、晩年には「午後 5 時ごろ」「午後 5 時半頃」と書いたり話したりするようにもなった。しかし、この程度の時間のばらつきは日常であっても珍しくはないだろう。

原爆被爆という未曾有の体験が、時間の記憶も吹き飛ばしたと言えるのではないだろうか。思い出そうとしてもかき消されていたため、あいまいになる。御幸橋西詰めの惨状写真をめぐる証言では、後ろ頭の同じ人物を指して 2 人が「私です」と名乗り出ていた。

欄干にもたれかかる旅館業者

「『御幸橋の被爆写真に私が…』」「三原の先小山さん名乗り　後ろ姿確認」。中国新聞 1985 年 9 月 12 日付は、この見出しで、松重撮影 1 枚目の御幸橋欄干の支柱に横向きにもたれかかる男性の姿に矢印を入れた写真を紙面 3 段で載せて、三原市に住む 73 歳の「先小山勝さん」が「自分の姿が写っている」と名乗り出たことを報じた。

記事は、「自分に間違いない」理由として、「午前九時から午後一時ごろまで」座っていてカメラを持った人が撮影していたのを覚えているほか①頭とあごの形がよく似ている。後頭部に白っぽく写っているのは幼児期の傷跡②当日着ていた薄茶色の開きんシャツによく似ている－との証言を紹介。当時、御幸橋から約 200 メートル離れた千田町で旅館を経営し、居間で新聞を読んでいる最中に被爆し頭や腹などにけがをしたが、見通しがよくなり目印になりやすい千田派出所の前まで歩き、つかいに出ていた妻の帰りを待っていた、とある。

御幸橋西詰めの写真は、当時を思い出すのが嫌でじっくりと見たことはなかったが被爆 40 年の 8 月末、NHK ニュースで写真が写され、「『あれから四十年も生きているあかしに』と中国新聞社などを通じて松重さんから写真を郵送してもらい確認した」という。松重の談話も付けている。「私が当日写したのは五枚だが、

写った人が名乗り出たのは先小山さんで二人目。ここにおられた方はなくなられたと思っていたが、生きておられたとは胸が熱くなります」と話していた。

松重がいう1人目は、73年の「被爆返還資料展」で名乗り出た河内光子のことだろう。松重は既に退職していたが、河内に会い写真を提供した。藤田徳夫とは前年の84年御幸橋架け替え工事の着工で一緒に取材に応じているが、河内との出会いが記憶に勝り「2人目」としたのかもしれない。実は、藤田は中国新聞65年の特集連載「ヒロシマ二十年」の「あの日と私」という小欄でいち早く名乗り出ていた[46]。

「焼けただれた動員女学生、欄干にうずくまる被爆者の群れ…代表的な原爆写真の一枚とされている写真の中で、手当てをしているのが私なのです／みんな服がボロボロになっているので、油をつける布はいりません。負傷者の服を破っては油をつけました」。日本新聞協会賞を受賞した一連の「ヒロシマ20年報道」は書籍化されたが、シリーズ「あの日と私」は収められていない。筆者も今回初めて気づいた。

先小山勝（1919～90年）は、御幸橋西詰めで写っているのは「自分」と名乗り出た、本来は健在3人目であった。ところが後述するように、メディアによって、いわば消し去られる。「これが私ですよ」と後に名乗った被爆者が著名になるに連れて、その人物が欄干の支柱にもたれかかっている被爆直後の姿だとみなされる。

記事は言及していないが、先小山が、御幸橋西詰めで待っていた、「つかいに出ていた」妻の久子（当時24歳）は45年8月31日に死去していた。高坂村（三原市）出身の先小山は、台湾で警察官をしたが、兄が堀川町（中区）で旅館「田中屋」を営んでいたことから移り住む[47]。旧豊田郡出身の久子と40年に結婚。市による爆心地から2キロ内の「世帯復元」地図で確かめると、千田町3丁目の御幸橋西詰め近くに「先小山」が記載されていた[48]。

「妻が帰ってこないので捜し回り、ようやく見つけたそうです。戦後はこちらに戻って役場勤めなどをしたが、私が物心ついたときも寝たり起きたり。名乗り出た新聞記事がきっかけで地元の小学校に呼ばれて話をしたこともあります」。先小山が再婚して50年に生まれた息子はそう話し、「なぜ、今さら」と逆に問いかけてきた。欄干の支柱にもたれているのは、別の男性になっていることは全く知らなかった。

欄干にもたれかかる工専生

「今は被爆者の世話役　御幸橋に写真残る　48年後の坪井さん」。中国新聞1993年8月7日付は、この見出しを付けて、広島県原爆被害者団体協議会（理事長・森滝市郎）の事務局入りした男性が、「これが私ですよ」と御幸橋西詰め1枚目の写真セラミックパネル前に立った姿と半生を報じた。パネルは御幸橋の掛け替え工事（幅35メートル、長さ156メートル）が完工した90年に設置されていた。「原爆の日」翌日の第2社会面トップ記事。

坪井直（1925～2021年）である。後に、日本原水爆被害者団体協議会代表委員を2000年から最期まで務めた。16年5月27日、現職の米大統領で初めて広

島を訪れて平和記念公園でスピーチをしたバラク・オバマに、「その事実（原爆投下）はあった。我々は未来に行かんといけん」とオバマ自身が 09 年プラハで提唱した「核兵器のない世界」を促した。名乗り出たのは、森滝ら亡き後にヒロシマの「顔」として知られる以前である。

広島工業専門学校（広島大工学部）3 年生だった坪井は、爆心地から約 1.2 キロの富士見町（中区）を歩いていて被爆した。似島の臨時野戦病院へ音戸町（呉市）から捜しに入った母が連れ帰って懸命な介抱を続け、一命を取り留めた。教師となり 60 年からは広島市内の中学で教え、毎年 1 学期最後の授業では自らの被爆体験を伝える。翠町中（南区）に在職していた 75 年、被爆教師 5 人による座談会でも御幸橋へ逃げたことを語っていた。

意識を取り戻して、「十分間は火のシャツを着て歩いていたのです。皆さん考えられるでしょうかね。それから私は逃げていくのですが、ちょうど御幸橋のふもとに避難場所ができていましたが、そこには何千人という人がいました。私もそこにたどり着いたのです。学校はもうすぐ目の前でしたが、私はもう自分で歩くことができなくなりました／いつ死ぬるかを考えていただけでした。そこで小石を拾って歩道の上に自分の名前を書いて…何かこの世に残したかったのです」[49]

93 年記事は、「『坪井ここに死す』と石で歩道に刻んだ」そのころ、松重が「シャッターを押した」とする。坪井が 1 枚目の写真パネル前で「指さした先に、後ろ姿の男性が写っていた」というが、どの人物かまでは記していない。欄干の支柱にもたれかかる男性と報じるのは 2011 年。河内光子の証言を原爆資料館ピースボランティアが聞き取りまとめた同年 2 月 19 日の出版記念会で、坪井と河内の再会を報じた記事で、1 枚目の写真をイラストにして支柱によりかかる男性に「坪井直さん」と入れた[50]。自紙が「先小山さん」と写真に矢印を入れて報じていたことは調べなかったのだろう、全く顧みていない。坪井も同年 11 月の「谷本清平和賞」の受賞で御幸橋 1 枚目の写真を掲げて講演に臨んだ。

放送局は映像が必須なだけに坪井の活動や半生に焦点を当てると、御幸橋西詰め 1 枚目の写真で欄干の支柱にもたれかかる姿が写っていると紹介していく。被爆 70 年の「8 月 6 日」に放送された NHK スペシャルは、御幸橋西詰め 1・2 枚目の写真を CG 化して被爆の実態に迫り、「消息が確認できたのは 4 人」と欄干にもたれかかる姿を「坪井」とイラストでも明記して証言を詳しく報じた[51]。先小山が「自分に間違いない」と名乗り出ていたことは書籍化でも扱っていない[52]。

今回の調査で筆者は、坪井が本当はどう思っているのかを、あらためて確かめようと 21 年 9 月 28 日付で手紙を送った。「自分だろうと思っているが正直、後ろ頭は自分では見えんよね。どう思うかいのう？」。雑談の折に坪井から直接に聞いた話や、先小山勝が 85 年に名乗り出ていたことを書いた。坪井に付き添う長女が、弟や妹にも確かめた上で横書き用紙 5 枚にびっしりと書いて 10 月 2 日付で返事を寄越してくれた。

御幸橋西詰め 1 枚目に写っていると 93 年に記事となり、「年をとった父のアゴのラインが（写真と）一致せず、私と妹は、本当にお父さん？と思っていました」という。しかし、やせ細りベッドに座る姿を横から眺めていたとき、「御幸橋のその人物と重なって見えました」。写真の人物に「頭の形がそっくり」と言った

のは身内ではないこと、先小山が名乗り出たことを知っていれば、「父は誰かが（写っていると）言った時『あれは先小山さんという人で』って言っていたと思います」とつづる。県被団協を置く広島平和会館が中区中島町にあった頃から（現在の大手町移転は 2004 年）人柄に触れてきた筆者も、「坪井ならそう言うだろうな」と受け止めた。返事は「『体験を語れるのは被爆者にしかできん。一人でも聞きたい人には伝える！』」と証言活動に取り組んだ父を「人のために生きた人生だった」と結んでいた。坪井は 10 月 24 日、96 歳で死去した。

坪井の訃報は各紙・放送で大きく報じられる。本人が御幸橋西詰め 1 枚目の大判プリントで欄干の支柱にもたれかかる男性に指さす場面を収めていた局は、全国ニュースや特集番組で紹介した。メディアが「被爆者の代表」坪井の体験を御幸橋西詰めの惨状写真からも強調するあまり、名乗り出ていた「無名の被爆者」は消し去られたと言えないだろうか。先小山は確かにその場にいた一人なのだ。

千田町 2 丁目の医師

松重 1945 年 8 月 6 日撮影の写真ネガフィルム原板 5 点が、広島市重要有形文化財に 2021 年 3 月指定された 3 月後、「奥に写っているのは義父だと思います」と、共に医師で亡き次男の妻が中国新聞社に連絡をしてきた。御幸橋西詰めの 1 枚目、中央で腰をかがめる男性の奥右に見える白いシャツ姿が義父という。「横顔や髪、けが人を見る医師としての視線。家族から見て間違いありません」[53]

松林保太郎（1890～1961 年）は、千田町 2 丁目で開業する医師だった。報道を機にあらためて確かめると「千田国民学校防空救護所」の救護部長も務めていた。広島原爆障害対策協議会が所蔵する、いわゆる「松坂義正資料」に市医師会が 58 年に実施していた「医師会と救護アンケート関係」が残っており、松林の直筆回答もあった。

爆心地から南東約 1.7 キロの医院兼自宅で被爆し、「左上膊（はく）部に外傷」を負った後の「行動」についてこう書いている。「御幸橋西詰めで直ちに救護を開始し、その後、青崎（南区）、奥海田（海田町）、矢賀国民学校（東区）などの各救護所で救護を行い、さらに日本医療団矢賀病院に半年勤務し、市民の保健と被爆者の救護に従った」

松林は、詳しい体験記も残していた。原対協の『広島原爆医療史』（61 年発行）で編集委員会代表を担った松坂義正へ死去前年の 60 年 12 月 30 日付で送っていた。岩見屋町（中区幟町）で被爆した松坂は、背負われて向かった東警察署（同銀山町）で自院の看護師 3 人と当日から救護に当たった。表題がない体験記は、県医師会が 70 年に出した『原爆日記』第 I 集に収められ、故人に代わって松坂が前書き・後書きを添えている。

松林は、救護資材がある千田国民学校が倒壊炎上しているため、向かったのは千田派出所。「かねてからもし千田国民学校に不慮の災難があった場合は、御幸橋の西詰め交番所の空地（あき）に罹災者が集まるようにと、町内会に連絡しておいた」。左肘上の外傷部には自身で包帯を巻き、妻と看護師との 3 人で向かう。医院からは宇品線に沿って南に 600 メートル足らず。

「直ちにここを仮救護所として、平素から防空用カバンに入れていた資材をつ

かってできるだけの手当を施した。距離と時間の関係上か、はじめは神経症が多かったように思う。ネオカンファー（強心剤）の注射をどんどん施すうちに、外傷者も多く避難してくるようになり…」「かくて正午前後であったかと思う、騎馬軍人（憲兵か）がきて『火災の危険が迫ってきたからすぐ待避せよ』と言うので、負傷者と共に大河方面へ避難する」。仁保町丹那（南区）の知人宅で休息をとり夕方に戻ったとみられる。「御幸橋の上に重傷者が沢山ねころんでいたが、翌七日には皆死んでいた／かくて自分の家屋（千田町二丁目）も焦土と化しているのを確認した」

松林がいう「神経症」は、目立った外傷はないが興奮状態にあった人たちだろう。御幸橋 1 枚目を高精細化画像でみると、皮膚も無残に焼かれた人たちにとどまらず一見無傷の姿も写る。2 枚目には日傘を差した女性が千田派出所前に立つ。全壊全焼する爆心地の半径約 2 キロ外から、何が起きたのかと駆けつけてきた近隣住民かもしれない。私たちが写真で見ているのは、御幸橋で続く地獄絵のような世界の始まりの一コマなのである。

健在の元女子学徒

今年 92 歳となる。竹内（旧姓松林）節子は、結婚後も国家公務員を続けて 1 男 1 女を育て、定年後は茶道を教える。夫をみとり「今は気ままに暮らしていますよ」と笑みを浮かべた。実は筆者は竹内の長男と同じ中・高校で一緒だった。息子との関係もあって中区の自宅で面会に応じ、原爆資料館による「被爆者証言ビデオ」の収録にも至った（2022 年 1 月に収録）。

しかし、その前に、被爆体験を人前で話したり、手記を書いたりする気にはなれないと念押した。「やはり思い出したくない。言い尽くせても今の人たちに分かりますかね？」。それでも御幸橋西詰め 2 枚目のプリントを手にすると、「阪本さんの左隣は確かに私です」と語った。1931 年 12 月 25 日生まれである [54]。

広島女子商業 2 年生だった松林節子は、爆心地から南東約 1.6 キロ、千田町 1 丁目の広島貯金支局 2 階で被爆した。「出勤簿か何かに判子を押そうと思ったら体が突然ドーンと押されて真っ暗、みんなの後をついて外に出たら電車通りの家々が将棋倒しのように倒れていました」。誰彼なしに宇品線路面電車の通り沿いに鷹野橋へ向かった。眼球がぶら下がったり、皮膚がずるむげになったりした人が近づいて来るのを見て、足は南に転じた。

「怖いとか、悲しいとか、感情は出てきません。とにかく逃げるので一生懸命でした」

一緒に逃げた河内（旧姓・阪本）光子とは舟入国民学校（中区）からの同級生だった。駄菓子を売っていた阪本宅に遊びに行ったこともあるという。河内は広島工業専門学校や修道中を回ったと語っていたが、竹内は迂回をせず電車通り沿いに御幸橋へ一緒に向かった、と記憶する。「阪本さんのお父さん（儀

転校した、広島市女に通っていた頃の竹内（旧姓松林）節子㊨＝本人提供

三郎）がなぜいるのか分からなかったけれど、お父さんの指導で逃げたと思います。子どもの足でしたからね、橋に着いたのは10時にはなっていたでしょう」。阪本の父は東千田町の仕事先で被爆し、長女の光子を捜して現れた。

「御幸橋には座り込んでいる人がもういっぱいいましたね。私は何をしているのだろうとのぞいてみた。それがこの写真です」と2枚目を説明する。会う前は「見たいと思わない」と話していた写真が呼び起こしたのか、語りたくない記憶も明かした。「御幸橋より川土手にいた時間の方が長かったですね。一緒に連れて行ってくれという少年がいて、あの子はどうなったのか…罪の意識が今もあります」

両親と住む舟入川口町（中区）へとにかく戻りたかった。元安川と太田川（本川）を阪本親子と渡った。河内は晩年に始めた証言活動で小舟にも乗ったというが、竹内は潮が引くのを待ってどちらも歩き渡ったという。「カニが足に触ったのを覚えています。私は逃げる間ずっとはだしだったんでしょうね」。避難行動を共にしても記憶はそれぞれに違う。鮮烈な体験の記憶を沈み込ませていても、語り始めると細部も疎かにしなかった。

戻れたのは夕方。自宅は屋根が吹き飛び、イチジク畑に蚊帳を吊って寝た。「阪本さん親子も一緒でした」。終戦を迎えると急性放射線障害に見舞われた。「鼻からの出血が毎日止まらない。それでも毒が体から出たのがよかった。私が助かったのはそれしか考えられません」。母の親族が住む石内村（佐伯区）で過ごし、自宅近くの市立第一高女に編入した。

河内を一貫して「阪本さん」と呼んだ。聞けば、戦後は一度も会ったことがなく共通の知人を通じて消息だけは互いに知っていたという。では、竹内は、御幸橋2枚目に自身も写っていることはいつ、どのように知ったのだろうか。河内が「三角襟のセーラー服は私です」と名乗り出た73年の「返還被爆資料展」がきっかけ。「週刊誌もすごく来ました。写真を見て自分だと思ったけれど、『知りません、私は違います』と答えました」。竹内が、河内の左隣は自分だと判断した決め手は、やはり着衣からだった。

「私は上着は白の国民服、下は木綿の着物を縫い直したズボンを履いて（貯金支局に）出ていました」。被爆直後の自身の背中が写るプリントに視線をじっと落とし、こう続けた。「生き延びているのが不思議な気がしますよ」

「8月6日」ネガの戦後

松重は1945年8月6日を撮影しただけではない。被爆当日の写真ネガフィルム（6×6センチ判）5点を、敗戦に続く米軍主導の占領統治という、かつてない動乱期に守り残した。でなければ今日ネガは現存していなかった。軍所属のカメラマンが撮った、原爆の惨禍を直後に記録したネガは、敗戦を機に命令でほとんどが焼却されている。残ったのは個々人の意志からである。軍報道班員でもあった松重の撮影翌日の足取りからをたどる。

やけどを負った姪を自転車の荷台に乗せて翌8月7日、翠町（南区西翠町）を離れた。松重の妹がいた府中町から、そして呉市まで付き添い、2歳の長女や両親の疎開先である愛媛県・大三島へ向かった。三次市在住の長女は、被爆者健康手帳によると「8月9日」の入市被爆。松重もそのころ広島へ戻ったとみられる。

中国新聞は本社員の 3 分の 1 に当たる計 114 人が死去するが、動ける社員は温品村（東区）の疎開工場へ出ていく[55]。牧場を借りて輪転機を牛舎に疎開させていた。暗室は横穴式防空壕だった[56]。

松重は撮影の半月後にネガを疎開工場で現像する。「設備があるわけでないし、折り（まま）からの月明かりを利用しておこなった。仮眠テントのそばを流れる石清水で水洗いし、近くの木の枝にぶらさげての乾燥であった」[57]。雑誌『世界』に載った 2000 年インタビューでは、「秋風をかんじる頃、六日に撮った五枚のフィルムを切りはなし、一枚ずつ手製の保存袋に入れたのです」「私の写真は社内でももう知られていて、一〇月半ばでしたか、米国調査団が社にやってきた」時に「例の写真も見せてあげた」と答えている[58]。

米太平洋軍顧問医アシュレイ・オーターソンや東京帝国大教授都築正男らによる日米合同調査団である。広島班は 10 月 12 日に入った。欄干の影がアスファルト橋上にくっきりと残る万代橋に案内して、自身はガラス乾板で撮った。このネガも現存している。

占領下の掲載

「8 月 6 日」撮影の 1・2 枚目、御幸橋西詰めの惨状写真が、中国新聞が別会社で発行した『夕刊ひろしま』が 1946 年 7 月 6 日付 2 面で「世紀の記録写真」の主見出しを付けて初公開したのは既に述べた。脇見出しは「米誌が全世界へ紹介」。記事にはこうある。

「先日マ司令部直属映画班のカメラマンが天然色映画撮影のため来広した際、この写真が米誌に掲載され、カメラマンは死んだことになつてゐると聞かされてビツクリしたほどで、同米国カメラマンはこれを米誌『ライフ』に版権一万ドルで掲載したいと希望したが承諾しなかつた」。また、1 面掲載の AP・共同電によるビキニ環礁での米軍原爆実験の報にも触れていた。最高司令官ダグラス・マッカーサーの映画班とは米国戦略爆撃調査団の撮影隊である。広島へ 46 年 3 月に入り、がれきが広がる中での市民の暮らしや、市役所での遺骨引き渡し、輪転機が回る中国新聞本社などをカラー映像で収めた[59]。

しかし、御幸橋で市民の惨状を撮った写真をこの時期に掲載した米誌は今に至るも確認されていない。世界的なグラフ誌『ライフ』が、「原爆さく裂直後の写真」を「米国初公開」と 7 頁・14 枚にわたり特集掲載するのは、GHQ 占領統治が明けた年の 52 年 9 月 29 日号である。広島は、松重撮影の御幸橋西詰めの 2 枚目を「さく裂 10 分後、ヨシト・マツシゲが撮った〝生ける屍〟現像ネガは市郊外の小川で洗った」とのキャプションを付けて冒頭で扱い、5 枚目は全 1 頁を充て、朝日新聞大阪本社写真部員で「8 月 9 日」に入った宮武甫（1914～85 年）が撮った傷だらけの母子などを載せた。長崎は、西部軍報道班員で福岡から「8 月 10 日」に入った山端庸介（1917～66 年）の写真である。

「米誌が全世界へ紹介」は、広島地区の新聞社は事後検閲だったとはいえ、それをかいくぐろうとする理由付けでもあっただろう。苦肉の策ともいえる見出しやエピソードを添えて掲載した『夕刊ひろしま』46 年 7 月 6 日付だが、「写真に伴う記事の一部は不穏」「違反」とみなされる。そして、松重と「整理部記者田

島賢祐」が、CCD 第 3 地区検閲局広島分局に呼び出されたのだ。松重が御幸橋 1・2 枚目を掲載構図で焼き直して提出していたのを確認したのは、「変遷していた『撮影時間』」で既に述べた。自らも原爆体験を持つ堀場清子の精緻な調べがあったからだ。

しかし、堀場の著書『禁じられた原爆体験』を基に、この「田島賢祐」が占領明けの 52 年に出た『原爆第 1 号ヒロシマの写真記録』を編集した－とする大学発の論考も近年出てきた。本当なのか。占領期研究を深める専門家のためにも確認できたことを紹介する。

結論から記せば、「田島賢祐」は『原爆第 1 号ヒロシマの写真記録』の編集者とは断定できない。同書あとがきや奥付はそもそも「田島賢裕」である。松重が同じ読みとみられる「賢裕」を「賢祐」と堀場に伝えた可能性もある [60]。今回、中国新聞社に照会すると、編集局整理部から『夕刊ひろしま』へ 46 年 5 月 31 日付で異動した、読みは「たじま」記者が確かにいた。辞令原簿は「多嶋質祐」である。ただ、それ以降の人事記録は残っていない。

米軍が投じた原爆の惨禍を占領期に扱うことは、いわばタブーでもあった。『夕刊ひろしま』は発刊の辞に「勤労大衆の力によって育てられる新聞」とうたい、中国新聞社からの出向者（31 人）は組合活動の急進派が多く、労働争議も激しかった。社の人事記録に残っていない、争議から 49 年に「夕刊ひろしま新聞社」を解雇された 10 人や、翌 50 年の朝鮮戦争で GHQ が指示した「レッド・パージ」で中国新聞社を追放された 21 人の中にも、「多嶋質祐」「田島賢祐」「田島賢裕」の名前は見当たらない [61]。

「田島賢祐」を 52 年写真集の編集者として「かれの原爆への取り組みは本物だったのである」とみたり、それも参考に別の研究者が「中国新聞社を退社していたあの田島賢裕」が 52 年の写真集の共同編集者となり、「今度は実際に米誌『LIFE』に松重の写真を掲載して世界に紹介する仲介役を果たした」と決めつけたりするのは、勇み足だろう [62]。典拠とする『禁じられた原爆体験』は、「田島賢祐」が 52 年写真集の編集者とは全く記していない。

松重「8 月 6 日」撮影の写真は占領下、『夕刊ひろしま』以外でも公表されている。広島市や広島商工会議所などによる「広島平和協会」が 49 年に発行した「ヒロシマフォトアルバム」だ [63]。英語版も作った。御幸橋西詰め 1 枚目や、佐々木雄一郎（1917～80 年）が 45 年 8 月下旬に撮った爆心地の島病院跡の写真など 24 点を収録。市長浜井信三の「原子戦争の惨害を経験した。私達廣島市民は世界の人々が廣島を回顧することによつて再び同様な惨禍を繰返さないやうに心から祈念する」の呼びかけや、米国北部バプテスト連盟が提唱した「ノーモアヒロシマズ」への賛同、最終ページに「広島市戦災記録」を盛り込んでいる。

さらに朝鮮戦争が 50 年 6 月 25 日に勃発する直前、共産党機関紙『アカハタ』の中国総局が発行した『平和戦線』同 6 月 9 日付で使われる。「再び原子爆弾を繰返すな　全愛国者は平和戦線へ！」の見出しが付く「主張」や、峠三吉の詩「八月六日」が載る紙面には、6 枚の写真が載っている。御幸橋 1 枚目や、中国新聞社写真部の山本儀江（1911～98 年）と谷川長次（1924～2002 年）が復員後の 45 年 11 月に共同で撮った廃虚の組み写真の 1 枚、山端庸介が「8 月 10 日」に撮影した長崎原爆の代表的な 1 枚となる「おにぎりを持つ母と子」など。いずれも撮

影者・提供者の名前はない。米軍が投じた原爆の惨禍を捉えた写真は、占領下にあっても共産党関係者らを通じて水面下で出回っていたことがうかがえる。

GHQ による検閲は 49 年 10 月 31 日の CCD 廃止でひとまず終了するが、朝鮮戦争下の「レッド・パージ」というむき出しの圧力が報道機関を襲った。報道のくびきと自己規制が解けるのは、対日講和条約が 52 年 4 月 28 日に発効した主権回復からである。

「原爆被害の初公開」と表紙に刷り増刷 4 回で 70 万部にも上ったという『アサヒグラフ』52 年 8 月 6 日号[64]、松重撮影写真を収録した『原子爆弾第 1 号ヒロシマの写真記録』や、岩波写真文庫『広島－戦争と都市』が出た[65]。日本での反響ぶりも紹介して『ライフ』同年 9 月 29 日号は「検閲なし」と広島・長崎の壊滅直後の写真を特集したのである[66]。

原爆記録写真の保存・活用

松重「8 月 6 日」撮影のネガは機材も乏しい疎開工場先での現像だったため、経年とともに傷みが避けらなくなる。松重は、『科学朝日』の取材で長崎から広島にも入った松本栄一（1915～2004 年）や、日本映画社の原爆記録映画スチール担当で広島へ入った写真家菊池俊吉（1916～90 年）と林重男（1918～2002 年）らと 1977 年、東京で記者会見して、ネガの「永久保存」を訴え、国や広島、長崎市に「資料センター」の設置を求めた。

翌 78 年には、地元で岸田貢宜らと原爆記録写真の保存を呼び掛け、「広島原爆被災撮影者の会」の初会合を開く[67]。宇品町にあった陸軍船舶司令部や船舶練習部、県警察部の元写真班員、元学徒ら…。会は撮影者 20 人（うち遺族 7 人）が寄せた未発表を含む計 285 枚を収録した写真集『広島壊滅のとき』を 81 年発行。2000 部（頒布価 2000 円）を作り、収益金 30 万円を原爆病院に寄付した。収集プリントは広島市が設けた平和文化センターに託し、「原爆被災の実態の広報」「核兵器の廃絶への意識高揚」を図るため無償使用を承諾する[68]。撮影者らが呼びかけて原爆記録写真の公的な保存と活用が被爆地で始まったのである。

しかし、松重は、保管してきたネガ 5 点のうち御幸橋西詰め 1・2 枚目のネガをめぐって、想像もしなかった「著作権確認等請求訴訟」で被告とされた。中国軍管区司令部総動員班長だった横浜市の会社顧問が、御幸橋上で写真を撮ったのは自分だとして 94 年 9 月 19 日、松重を相手取って広島地裁に提訴。ネガを引き渡せと求めてきたのだ。同地裁は 97 年 6 月 27 日、「原告の供述の証拠価値を否定せざるを得ない」と訴えを退けた判決を言い渡す。原告は広島高裁に控訴したが 98 年 6 月に棄却。最高裁が上告申し立てを不受理とする決定が出るまでには、一方的な訴訟に巻き込まれて 4 年の歳月を費やさなくてはならなかった[69]。自らが撮影して残したネガを守るために弁護士報酬も要った[70]。

松重は、「8 月 6 日」撮影ネガの保存と写真の活用から 98 年 10 月 22 日、ネガ 5 点を中国新聞社へ譲渡した[71]。「広島原爆被災撮影者の会」代表として平和文化センターへ提供していた自身撮影の写真 19 枚についても、2004 年 12 月 10 日に編集局と、続いて編集局は同 27 日に原爆資料館と「撮影写真の活用に係る覚書」を交わす。会が 81 年にセンターと結んでいた「申し合わせ」の趣旨を尊重し、「松

重美人撮影／中国新聞社所蔵」のクレジットを明記して資料館による展示・調査研究などの無償使用を承諾した[72]。覚書は「原爆犠牲者の尊い犠牲を後世に伝え、核兵器のない世界を築くため」、貴重な写真を報道機関が占有するのではなく被爆地の共有資料・財産として生かそうとの考えから。自らが被爆した未曾有の事態の中で写真を撮り残した松重の願いでもあった。

松重「8月6日」撮影ネガ5点は今、文化庁が所管する国立映画アーカイブ相模原分館（神奈川県相模原市）のフィルム保存庫（温度10度、相対湿度40%）に収められている。2021年3月26日に広島市重要有形文化財（歴史資料）に指定されたことから、中国新聞社は同年10月8日、写真原版の収集・保存に取り組む日本写真保存センター（2006年設立）に寄託し、センターを通じて相模原分館へ入庫となった。

22年2月10日には、原子雲や炎上する市街地を陸軍船舶練習部（南区宇品東）から撮影した木村権一（1905〜1973年）のネガ（6×6センチ判）6点や、原子雲を学徒動員先の陸軍兵器補給廠（南区霞）から最も至近距離で収めた深田敏夫（1928〜2009年）のネガ（3×4センチ判）4点が、原爆資料館から同センターへの保存業務委託を通じて相模原分館に入った[73]。木村の遺族と深田は「広島原爆被災撮影者の会」に写真を提供し、ネガを後に資料館へ寄贈した。

これで、松重、木村、深田が撮影し、それぞれが守り抜いた「1945年8月6日撮影」ネガの現存15点は、すべて国立機関のフィルム保存庫で保存されることになった。

広島原爆を記録した歴史的なネガの保存が大切なことは言うまでもない。さらに重要なことがある。

御幸橋西詰めの惨状写真一つみても、助かった一人ひとりの体験は重く、遺族の悲しみは深い。言い尽くせぬ原爆の惨禍が刻み込まれていた。知られていない証言や記録、撮影者の苦闘が潜んでいた。

原爆で人間はどうなったのか、核時代の幕開けは世界に何をもたらし続いているのか。「無言の証言者」でもある一連の写真から知る、考えを深める。原爆資料館にとどまらず、被爆地ヒロシマからの発信や継承を担う各機関・市民は、貴重な写真資料が持つ意味をさらに読み取り、次世代に世界に絶え間なく働きかける。二度と撮ることがあってはならない原爆記録写真を生かすことである。

おわりに

本稿を閉じるに当たって、松重が1981年12月8日、広島市で開かれた「軍縮と安全保障に関する独立委員会」（通称パルメ委員会）で発した言葉を紹介したい。

「私が写した5枚の写真や、現在残っている数千枚の原爆写真でも本当の原爆の恐ろしさを語ることはできない」

原爆の惨禍を撮った者たちの共通の思いだろう。だからこそ、原爆記録写真を読み取ることはヒロシマの務めであり、未来を築く営為でもあるはずだ。

脚注

1　原民喜「碑銘」『定本原民喜全集Ⅲ』（青土社、1978年）37頁。

[2] 西本雅実「ヒロシマの記録－原爆写真の撮影者たち」中国新聞 2007 年 8 月 14 日付。「原爆記録写真～埋もれた史実を検証する」『広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告』第 4 号（2008 年）。撮影者一覧はその後の判明分を含めて『爆心地の写真 1945-1952』（photographers' gallery、2014 年）38-50 頁に収録。

[3] 松重は 2005 年 1 月 16 日、急性腎不全のため広島市中区の病院で死去した。92 歳。

[4] 理髪店は松重が被爆した同じ場所でおいが続けている。長女は三次市で健在。

[5] 爆心地からの正確な距離を竹﨑嘉彦（地理学）の協力で計測すると 2833 メートルである。

[6] 松重美人「八月六日の朝」梅野彪・田島賢裕編『原爆第 1 号ヒロシマの写真記録』（朝日出版、1952 年）86-88 頁。聞き手が証言をまとめた可能性があるが、「筆者」とあるものは後年も手記として扱う。

[7] 松重が撮影に使った「マミヤシックス」は残っていない。銀塩カメラ収集家で 1940 年発売からのマミヤシックスを所蔵する広島市在住の菅原博から説明・文献を受けた。

[8] 松重の中国新聞入社前「昭和十八年一月」履歴書が残る。既刊書籍は誤認もあり、長女の同意を得て引く。1913 年 1 月 2 日生まれ、32 年呉港中（呉港高）を卒業。名古屋市の商事会社に勤め 35 年依願退社して広島へ戻り、父の船舶物品売買業に従事。41 年 1 月芸備日日新聞（中国新聞の姉妹紙・呉新聞が 40 年合併）入社、芸備が閉じた 41 年 9 月退社。再び「家業ニ従事現在ニ至ル」。兵役は「乙種」。毛筆で記している。

[9] 松重美人「あるカメラマンの記憶－1945 年 8 月 6 日」『世界』1963 年 10 月号（岩波書店）201 頁。米英ソ核停条約の交渉開始や第 9 回原水爆禁止世界大会の分裂から特集を組み、『ヒロシマ・ノート』（同、1965 年）となる大江健三郎「広島一九六三年夏」などと掲載。

[10] 松重美人「陸軍報道班員ヒロシマ日記」『丸』1970 年 9 月号（潮書房）77 頁。

[11] 松重の死去を受けた、全国紙の長文追悼記は「がれきから掘り出した愛機『マミヤシックス』を手に市中心部の司令部へ走った。撮ったのは、わずかに御幸橋での二枚と、全壊した自宅などの三枚」としている。

[12] 前掲「八月六日の朝」87 頁。

[13] 広島平和文化センターが 1985 年 8 月 29 日に開いた「広島原爆被災写真撮影者による証言」座談会には、地元在住 6 人と県外 2 人が出席し、ビデオテープで収録。86 年度開始の「被爆者証言ビデオ」の先駆けとなった。証言は「反核・写真運動」編『原爆を撮った男たち』（草の根出版会、1987 年）にも収められている。

[14] 広島原爆被災撮影者の会（代表・松重美人）編・発行『広島壊滅のとき－被爆カメラマン写真集』（1981 年）。B6 判 157 頁。2000 部を発行。

[15] 前掲 135 頁は西消防署皆実出張所を「木造の 3 階建て」とするが、広島市編・発行『広島原爆戦災誌』第 1 巻総説編（1971 年）114 頁によると「木造二階建て」だった。

[16] 前掲「あるカメラマンの記憶」203 頁。

[17] 松重美人「涙でうるんだファインダー」中国新聞労働組合編『消えたペン－新聞労働者の8月6日』（汐文社、1988年）221-222頁。原爆死没社員73遺族への聞き取りを収録した同書の編さんに当たった元書記長によると、松重は直筆原稿を寄せてきた。

[18] 松重美人『なみだのファインダー』（ぎょうせい、2003年）20頁。ほかにも本人の記述とはみられない誤りが散見される。「長男」を疎開させ（19頁）、妻の名は「スエミ」（19頁から）、履歴では「1944年中国軍管区司令部報道班員」（60頁）とするが、長男は戦後の1948年10月生まれ、妻はスミヱ、同司令部の設置は45年6月である。

[19] 広島地方裁判所「平成6年（ワ）第1362号」。元中国軍管区司令部総動員班長が御幸橋上で写真を撮ったのは自分だとして1994年に提訴し、同地裁は97年6月27日原告の訴えを退けた。判決文に被告となった松重の撮影をめぐる供述が記されている。

[20] 中国新聞社企画局に所属していた山田精三が水分峡で撮った原子雲も載せている。中国新聞社史編纂委員会『中国新聞八十年史』（中国新聞社、1972年）184-185頁によると、『夕刊ひろしま』は1946年6月1日創刊。政府による新聞用紙の割り当てから3万部でスタートし、中国新聞社から31人が出向。50年10月1日『夕刊中国新聞』と題字を改めた。

[21] 堀場清子『禁じられた原爆体験』（岩波書店、1995年）64頁。1930年生まれの堀場は、医師の祖父がいた現安佐南区に疎開し、避難してきた被災者の救護に当たっていた。

[22] 前掲「涙でうるんだファインダー」222頁。

[23] 広島大原爆放射線医科学研究所助教久保田明子（アーカイブズ学）の協力を得た。

[24] 「ヒロシマ二十年」を手掛けた平岡敬（1991～98年広島市長）は、「松重さんがネガを持っているのは編集局では知られていたが、被爆の実態を深くとらえる企画がそれまでなくて載せる機会がなかった。松重さんと新聞社との関係も微妙だった」と振り返った。

[25] 仁科記念財団編『原子爆弾－広島・長崎の写真と記録』（光風社書店､1973年）。

[26] 前掲『広島壊滅のとき－被爆カメラマン写真集』を基に、松重は85年に80枚を収録した普及版『被爆の遺言－被災カメラマン写真集』を、96年には英文併記版も発行した。

[27] 飯島宗一・相原秀次編『写真集原爆をみつめる－1945年広島・長崎』(岩波書店、1981年)

[28] 東京都写真美術館主催「核－半減期」（1995年9月21日～11月10日）。松重ら広島・長崎の直後を撮った7人と、戦後に「被爆」をとらえた東松照明ら5人の写真を展示した。

[29] 中国新聞社と広島市は2001年2月7日付で「ヒロシマ被爆資料等写真の保存・活用に係る覚書」を締結。原爆の惨禍からの歩みを撮ったネガフィルム2802点を原爆資料館と共同でデータベース化した。中国新聞2004年3月22日付。

[30] 広島テレビ制作「閃光いまも」『NNNドキュメント'73』1973年8月5日放送。横浜市にある放送ライブラリーが番組を収蔵し、原爆資料館でオンライン視

聴ができる。

31 高橋昭博・NHK 取材班・土田ヒロミ『きみはヒロシマをみたか広島原爆資料館』（日本放送出版協会、1982 年）96、100 頁。

32 河内光子が 1995 年に書いた体験記は、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館が収蔵・公開。「被爆体験記集」38 巻 415 頁。

33 沓木良之「真如の月やどる」旧制広島市立中学校同窓会編『鎮魂』（旧制広島市立中学校同窓会・旧制広島市立中学校原爆死没者遺族会、1977 年）27-29 頁。

34 戸籍記載内容は、広島・埼玉県在住の孫から得た。

35 中国新聞 1968 年 8 月 23 日付番組覧によると、「動員学徒を悼む」座談会は NHK 総合午後 1 時 5 分から 20 分間の放送。

36 中国新聞 1973 年 6 月 15 日付。「ヒロシマ・ナガサキ返還被爆資料展」に伴い、写真ゆかりの人を紹介する 10 回連載「よみがえる『あの日』」第 1 回。藤田徳夫が罹災証明書を書く写真説明は「御幸橋西詰めで、正午過ぎ」としている。

37 大手町（中区）にあった西警察署は壊滅し、署長松本佐四郎は本署で原爆死した。

38 座談会の速記全文は広島原爆障害対策協議会（1953 年設立）が所蔵する「松坂義正資料」に含まれている。2021 年 11 月 2 日閲覧許可を得た。

39 前掲『なみだのファインダー』27 頁。

40 「思い出の千田町一丁目－〝街と住民〟」広島市立千田小学校編『千田小ものがたり』（千田郷土資料編纂委員会、1977 年）116 頁。

41 広島県警友会編・発行『原爆回想録－四十年目の検証』（1989 年）240-241 頁。同書には「宇品署巡査」とあるが、同会を通じて広島県警察本部に照会すると藤川は当時、巡査部長だった。千田派出所は 66 年 4 月 1 日鷹野橋派出所に統合、解体となる。

42 前掲『原子爆弾』は写真「4」収録の御幸橋西詰め 2 枚目の説明で、食用油による応急手当ての始まりは「1 人の巡査（後に須沢巡査部長と判明）」としたが、宇品署長須沢良隆の勘違いとみられる。

43 広島県警察史編修委員会『新編広島県警察史』（広島県警察連絡協議会、1954 年）672、676 頁。

44 前掲『原爆回想録』231-232 頁。

45 中国新聞 1972 年 11 月 12 日付。

46 「あの日と私」中国新聞 1965 年 7 月 25 日付。

47 先小山の長兄が営む「田中屋」は広島商工会議所編・発行『広島商工人名録』（1941 年）459 頁に経営者の名前入りで記載されている。

48 広島市 1969～76 年度「原爆被災全体像調査事業」による「世帯復元」地図。

49 「未来を語り続けて－被爆教師の体験談」広島市立翠町中学校 PTA 編・発行『かけはし』PTA25 周年記念誌別冊（1975 年）18 頁。

50 中国新聞 2021 年 2 月 20 日付。河内光子の半生を聞き取った書籍は、住友銀行広島支店の壁に貼られた収容者名簿を見る市民らの写真を「松重美人撮影家族提供」として載せているが（29 頁）、陸軍船舶司令部写真班員だった川原四儀（1922～72 年）の撮影である。松重が編集に当たった『広島壊滅のとき』は川原四儀を明記して掲載している（18 頁）。

[51] NHK スペシャル『きのこ雲の下で何が起きていたのか』2015 年 8 月 6 日放送。

[52] NHK スペシャル取材班『原爆死の真実－きのこ雲の下で起きていたこと』(岩波書店、2017 年)。

[53] 中国新聞 2021 年 6 月 21 日付。

[54] 被爆 70 年史編修研究会『広島市被爆 70 年史』（広島市、2018 年）の映像編 DVD が収める「10 人の証言集」にある竹内節子の生年テロップ「1932 年 6 月」は誤り。

[55] 中国新聞社編・発行『1945 原爆と中国新聞』（2012 年）15、31-32 頁。

[56] 日本新聞公社『日本新聞報』1945 年 10 月 2 日付。

[57] 川西恒夫「被爆広島の写真記録者たち」広島市編・発行『広島原爆戦災誌』第 5 巻資料編（1971）985 頁。市公文書館が整理を進める「原爆戦災誌編さん資料」には、松重が提出していた直筆原稿 400 字 3 枚が残っていた。

[58] 白井久夫「被爆の遺言－写真家・松重美人の歳月」『世界』2000 年 9 月号 36-37 頁(岩波書店)。筆者は元 NHK 番組制作者。『幻の声－NHK 広島 8 月 6 日』(岩波書店、1992 年）も著している。

[59] 中国新聞ヒロシマ 50 年取材班『検証ヒロシマ 1945-1995』(中国新聞社 1995 年) 308 頁。カラー映像は、黒澤明デビュー作『姿三四郎』を手掛けた三村明が撮影した。

[60] 前掲『消えたペン』222 頁。「その時の整理記者田島賢裕記者と私が出頭した」と「賢裕」と記している。

[61] 広島県地方労働委員会事務局編『広島県地方労働委員会十年史』(1956 年) 65-70 頁。日本新聞協会『新聞協会報』1950 年 8 月 10 日付。

[62] 中国新聞 1953 年 8 月 6 日付は、軍属で「宇品の船舶兵団の情報班」にいた男性が自身撮影の写真を『ライフ』に提供したと紹介。男性の名は『原爆第 1 号ヒロシマの写真記録』にも協力者として載るが、船舶司令部写真班員だった川原四儀は元同僚の尾糠政美らと 68 年 7 月 11 日、広島市役所で所蔵の 25 枚を公表した際、「資料館などにある写真は複写されたもの」と言い、島根県に住んでいた尾糠は 2005 年 7 月 10 日の筆者取材に、班員 8 人が写るプリントで各自の名前を挙げ、男性は「徴用で来ていた人でカメラマンではない。この人が写したことになっているのはおかしい」と証言した。

[63] 佐々木雄一郎編『ヒロシマフォトアルバム』(広島平和協会、1949 年)。

[64] 朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史　昭和戦後編』(朝日新聞社、1994 年）155 頁。『アサヒグラフ』1952 年 8 月 6 日号は、撮影者名は記していないが、船舶司令部写真班員だった尾糠政美（1921～2011 年）が 45 年 8 月 7 日似島で撮った全身やけどの兵士や女性を冒頭に掲載している。

[65] 岩波写真文庫『広島－戦争と都市』(1952 年）は、「御幸橋西詰」の 2 枚と罹災証明書を書く男性（写真説明なし）の 3 枚を掲載。被爆 7 年後の広島は長野重一が撮影。

[66] 前掲『きのこ雲の下で何が起きていたのか』は、松重撮影の御幸橋西詰め写真は「7 年間人目に触れることがなく『ライフ』がスクープした」と紹介。番組を見た広島の被爆者でもあるノンフィクション作家関千枝子は、『夕刊ひろしま』1946 年 7 月 6 日付が初出であることを NHK 広報部門に指摘したや

りとりを含め、被爆作家中山士朗との『ヒロシマ往復書簡』第Ⅲ集（西田書店、2017 年）で論じている。108、114-120 頁。関は 2021 年死去、中山は 22 年に死去した。

67 広島原爆被災撮影者の会は 1978 年 9 月 14 日、広島 YMCA で第 1 回会合を開き、12 人が出席。同席した宇吹暁（当時、広島大原爆放射能医学研究所助手）による手書きメモが、サイト「ヒロシマ遺文」に 2018 年 1 月 22 日アップされている。

68 「広島原爆被災撮影者の会」と広島平和文化センター1981 年 10 月 20 日付「広島原爆被災写真の使用についての申し合わせ」。

69 最高裁は 1998 年 11 月 13 日までに原告の上告を「理由がない」と不受理を決定した。中国新聞同 11 月 14 日付。

70 松重を支援しようと後輩の写真部員らが呼びかけて編集局でカンパが集められた。

71 松重は「8 月 6 日」撮影ネガ 5 点を 1987 年 10 月 6 日、当時の中国新聞社編集局長に保存を委託。桐の箱にネガ袋ごと収めて本社金庫で保管されていた。

72 広島平和文化センターが原爆資料館を窓口として第 3 者へ提供していた松重 1945 年 8 月 6 日撮影写真や、45 年秋から職務で撮った写真は中国新聞社の帰属であることを互いに認め、外部への提供は新聞社が判断することを盛り込んでいる。

73 日本写真家協会編『令和 3 年度文化庁「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」報告書』（2022 年）12-13、15 頁。木村権一の所属を「陸軍船舶司令部」としているが「陸軍船舶練習部」である。原爆資料館は、林重男の遺族が 2007 年に寄贈したネガの一部も日本写真保存センターを通じて国立映画アーカイブ相模原分館へ入庫している。

広島原爆の写真撮影者

2023 年 10 月末現在西本雅実・下村真理作成

市民

撮影者 （当時の職務） （注 1）	撮影日	撮影枚数	ネガ、プリントの現存状態	撮影状況やその後の経緯
山田　精三＊ （広島三中生徒・中国新聞社企画局勤務）	8 月 6 日	4 （注 2）	ネガは残っていないが、中国新聞社や資料館がプリント各 1 枚を保存	爆心地から北東約 6 キロ、府中町の水分峡で友人と散策中、閃（せん）光に続く爆発音で身を伏せ、起き上がると持参したカメラを松林越しに向けた。原爆のさく裂約 2 分後とみられ、地上から最も早く捉えた原子雲の写真となる。中国新聞別会社が発行した「夕刊ひろしま」46 年 7 月 6 日付で初掲載。28 年生まれで健在
松重　三男＊ （広島県職員・レントゲン技師）	8 月 6 日	4	資料館がプリントを保存	安佐郡古市町（安佐南区）の自宅から避難した、爆心地から北に約 7 キロの神田橋から暗箱カメラで原子雲を 2 枚を撮り、正午ごろ、火炎に覆われる市内を収めた。被災者を乗せて可部町（安佐北区）方面に向かうトラックも自宅 2 階から撮った。ガラス乾板で撮ったプリントを 71 年発行の『広島原爆戦災誌』で公表した。89 年に 78 歳で死去
深田　敏夫＊ （崇徳中学徒）	8 月 6 日、秋	6	資料館がネガ 4 コマ、プリントを保存	卒業後も動員が続いていた陸軍兵器補給廠（南区の広島大霞キャンパス）で朝礼が終わり、建物に入ろうとして吹き飛ばされた。2 階に駆け上がって窓から、さく裂 20 分前後の原子雲 4 枚をズボンの後ろポケットに入れていたベビーパールで連続撮影。爆心地から南東約 2.6 キロ、最も至近距離から捉えた原子雲となった。2009 年に 80 歳で死去
北村　久夫 （筆製造業）	8 月 6 日	1	資料館がプリントを保存	爆心地から南東約 13 キロ、熊野町の自宅兼作業場に近い榊山神社辺りから撮影。原子雲の下部は手前の山で見えないが、上部がくっきりと写る。さく裂約 20 分後とみられる。翌 7 日には警防団として入市し、犠牲者の収容作業に当たったという。88 年に 64 歳で死去。遺族が 2004 年資料館へ寄贈
織田　吾郎 （農業・食糧増産指導）	8 月 6 日	3	資料館がプリント 2 枚を保存	爆心地から北東約 40 キロ、本村（安芸高田市）の自宅で、異様な雲を見て、愛用の二眼レフカメラで撮影。半年後、コメと交換して現像液を入手して写真プリントにした。1 枚は散逸したが、さく烈約 15 分後の光景を中国新聞 57 年 8 月 5 日付で、約 20 分後のキャビネ判 1 枚も 86 年 8 月 3 日付で公開。99 年に 86 歳で死去。遺族が 2023 年 1 月資料館へ寄贈
鴉田　藤太郎＊ （傷痍軍人広島療養所勤務）	8 月 6 日	1	資料館がプリントを保存	北東約 25 キロ、現在の東広島市にあった陸軍傷痍（しょうい）軍人広島療養所から見えた原子雲を撮影。午後 2 時ごろ救援に向かい、東警察署（中区銀山町）で収容者の名前を書き残す。78 年に 60 歳で死去
石井　治三	8 月 6 日	1	資料館がプリントを保存	約 22 キロの呉市阿賀、自宅近くの裏山から約 30 分後に撮影。遺族が 88 年に寄贈
波田　達郎 （広島一中学徒）	8 月 6 日	1	資料館がプリントを保存	爆心地から約 4.2 キロ、現在の南区東本浦町の自宅庭から原子雲を撮影。中国新聞 70 年 8 月 5 日付で「波田千里さん撮影」として掲載されたが、撮影者は、一中卒業後も続いていた東洋工業への動員が解除となり自宅にいた長男達郎だった。23 年 10 月に名乗り出て経緯を証言、紙面で使われた複写プリントの画像を資料館へ寄贈。29 年生まれで健在
榎本　隆清（たかきよ） （写真館経営）	8 月 6 日	1	プリントは本川小、資料館が保存	山崎与三郎（76 年に 86 歳で死去）が 53 年本川小へ寄贈していた資料から「安佐郡緑井村より」の説明書きを添えた原子雲の写真が 2013 年に見つかる。23 年夏、同じ構図の写真が毎日新聞大阪本社版 46 年 8 月 5 日付で「古市町榎本隆吉氏撮影」として載っていたのが浮かび上がり、研屋町（中区紙屋町）で榎本写真館を営み、安佐郡安村（安佐南区）に疎開していた榎本隆清と判明。爆心地から約 10 キロ内外から撮っていた。58 年に 58 歳で死去
不明	8 月 6 日	1	プリントは本川小、資料館が保存	「広島原爆戦災誌」第 3 巻（71 年刊）に「海田市町（海田町）の陸軍需品廠から撮影」として収録。山崎与三郎の提供で、撮影者は軍関係とされる。山崎は戦前は本川小で教え、被爆後は「千田書房」を開いて原爆被災資料の収集に努めた。安佐郡内から撮った原子雲の複写とともに 2013 年、同校への寄贈資料を整理する中で鮮明なプリントが見つかった
不明	8 月 6 日	1		広島流川教会（中区鉄砲町）が 75 年夏に開いた資料展で、被爆牧師谷本清（86 年に 77 歳で死去）が信者からの提供という原子雲の写真を紹介し、中国新聞同年 7 月 30 日付で「爆心地より西南、五日市町（佐伯区）方面から写したのではないか」と地元写真家の見解を付けて載った。プリントは資料館を含めて残っていない
川本　俊雄＊ （県警察部写真班）	8 月 8 日～	85	資料館がプリントを保存	5 日に西条町（現東広島市）へ出張し、6 日午後に入市。8 日、爆心地西 410 メートルの本川国民学校校庭での火葬を残す。敗戦後は、市中心部の惨状をはじめ、比治山国民学校（南区）に設けられた引き取り手のいない子どもをみた「迷子収容所」を収める。68 年に 66 歳で死去

佐々木　雄一郎（写真家）	8 月 18 日～	182	資料館が 2007 年プリントの寄託を受け電子化、ネガを保存	東京のオリエンタル写真学校を経て内閣情報部発行の『写真週報』の撮影に当たっていたが、原爆で母や兄家族、姉、妹ら 13 人を奪われて帰郷。肉親が住んでいた場所や、原爆ドームをいち早く撮る。49 年『ヒロシマフォトアルバム』を編さん。70 年『写真記録　ヒロシマ 25 年』を出版。被爆地の実態を撮り続け、80 年に 63 歳で死去
松岡　泰三（東洋工業＝現マツダ＝勤務）	8 月中旬～	7	資料館がプリントを保存	的場町（南区）で被爆。比治山から見た市中心部や、国泰寺（中区）の倒れた大クスノキなどを撮影した。74 年に始まった市民による「原爆の絵」に、京橋川一帯の惨状や親子 3 人のやけどを描いた絵を寄せている。95 年に 86 歳で死去
森本　太一＊（写真業）	11 月頃	5	資料館がプリントを保存	戦前に東京のオリエンタル写真学校を卒業し、広島で写真店を開業していた。8 月 17 日に復員。家族の疎開先にあった愛用のライカを携え、知人の消息を求めて市内を歩き回り、県産業奨励館（原爆ドーム）など爆心地一帯の惨状を収めた。73 年に撮影写真の一部を公表。78 年に 61 歳で死去
北　勲＊（広島管区気象台技術主任）	8 月末～9 月末	5	広島市江波山気象館がネガ 4 コマを保存。資料館がプリント 5 枚を保存	爆心地から約 3.7 キロ、江波山（中区）の気象台で被爆した。調査を兼ねて、北側の欄干が落ちた相生橋や、倒壊寸前の鶴羽根神社（東区）などを撮影。写真集「広島壊滅のとき」(81 年刊)で「40 枚くらい撮影して歩いた」と振り返っている。市江波山気象館が、9 月 17 日に襲来した枕崎台風の被害も収めたネガ 17 点を保存する。2001 年に 89 歳で死去
谷原　好男（写真業）	8 月下旬～12 月末頃	35	資料館がネガ 35 コマ、プリントを保存	軍の写真現像に携わっていた福岡県から 19 日に入った。実家は白島北町（中区）にあり、変わり果てた広島城址の中国軍管区司令部や第二陸軍病院、陸軍幼年学校などを残した。戦後は北九州市で写真材料店を営み、74 年資料館にネガを寄贈。84 年に 80 歳で死去
井上　直通（帝国銀行員・広島支店勤務）	8 月 30 日～9 月上旬	10	資料館がプリントを保存	爆心地から約 360 メートル、鉄筋 2 階建て支店の内部や金庫、全景を 6 枚収め、周囲の様子も撮影。本店から被害状況の報告を求められ、市郊外の知人宅に預けていたカメラを使い、フィルムは取引先に頼み込み入手した。東白島町（中区）の自宅で被爆し、同僚ら計 32 人が犠牲に。05 年に 92 歳で死去。壁の一部を使った広島アンデルセン新店舗が 2020 年再開
佐渡　次郎（海軍から復員）	8 月 18 日頃	2	資料館がネガを保存	岩手県から戻り、的場町（南区）・荒神橋西詰めから北西に向かって自宅の焼け跡や、北東の広島駅方面を撮影。戦後に住んだ牛田東（東区）の自宅で古いネガを整理し、セミ判（6 × 4.5 センチ）2 点を 31 年ぶりに見つけて資料館に寄贈
平松　高市（広島工専助教授）	8 月中旬	16	資料館がプリントを保存	己斐（西区）の下宿先で被爆。爆心地南東約 2.1 キロで全半壊した広島工専（現在は千田公園）の様子、全壊全焼の際となった一帯を撮影。88 年に 92 歳で死去。遺族が 95 年ネガを見つける
黒石　勝＊（広島赤十字病院レントゲン技手）	10 月	3	資料館がプリントを保存	家族が疎開していた福山市から 7 日に戻り、収容者らを手当て。後に初代原爆病院長となる重藤文男さん（82 年死去）の指示で同僚と主に患者を撮影。90 年に 77 歳で死去
岸本　吉太＊（写真館経営）	10 月～	43	資料館がガラス乾板、ネガ、プリントを保存	原爆で長女（8 歳）を失いカメラを手にする気になれなかったが、中国配電（現・中国電力）の依頼で市内一円の電気施設被害を撮影。爆心地から 680 メートルの本店屋上から復興期の広島市の変遷も撮り続けた。89 年に 87 歳で死去。遺族が 2009 年資料館に寄託
林　寿麿＊（福屋百貨店勤務）	秋	15	資料館がプリントを保存	出向した南観音町（西区）の配給会社の寮で被爆。家族疎開先の志和掘村（東広島市）から通い、8 階福屋（現存）や 4 階旧館（53 年に解体）が立つ廃墟を撮影。福屋屋上からは、11 月 5 日付で自力印刷再開直前の中国新聞社も収めた。79 年に 84 歳で死去
佐藤　盛雄（宗教者）	9 月 3 日	1	資料館がプリントを保存	河原町（中区）の金光教広島教会の焼け跡から南西方面を撮影。74 年に 59 歳で死去
平原　伝（中国配電＝現中国電力＝勤務）	12 月 11 日	13	資料館がネガ 12 コマ、プリント 13 枚を保存	復員して郷里にあった配電尾道営業所に復帰。サツマイモと交換してフィルム 1 本を入手して同僚と本店へ向かい、大手町（中区）から小町の本店に向かって撮影し、広島駅前や八丁堀地区の焼け跡も収めた。85 年資料館に寄贈。尾道市で健在、25 年生まれ
野田　功（広島陸軍被服支廠勤務）	秋～冬	5	資料館がプリントを保存	爆心地から約 2.7 キロ、被服支廠（南区出汐）の倉庫で被爆。西引御堂町（中区十日市町）に住む両親や妹、弟の家族 6 人を失う。廃虚の中の県産業奨励館（原爆ドーム）を東側から撮影している。戦後は西宮市で暮らし、2017 年に 92 歳で死去
田丸　義明	秋～冬	11	資料館がプリントを保存	大手町（中区）にあった広島瓦斯（ガス）本社ビルなどの崩壊を収めたプリントが 63 年に資料館へ。提供者は己斐町（西区）で被爆とあるが、撮影経緯は不明
中野　喜義（広島地方専売局勤務）	秋～冬	2	資料館がプリントを保存	爆心地から約 2.2 キロの皆実町（南区）の専売局や、鉄筋コンクリート造りの工場を撮影。仁保町（南区日宇那町）の自宅で被爆したという。70 年に 71 歳で死去。親族が 2006 年資料館に寄贈

根石　福司 （帽子店経営）	8月頃	3	資料館がプリントを保存	愛宕町（東区）に住み、爆風で障子が吹き飛ばされた自宅室内を収めた写真の裏には「愛宕町の家､原爆被爆状況　20･8･6」､大手町の廃虚写真には「21・6・14 引伸」の直筆が残る。遺族によると、写真撮影を趣味にしていたという。79 年に 68 歳で死去。遺族が 2007 年資料館に寄贈
中川　正彦 （国鉄職員・広島駅出札係）	9月	6	ネガは不明、プリントを 73 年に公開	蛇腹式カメラに使い古しのフィルム 6 コマが玖波町（大竹市）の自宅にあり、鳥居が倒れたままの旧護国神社（中区基町）などを撮影。米国からの「返還被爆資料展」が 73 年に旧平和記念館で開かれたことから、自宅を探して撮影写真を見つけた
中前　義美 （製材業）	9～10 月	11	資料館がプリントを保存	平良村（廿日市市）から 7 日入市被爆し､救護活動に従事した。橋げたが落ちた本川橋など爆心地一帯の光景を撮影。88 年に 81 歳で死去。遺族が 2007 年資料館に寄贈
小田　勇司 （光道国民学校 2 年生）	8 月 8 日か 9 日～12 月末	9	資料館がプリントを保存	西引御堂町（中区十日市町）の自宅庭で被爆し、母に助けられて八木村（安佐南区）に避難した。翌日から両親に連れられて妹の遺骨を捜して市内に戻り、カメラが趣味だった父から手渡されて自分でも撮ったという。本人が 2008 年資料館に寄贈。2016 年に 78 歳で死去
保田　守吉 （醤油・酒造製造業）	12 月頃	12	資料館がネガ 9 コマ、プリント 12 枚を保存	京橋町（南区）で「保田七兵衛商店」を営んでいた一家の 3 男で、草津方面（西区）へ向かう途中の己斐で被爆。自宅庭跡や周辺の廃虚を撮影していた。84 年に 69 歳で死去。遺族が 2008 年、17 年資料館に寄贈
中野　忠男	9～10 月頃	7	資料館がプリントを保存	焼け残った福屋や中国新聞社、日本勧業銀行広島支店が並ぶだけで、人影も少ない八丁堀地区（中区）や広島駅南側の焼け跡などを撮影。92 年に 79 歳で死去。親族が 2022 年資料館に寄贈

新聞・通信社

撮影者 （当時の職務）	撮影日	撮影枚数	ネガ、プリントの現存状態	撮影状況やその後の経緯
松重　美人（よしと）＊ （中国新聞社写真部・中国軍管区司令部報道班）	8 月 6 日、9～11 月	13	「8 月 6 日」撮影 5 点を含むネガ 10 コマが現存。中国新聞社が所有し、計 13 枚のプリントは資料館も保存（注 3）	翌町（南区西翠町）の自宅で被爆し、爆心地から南東約 2.2 キロの御幸橋西詰めで市民の惨状を収めるなどした 5 枚を当日に撮影した。うち 2 枚が中国新聞別会社発行の「夕刊ひろしま」46 年 7 月 6 日付で初掲載。米軍の占領統治が明けた 52 年、国内の写真集 2 誌に続き、LIFE9 月 29 日号が「原爆直後の写真を米国初公開」と広島・長崎の 7 ページ特集を組み、御幸橋の 2 枚目を冒頭に掲載。原爆の惨禍を知らせる代表的な 1 枚に。10 月 12 日に入った日米合同調査団の求めで万代橋の欄干の影なども撮った。2005 年に 92 歳で死去
高木　正三 （朝日新聞西部本社写真部）	8 月 8 日前後	2	ネガ、プリントは残っていない	朝日新聞西部本社版 10 日付で「優しい声で戦災者を励ます女子報道班員」「焼跡で足並揃（そろ）へて軍官民の復興相談会（広島市内にて高木特派員撮影）」の説明を付けた 2 枚が載る。報道統制のもと原爆直後の広島を扱った初めての報道写真となった。「広島にて岸田特派員発」と小倉市（北九州市）から 7 日に入った西部本社記者岸田栄次郎の記事も 10 日付にあり、9 日までに撮ったとみられる。79 年に 64 歳で死去
国平　幸男（ゆきお） （毎日新聞大阪本社写真部）	8 月 9 日	40	ネガとプリントは同社が保存	9 日、社会部記者の西尾彪夫と広島に入り、トンボ返り。臨時県庁が 7 日に置かれた東警察署へ救援物資が運び込まれる光景などの 2 枚が、11 日付大阪版で「新型爆弾劜（は）ね返した廣島市　国防写真隊員撮影」の説明で載る。掲載を願った廃虚の組み写真は軍の検閲から許されなかった。右腕負傷の少女を撮った写真が当時 10 歳の藤井幸子（ゆきこ）さん（77 年に 42 歳で死去）と 2017 年遺族の証言から判明し、原爆資料館は 19 年の全面リニューアル展示に伴い本館入り口に掲げた。09 年に 92 歳で死去
渡辺　喜四郎 （毎日新聞西部本社山口支局長）	8 月上旬	4	プリント 2 枚を西部本社が保存	毎日新聞西部本社版 12 日付に「廣島市にて－渡邊山口支局長撮影」の写真 2 枚が掲載。救援のために「県下各地から出動の警防団員」が下柳町（中区銀山町）の東警察署前を歩く光景や、「若人の勢揃（ぞろ）ひ」を撮っている。『毎日新聞西部本社五十年史』（73 年刊）は、伝書バトを携えた連絡部員 2 人が 7 日昼すぎ己斐駅に着き、惨禍の情報を通信紙に書いて放し、ハトは門司市（北九州市）の本社に夕方戻ったという。52 年 49 歳で死去
宮武　甫（はじめ） （朝日新聞大阪本社写真部）	8 月 9～12 日	119	ネガとプリントは同社が保存	中部軍管区司令部宣伝工作隊として 9 日夕に入り､12 日に戻った。爆風で落橋した本川橋などの写真が、大阪版 20 日付から 7 回連載の「原子爆弾　浅田博士に聴く」（大阪帝国大教授浅田常三郎）で使われた。広島赤十字病院で治療を受ける少年らを撮った 5 枚は「正視に堪へぬこの残虐さ」の見出しで 9 月 4 日付に掲載され、ネガは占領期に自身が守った。「原爆被害の初公開」と表紙に刷ったアサヒグラフ 52 年 8 月 6 日号で、熱線を浴びた女性の写真も収録され、発行は 70 万部に上った。85 年に 71 歳で死去

水野　十三 （中部日本新聞＝現中日新聞社＝写真部）	8 月 9 日	72	ネガとプリントとも焼却	名古屋本社から 9 日に社会部記者と入った。フィルム 2 本を使って、県産業奨励館（原爆ドーム）や焼け残ったバスなどを撮ったという。14 日付に「壊れ残つた土蔵と壕／廣島市にて水野特派員撮影」の 1 枚が掲載。ネガは敗戦後に本社ボイラー室で燃やした、と生前に証言している。05 年に 90 歳で死去
中田　左都男（さつお） （同盟通信大阪支社編集部）	8 月 10〜11 日	37（うち地図 1 枚）	共同通信社がオリジナルネガ 11 コマ、残りは複写ネガを保存。資料館がプリント 30 枚を保存	大阪調査団員として 10 日に入ったことが、大阪帝国大教授浅田常三郎のメモに残る。同盟配信の中国新聞社屋上から東南方向に収めた廃虚の写真は、終戦直後 19 日付の朝日、毎日の各東京・大阪本社版、読売報知（読売）、中部日本（中日）から各紙が掲載。山陽線神田川鉄橋で転覆した貨物列車の現場写真は 20 日付朝日東京版で載る。眼球が飛び出した死者の写真は、米通信社 ACME（UPI の前身）が 9 月 2 日に配信していた。46 年に後身の共同通信社を退職し、大阪市内で輸入洋品店などを営んだ。94 年に 74 歳で死去
佐伯　敬（たかし） （同写真部）	8 月上旬〜17 日			広島駅ホームの一団を捉えた同盟写真を共同通信社が 2007 年に配信すると、「45 年 8 月 17 日」と判明。広海軍工廠（呉市）の動員解除で帰りの列車を待つ旧制三次中 4 年生の一行と、写っていた東京在住 OB が名乗り出た。同盟写真を検証する共同 OB の調べで、大阪支社写真部の佐伯敬も広島に向かっていたことが浮上。広島大所蔵の「米病理学研究所返還資料」に含まれる鮮明な同盟写真をデジタル化すると、東南方向の廃虚はパノラマ 5 枚構成の 1 枚であり、本職・佐伯撮影の可能性が高いという。48 年に読売新聞社に移籍。97 年に 82 歳で死去（注 4）
八田　国吉 （朝日新聞西部本社写真部）	9 月 3 日	1	プリントは同社が保存	昭和天皇が派遣した侍従永積寅彦が 9 月 3 日に廃虚の広島を視察する写真が、西部本社版 5 日付、大阪版 7 日で掲載された。前者は撮影が「八田」と名前が記され見出しは「聖恩に戦災者咸泣」、後者は撮影者名がなく「原子爆弾による死傷二十七萬名」だった。12 月に長崎医科大の残骸片付けも撮っていた。05 年に 88 歳で死去
新見　達郎 （毎日新聞大阪本社写真部）	9 月 10〜11 日	7	ネガとプリントは同社が保存	「〝ピカドン〟の悲劇超えて」の見出しで、相生橋から県産業奨励館を撮った写真が大阪本社版 9 月 13 日付で載る。50 年代に呼称が定着する「原爆ドーム」の初掲載。『社会部記者　大毎社会部七十年史』（71 年刊）は、米軍調査団の広島入りから社会部記者を特派して「国平カメラマン」が同行したというが、この写真をはじめ、マンハッタン管区調査団が 10 日に大野陸軍病院（廿日市市）で収容患者を診る光景も撮影していた。広島出身。1914 年生まれで 48 年死去
山上　圓太郎（えんたろう） （同）	9 月 9〜11 日	36	ネガとプリントは同社が保存	爆心地から約 360 メートルの帝国銀行広島支店の内部（広島アンデルセンが被爆外壁の一部を保存）、「下柳町内会」（中区銀山町）の幟旗が傍らに見えるバラック、米軍マンハッタン管区調査団の医学班を率いたスタフォード・ウォレンや、同行の東京帝国大学教授都築正男らによる陸軍病院宇品分院（南区宇品東）での調査などを撮影していた。07 年生まれ。西部本社に異動し 48 年末に依願退職
松本　栄一 （朝日新聞社出版局写真課） （注 5）	9 月 18〜25 日	157	プリントは同社が保存	『科学朝日』の取材で東京からライカに 100 フィートのフィルム 2 缶を携え、列車で 4 日間かけて 8 月 25 日長崎に着き、9 月 15 日まで撮影。枕崎台風が広島を襲った翌 18 日に入り、25 日まで建造物の被害を中心に収めた。掲載は米軍の検閲で不許可となりネガ提出を命じられ、焼き捨てたことにして、講和条約の発効まで隠し通した。縮景園（中区）で「戦死者之墓」の立て札を撮った写真の公開を機に 87 年、64 人分の遺骨確認となる。04 年に 89 歳で死去
松尾　英世 （朝日新聞大阪本社写真部）	9 月上旬〜	38	プリントは同社が保存	「〝焦都廣島から〟／松尾特派員撮影」のハエ取り紙を天井に付けた路面電車内などの 2 枚が大阪本社版 9 月 21 日付で載った。植物の生育などの計 4 枚に加え、大阪本社 2023 年調査から別の撮影プリントの現存が判明。9 月 3 日から大野陸軍病院（廿日市市）を拠点として牛田国民学校（東区）にも診療班を置いた京都帝国大原爆災害総合研究調査班による解剖や血液検査を収めていた。17 日襲来の枕崎台風による土石流は病院中央部を壊滅させ、班員 11 人も犠牲となった。82 年に 65 歳で死去
富重　安雄 （朝日新聞西部本社写真部）	12 月	3	ネガとプリントは同社が保存	妻の兄一家 7 人が死去した長崎へ 8 月 23 日に入り、浦上天主堂や臨時救護所となった新興善国民学校などを撮影した。広島にも入り、小町（中区）一帯の廃虚をカメラに収めた。現存 3 枚のうち 2 カットに本人が写る。97 年に 89 歳で死去
山本　儀江＊ （中国新聞社写真部）	11 月	3	中国新聞社、資料館がプリント 3 枚を保存	2 度目の召集により、西観音町（西区）で被爆して 9 月 1 日に復員。大手町（中区）に残った煙突をシルエット撮影。さらに上流川町（中区胡町）にあった中国ビル（中国新聞社新館）から南方向と南西方面・本通一帯の廃虚を、谷川とキャビネ判組み立て暗箱を使って撮影した。98 年に 86 歳で死去
谷川　長次＊ （同）	同			45 年 1 月に召集され、終戦により広島へ戻り社に復帰。鉄製の窓枠も吹き飛ばされた中国ビル 4 階から、写真部先輩の山本と廃虚を共同で撮影した。2002 年に 78 歳で死去

伊久（これひさ）　茂視 （朝日新聞社広島支局）	12月～	4	プリントは同社が保存	45年1月までビルマ（ミャンマー）で陸軍の情報班員として戦闘撮影に当たり、西部本社を経て11月から広島支局に駐在。焼け残った小町（中区）の中国配電（中国電力）本店に入っていた仮支局で寝泊まりしながら、駅前の闇市やバラック建設なども撮影した。2004年に81歳で死去

軍所属

撮影者 （当時の職務）	撮影日	撮影枚数	ネガ、プリントの現存状態	撮影状況やその後の経緯
木村　権一＊ （陸軍船舶練習部）	8月6日～	18	ネガ6コマ、プリント18枚を資料館が保存	爆心地から南東約4.2キロの船舶練習部（南区宇品東5丁目）で軍馬厩舎の移転作業中に被爆し、さく裂約15分後の原子雲3枚に続き、炎上する市街地を3枚組みで撮影。8月30日に入った東京帝国大教授都築正男の指示により、第一陸軍病院宇品分院で初期放射線障害にも見舞われた患者らも収めた。73年3月に67歳で死去。同年5月の米陸軍病理学研究所（AFIP）からの「返還資料」には木村撮影と同じ構図の患者カラー写真2枚が含まれているが、モノクロを着色・複写したとみられる。遺族がネガ6点を06年資料館に寄贈
尾木（おき）　正己＊ （呉海軍工廠火工部設計係）	8月6日～20日	22	資料館がプリントを保存	呉海軍工廠（呉市若葉町の海上保安大学校）から、さく裂約40分後の原子雲を火工部にあったライカで撮影する。翌7日からは広島に救援隊で入り、デルタ一帯も収めた。朝日新聞大阪本社版9月13日付、東京本社版16日付が地上から撮った原子雲を紙面で初掲載したが、尾木撮影の写真をトリミングしたものである。東京から8月8日に海軍調査団で入った技術中佐の北川徹三が鮮明なオリジナル・プリント（15×10センチ）を残していた。遺族が04年呉市に寄贈し、大和ミュージアムが所蔵する。2007年に93歳で死去
小平（こだいら）　信彦 （陸軍野戦船舶本廠・技術大尉）	8月6日	5	資料館がプリントを保存	東京帝国大工学部を卒業し、召集により広島沖合の金輪島にあった野戦船舶本廠（暁第6140部隊）修理部第2工場長を務めていた。爆心地から南東約6キロ。兵器の装備状況を記録する名目で医務室から入手していたレントゲンフィルムがあり、高さ8000メートルに上っていた原子雲を撮影。7日未明、上陸船艇3艘（そう）で吉島（中区）に上陸して救援活動を続け、12日に帰島。戦後は気象レーダーの研究者となった。2019年に100歳で死去
斎藤　実	8月6日	1		入院先の呉海軍病院から撮った原子雲が、産経新聞57年7月31日付で掲載された
「橋本　勤次郎」 （海軍少尉）	8月6日	1		「特攻基地のカメラが捉へた爆発の一瞬」と中国新聞46年8月1日付が、倉橋島（呉市音戸町）にあった特殊潜航艇「蛟竜」基地から「橋本勤次郎元海軍少尉が撮影した」という原子雲の写真を掲載。しかし、53年発行「元海軍士官名簿」、特潜艇隊員らを網羅する88年発行の「特潜会名簿」にも「橋本勤次郎」の名は残っていない。
岸田　貢宜（みつぎ）＊ （中国軍管区司令部報道班）	8月7日～12日	30	資料館がネガ30コマを保存	出張先の吉田町（安芸高田市）から6日昼に入市被爆。翌7日に爆心地から約480メートルの自宅跡（中区本通）でくすぶる中心街をいち早く撮ったほか、船舶司令部が直後から指揮した救援活動を紙屋町や横川町などで収め、焼け残った福屋からは東方面のパノラマ写真も撮影。戦後は本通で写真館を営み、原爆写真の保存を松重美人らと呼び掛けた。88年に72歳で死去。ネガは孫が2018年資料館に寄贈。「戦闘司令所ヲ広島市廳ニ推進…」（8月8日発の船防作命第44号）を伝える市役所南側のテント建て光景を収めたネガも残っていた
尾糠（おぬか）　政美（まさみ）＊ （陸軍船舶司令部写真班）	8月7日～	20	資料館がプリント19枚を保存。広島原爆障害対策協議会がプリント12枚を保存	宇品凱旋館（南区宇品海岸3丁目）の前庭で被爆。翌7日に沖合の似島で軍医の指示を受け、焼けただれた兵士や女性らを次々と収める。以降も比治山や段原（南区）などの臨時救護所や広島赤十字病院などを回り、キャビネ暗箱やマミヤシックスを使って撮影。皆実町（南区）に住む母マキノ（当時60歳）を道々捜したが見つけられなかった。戦後は郷里の島根県川本町に戻って写真館を営んだ。全身やけどの兵士の写真は、アサヒグラフ52年8月6日号フロントページで撮影者名なしで掲載されている。2011年に89歳で死去
川原　四儀＊ （同）	8月9日～	47	資料館がプリント45枚を保存。広島原爆障害対策協議会が5枚を保存	爆心地から約4.6キロ、船舶司令部写真班の部屋で被爆。8日広島入りした大本営調査団に同行して9日から、京口門（中区八丁堀）一帯の惨状や本川左岸沿いテントに収容された兵士らを撮影。写真は、原子物理学者仁科芳雄らが「原子爆弾ナリト認ム」と10日に判定した素案「特殊爆弾調査資料」に添付された。さらに昭和天皇が9月に閲覧していた船舶司令部作成の「広島市戦災記録写真帖」（宮内公文書館所蔵、計45枚）に24枚が収録。ネガ廃棄を命じられたがプリント23枚を残し、68年に公表した。写真店を営み72年に49歳で死去

陸軍船舶司令部写真班	8 月 7 日～	43	資料館がプリント 26 枚を保存。広島原爆障害対策協議会が 34 枚を保存。宮内公文書館所蔵の写真帖に 5 枚	東京から 8 月 14 日に入った陸軍軍医学校教官の御園生圭輔(戦後は原子力安全委員長などを務め 95 年に 82 歳で死去）が、陸軍運輸部の使用済みザラ紙に「極秘」「船舶軍医部」の押印がある「広島市戦災記録写真」を 73 年、広島原爆障害対策協議会に寄贈。計 52 枚（うち 2 枚は同一カット）が貼られていた。尾糠、川原、木村の撮影が判明したカットを除き、初代資料館長長岡省吾の遺族が 2015 年に寄託した未公開プリントや宮内公文書館所蔵の「広島市戦災記録写真帖」と照らすと、写真班撮影分として 43 枚が現存している
大橋　完造（陸軍憲兵学校軍医＝東京中野区）	8 月 11～17 日	6	資料館がネガ 6 コマ、プリントを保存	憲兵学校で7日に「広島壊滅」との話を聞き、願いを出して10日、仁保町（南区）の実家に着く。父の診療所にフィルムがあるのを見つけ、翌日から関連部隊などを回って救護に努めながら、鷹匠町（中区本川町）の廃虚、光道国民学校（45 年 11 月廃校）などの惨状を撮影した。戦後は仁保で内科・小児科医院を続け、2003 年に 88 歳で死去
藤田　明孝（中国憲兵隊司令部）	10 月頃	7	資料館がプリントを保存	終戦 2 カ月後、命令により二葉の里（東区）近くの山中に「米軍勇士之墓」と白木に書いた十字架を建て、宇品町（南区）にも墓標があるのを知り、写真に収めていた。瀬戸内沿岸部上空で迎撃されて捕虜となり、中国憲兵隊司令部（中区基町）で被爆死した米兵らの名簿が外務省外交史料館にあるのが判明した翌 78 年、写真の存在を公表した。当時は徳山市（周南市）在住の 61 歳

調査団（注 6）

撮影者（当時の職務）	撮影日	撮影枚数	ネガ、プリントの現存状態	撮影状況やその後の経緯
呉鎮守府調査団（団長・呉海軍工廠火工部長三井再男）海軍調査団（団長・艦政本部安井保門）	8 月 8 日～	24（うち地図 1 枚）	大和ミュージアムが保存	呉鎮は 6 日夕に先遣隊を送り、艦政本部で原爆開発「F 号」研究に当たった三井大佐が率いる 12 人が 7 日調査を開始。海軍大臣米内光政が送った安井大佐らの調査団 10 人は同日空路で岩国着。8 日、天守閣が崩れた広島城跡で合流し、さく裂地点を求めた。調査写真は 70 年、三井（89 年に 87 歳で死去）が相生橋などの惨状 16 枚を公表。呉鎮調査団の神津幸直が計 24 枚（うち 1 枚は手書き地図）を、海軍調査団の北川徹三（83 年に 76 歳で死去）が 15 枚を保存。両者の遺族が呉市に寄贈し大和ミュージアムが所蔵している
大阪調査団（団長・大阪帝国大教授浅田常三郎）	8 月 10～11 日	17	資料館がプリントを保存	中部軍司令部の要請から、浅田を団長に海軍薬剤少佐や報道班員で同盟通信大阪支社の中田左都男ら 6 人で 9 日夜に大阪を列車で出発し、呉海軍病院の車で 10 日広島デルタに入った。ガイガー・ミュラー計数管で放射能を測定して回った基町（中区）などの壊滅状況や、頭部やけどの男性、呉鎮守府調査団と海軍調査団が回収していたラジオゾンデ（爆発測定無線装置）を撮影。団員だった大阪海軍病院副官の山田正明(当時 32 歳の軍医）が写真を貼ったアルバムを残し、東京在住の遺族が 2014 年資料館に寄贈
山崎　文男（東京・理化学研究所員）	8 月 30 日～9 月 5 日	7	「相原秀二資料」として資料館がプリントを保存	理化学研究所で中性子研究に取り組み、「陸軍省広島戦災再調査班」員として放射能測定に当たる中で撮影。81 年に 74 歳で死去。広島・長崎の壊滅状況を 45 年 10 月に収めた原爆記録映画の製作者、相原秀次（本名は秀二、2008 年に 98 歳で死去）が 05 年資料館に寄せた「相原資料」には、広島の爆心地一帯を山崎が 9 月 4 日に撮ったプリントも残る。45 年 9 月 1 日からの直筆フィールドノートは遺族が 05 年資料館に寄贈
菅（すげ）　義夫（東京帝国大助教授）	10 月 5 日～(8～10 日長崎)14 日に再び広島	92	資料館がプリントを保存	文部省学術研究会議「原子爆弾災害調査研究特別委員会」に物理学者として参加。10 月 5 日、東千田町（中区）の広島文理科大から調査を始め、爆風でずれた元安橋の石柱などを調べ、爆心の位置を推定。助手らが撮影を担った写真を、調査報告集が 12 月 11 日付で印刷中止となったため独自に保管した（発行は 53 年に）。委員会の吉澤武男所蔵や原爆記録映画製作班で日本映画社の三木茂撮影分を除くと、ダブりがないのは 92 枚となる。85 年に 83 歳で死去。遺族が 2003 年調査ノートや印刷中止の通知書なども資料館に寄贈
吉澤　武男（東京帝国大助教授）	10 月	77	資料館がプリントを保存	「原子爆弾災害調査研究特別委員会」に参加し、鉄塔や電柱などの被害状況を調査し、車両の破壊や爆風でゆがんだ広島赤十字病院の窓枠などの写真を広島 77 枚、長崎 48 枚にわたってアルバムにまとめた。53 年発行の「原子爆弾災害調査報告集」収録の機械金属科会機械班の報告論文には 5 枚(うち長崎 1 枚）を掲載している。73 年に 64 歳で死去。アルバムは遺族が 2017 年に資料館へ寄贈

渡辺　武男 （東京帝国大教授）	10月11〜13日 （15〜19日長崎）	54	ネガは東京大が保存	専門は鉱床学。「原子爆弾災害調査研究特別委員会」の地学班として10月8日広島に着き、海田市町（海田町）の日本製鋼報国寮を宿舎とする。熱線による影の方向と傾きを測定し、溶けた瓦などの試料を集め、爆心地の島病院（旧細工町、中区大手町）前の路上からパノラマ写真も撮影した。15日からの長崎調査には、初代資料館長となる長岡省吾が参加。米軍が46年5月ワシントンに送った記録映画「広島・長崎における原子爆弾の影響」（2時間44分）で「熱」の説明を監修した。86年に79歳で死去
金井　清 （東京帝国大地震研究所技師） 前田　敏雄 （同大第一工学部雇）	10月18日〜11月7日	83	ネガ、プリントは資料館が保存	金井は広島市出身。入市被爆し、終戦を東警察署で知る。「原子爆弾災害調査研究特別委員会」土木・建築科会の研究員、前田は同科会の助手として10月18日に着く。長崎での調査を挟み、再び広島での調査を11月8日まで続けた。金井の母校であり、焼け落ちた雑魚場町（中区国泰寺町）の広島一中講堂や、本川に架かる新大橋のアスファルトに残る欄干の影などを撮影。金井は2008年に100歳で死去。戦後は地震学会長を務めた金井と親交を結んだ研究者が遺族から託された日誌などを含む255点を18年資料館に寄贈

記録映画関係者（注7）

撮影者 （当時の職務）	撮影日	撮影枚数	ネガ、プリントの現存状態	撮影状況やその後の経緯
林　重男 （東方社カメラマン）	10月1〜10日	233	ネガ、プリントは資料館が保存	日本映画社から木村伊兵衛が写真部長だった東方社へ記録映画スチル撮影の派遣要請があり、手を挙げた。「物理班」を担当。10月5日、爆心地一帯の惨状を基町（中区）の旧商工会議所4階屋上からローライフレックスを使い360度パノラマで収めた。12日からは長崎で撮影し22日帰京。米軍のネガ提出命令に、木村は印画紙などを求めて林らが焼いたプリントを提出しネガを守った。82年「反核・写真運動」をつくり保存・活用を訴えた。ネガは2000年資料館に寄託し、02年に84歳で死去。遺族が07年寄贈に切り替えた
菊池　俊吉 （東方社カメラマン）	10月1〜21日	860	ネガは遺族が保存。2007年、中国新聞社と資料館が広島国際文化財団の助成を得てネガから焼いた全プリントを電子保存化	「原子爆弾災害調査研究特別委員会」に同行した記録映画製作で「医学班」のスチルを担当し、広島赤十字病院などで患者や、逓信病院そばに建てた板小屋での病理解剖などを収めた。撮影にはライカも使い、フィルムは「さくらパンF」（ASA50相当）。袋町国民学校の壁に書かれた家族の安否を尋ねる伝言板も撮影。90年に74歳で死去。写真に残る文字が98年に見つかり、旧校舎一部保存の袋町小平和資料館（中区）に至った。グラフ誌『LIVING HIROSHIMA』向けに47年8月〜10月撮影のネガ2268点も2008年から電子化
田子　恒男 （東方社助手）	10月1日〜下旬	23	ネガ、プリントは資料館が保存	国策の東方社に東京写真専門学校在学中から動員勤務に就いていた。学校の先輩でもあった林と9月27日東京をたち、枕崎台風の被害で尾道からは船で宇品に29日上陸。林の撮影を手助けし、海田市町の宿舎では調理も担う。11日以降は菊池に付き、自らもローライフレックスで調査研究団の様子や病理解剖の臓器も収めた。98年に73歳で死去
三木　茂 （原爆記録映画撮影者）	同	207	「相原秀二資料」として資料館が保存	溝口健二や亀井文夫作品の撮影者として戦前から名をはせ、日映が企画・製作する原爆記録映画の「土木建築班」に参加。建造物の被害状況を中心にバルボカメラで撮影に当たり、手札判の写真機でも収めていた。映画「広島・長崎における原子爆弾の影響」（2時間44分）は、連合国軍総司令部（GHQ）「監修」のもとに完成し、46年5月ワシントンに送られたが、ラッシュプリントは三木が東京都世田谷区で営む現像所に隠し残った。78年に72歳で死去
山中　真男 （同）	同	20	「相原秀二資料」として資料館が保存	原爆記録映画「医学班」の撮影を担当し、スチル写真も撮った。「原爆撮影日誌」と大学ノート表紙に記し、東京を出発した9月27日からの行動を詳細に記録。広島では10月2日に撮影を始め、「この児、親子をどうか助けてやってくださいと神に祈って」「こんな仕事をしているのがいやになった」とも記す。23日海田市駅から長崎へ。78年に76歳で死去。日誌は遺族が05年資料館に寄贈した

（注1）撮影者名の横に「＊」印を付した人物は、「広島原爆被災撮影者の会」（1978年発足）の呼び掛けに応じて撮影プリントを提供し、1981年広島平和文化センターにも寄せた人たち（遺族も含む）

（注2）撮影カメラや枚数について、中国新聞が山田の証言を初めて名前入りで報じた夕刊78年10月4日付「私の原爆写真」では、ベビーパールで4枚を撮影し、残り3枚は二重写しや真っ白だったという。

（注3）松重が代表を務めた「広島原爆被災撮影者の会」は81年、遺族からを含む複製プリント285点を広島平和文化センターに提供し、資料館が保存。中国新聞社は松重45年8月6日撮影ネガなどを2022年日本写真保存センターに寄託し、国立映画アーカイブ相模原分館で保存。

（注4）沼田清「新たな原爆カメラマンが浮上」（新聞通信調査会『メディア展望』2016年9月号）、「昭和20年の同盟通信社写真部の活動」（同2023年3月号）。

（注5）松本の所属名・撮影行動は85年7月15日東京都内であった「反核・写真家のつどい」の本人証言による。

（注6）「八月六日広島空襲被害状況調査報告書概要　呉鎮機密第三九六号　呉鎮守府司令部」、北川徹三「勤務録」（次男が所蔵）、「浅田常三郎メモ」（広島県立文書館が写しを所蔵）なども参照。「原子爆弾災害調査研究特別委員会」の職務は45年9月30日作成名簿に基づく。

（注7）仁科記念財団編纂『原子爆弾』、加納竜一・水野肇『幻のフィルム』、林重男『爆心地ヒロシマに入る』なども参照。

（補記）

広島が米軍投下の原爆に見舞われた 1945 年 8 月 6 日から年末までの写真撮影者の一覧作成に当たっては、中国新聞 2007 年 8 月 14 日付「ヒロシマの記録－原爆写真の撮影者たち」に至る取材で集めた各資料や証言を基に、写真の現存が以降に分かったり、原爆資料館へ寄せられたりしたものを含めて、全面的に調べ直した。北勲の没年や木村権一の享年を間違えていたのに気づき訂正もしている。

今回の作成は、記者時代からの「宿題」を続ける一市民ライターの調べだが、顧みれば、原爆記録写真を所蔵する各機関やご遺族らの協力を得られたことが大きい。

2012 年の創刊 120 周年企画『1945 原爆と中国新聞』の取材で、本社壊滅 3 日後の「8 月 9 日付」から代行印刷を引き受けた朝日新聞、毎日新聞の両西部本社で 45 年末までの最終版を閲覧することができ、広島へ特派された記者・カメラマンの存在と掲載写真を知った。それまでは両大阪本社・東京本社版の確認にとどまっていた。

また、初代原爆資料館長だった長岡省吾が大竹市の旧宅屋根裏にも残していた膨大な資料を次男の錬二氏（2022 年に 80 歳で死去）から現地で見せていただき、15 年に寄託を受けた資料館は写真の整理・検証に当たった（17 年に寄贈）。撮影者・団体名を突き止めた成果は今回の一覧にも反映させている。

被爆 70 年、壊滅直後を収めた「昭和二十年八月六日広島市戦災写真帖」（28 ページ）が宮内庁宮内公文書館にあることも知った。2011 年施行の公文書管理法に基づき明治以降の「特定歴史公文書等」の閲覧に応じていることを安藤福平氏（元広島県立文書館副館長）に教えられ、陸軍船舶司令部写真班などによる 45 枚を電子画像で入手した。広島へ派遣された侍従永積寅彦が 1945 年 9 月 5 日に帰京して、「同日及び十四日に復命する。その際、永積は船舶司令部宇品よりの写真を供し」（『昭和天皇実録』第 9、2016 年）とあるように、昭和天皇が閲覧していた。本邦初の原爆写真集でもある。

さらに 16 年、同盟通信大阪支社写真部員だった佐伯敬が広島で撮っていたことを共同通信社 OB の沼田清氏から教示いただいた。今回、朝日新聞、毎日新聞の両社が所蔵する 45 年末までの広島原爆写真についても回答を得た。調査の趣旨を受け止めてくださった関係者らに感謝を申し上げたい。

そして、井手三千男氏（2006 年に 65 歳で死去）の取り組みを挙げたい。被爆建造物を中心に 110 万都市広島で原爆の痕跡を撮り続けた写真家は、一面廃虚の写真であっても、他の写真や各資料と突き合わせることで、撮影場所・時期などの同定に迫った。実践方法も伝授してくれた。共に薫陶を受けた原爆資料館学芸課所属、落葉裕信や菊楽忍、下村真理の各氏の惜しみない協力がなければ、この一覧は作成できなかった。

自らが被爆した市民が撮り残した写真は遺族を通じて 2023 年の今も、原爆資料館へ寄せられている。原爆記録写真を調べる作業に「終わり」はない。

被爆資料の永久保存対策についての覚書～窒素ガス封入実験に関して～

横田　禎昭（よこた　よしあき）

島根県立大学名誉教授（広島平和記念資料館初代学芸員）

1940　生まれ
1963　広島大学文学部史学科東洋史学卒業
1969　広島大学文学部史学科考古学卒業
1971　広島大学大学院文学研究科（東アジア考古学専攻）修士課程修了
1971　広島大学イラン学術調査に参加（科研費による国際学術調査）
1974　広島大学大学院文学研究科（東アジア考古学専攻）博士課程単位取得満期退学
1974　広島平和記念資料館学芸員
1983　広島市教育委員会社会教育課主査（市立資料館開設準備担当）
1986　広島市郷土資料館副館長
1989　広島市文化振興事業団広島城館長
1993　島根県立国際短期大学教授
1998　中国寧夏大学と北方系青銅器文化の国際学術調査（科研費による国際学術調査）
2000　島根県立大学教授（国際短期大学兼務）
2003　現職

主な著書
『寧夏回族自治区における古代の民族と青銅器文化の考古学的研究』溪水社、2002年（共著）
『中国古代の東西文化交流』雄山閣出版、1983年（単著）

はじめに
1、広島平和記念資料館への着任経緯と最初の取り組み
　1）着任の経緯
　2）資料館初の展示更新と所蔵資料の博物館学的管理
2、被爆資料の保存管理
　1）資料館の資料保存環境
　2）展示と保存の両立
3、「人影の石」の保存と窒素ガス封入実験
　1）外部協力者の存在
　2）「人影の石」の保存
　3）窒素ガス封入保存法と封入実験への取り組み
4、今後の資料館の学芸員養成について
おわりに

はじめに

1949 年（昭和 24 年）9 月 25 日、広島市内基町の中央公民館内の一室に被爆資料を集めた原爆参考資料館陳列室が開設された。小さく産んで大きく育てるという俚諺がある如く、半世紀余を過ぎた二十一世紀には年間百数十万人もの入館者の訪れる、現在の中島町にある広島平和記念資料館のルーツが誕生したのである。ここに至るまで紆余曲折、色々と障害もあって言わば「間借り型」資料館だが初

志貫徹、終戦後 4 年目、戦後復興と食べる物も碌にない時代に被爆資料を集めて保存などに深い関心を持って展示資料の管理と館の運営まで一人でこなした初代館長長岡省吾という人物に敬意を払い、正しく評価すべきであろう。

先ず､本稿を執筆しようと思った経緯から始めたい。一昨年(2020 年(令和 2 年))12 月に広島平和記念資料館（以下「資料館」と略）の学芸員から丁重な書簡を頂戴した。それには資料館の企画展でこれまでの資料館の歴史をとりあげるので、1974 年（昭和 49 年）に着任した初代学芸員であった私の話を直接聞きたいというものであった [1]。半世紀近い前の事であり、しかも学芸員として当たり前のことをしたに過ぎないし、その後は、専門の中国考古学の研究 [2] や中国の大学との共同研究 [3]、それに府中町の下岡田官衙遺跡 [4] の史跡保存のための活動や 42 年間続く中国新聞カルチャーセンターの講義など、現役として充実した日々を送っておりお会いできないと断ったが、請われて私が顧問を務めている府中町の歴史民俗資料館でお会いした。そこでは主に窒素ガス封入実験の話をした。

その後、同館で開催されたこの企画展に関連して、同館の初代学芸員であった私を取材した小林可奈記者による中国新聞の記事 [5] を読み、私の仕事を公正に報道していたことに敬意を表しながら、既に入手していた同館の元館長の志賀賢治氏（以下、敬称略）が書いた『広島平和記念資料館は問いかける』[6] に改めて目を通したところ、随所に虚構、即ち、幾つかの誤謬があり、間違った内容が記述されていることに気がついた。最初は気にも留めていなかったし放っておこうと思ったが、将来、被爆資料の保存対策の歴史を研究する人がこの本を参考資料として使用する可能性が考えられ、読み手にとってみれば元館長が執筆したものだから内容に間違いなどあろう筈がないという思い込みから不正確なことが独り歩きする可能性があるため、本稿ではこれらの記述に対して極めて厳しい批判的姿勢を貫いて一つ一つ吟味している。後述するように、博物館資料の保存には緊急性と長期的な展望に立って計画的に実施して行く必要があり、また資料の素材に応じた科学的・系統的、一貫性のある保存対策の理論を構築するために、事実認識の大きな間違いは正しておかないと後世にこの本の内容が記録として残ってしまうと考えるためである。そして資料保存には将来多くの学芸員が携わるであろうことから、私が当時、資料館の学芸員として実施した保存対策の実際を記述し、それを参考にして将来の新知識・新技術で被爆資料の永久保存を考えて頂きたいと考える。それは被爆資料の保存、それも「永久保存」は前例がないので難しいと思うからである。志賀氏の著書には随所に「市」が保存対策に乗り出したように記述があるが（志賀 p.114〜119)、当時、市には高度な知識と技術を持った専門的職員（学芸員）は一人も存在せず、所謂､「受皿」が無かったのが現状であったのに､「受皿」がないのにどうしてまともな保存対策が出来ようか。当時の中国新聞の記事 [7] に私が学芸員として資料館の資料保存対策の基本構想の概略を述べている。それらの対策はその後全て実行しており、詳しく後述するが志賀氏の著書に度々登場する当時の東京国立文化財研究所（通称「東文研」。現在は独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所）の岩崎友吉修復技術部長が資料館の資料保存に関して述べたとされる「岩崎所見」[8] は当時の朝日新聞記事の報道のみであり [9]、それが市当局や関係者間に共有する認識となっていない事実を本稿で検証している。

志賀氏の著書の中で、初代学芸員と保存対策の記述の中心は主に新聞報道記事を基礎としているが、綿密で厳正なる資料の fact check（ファクトチェック。事実の裏付け）を充分せずに引用しているとしか思えない個所が見られる。私自身、平凡社の『世界考古学事典』など多数の項目を執筆しており[10]、大勢の人が読み参考にするから、何度も text critic（テキストクリティーク。原典批評）を繰り返して書いている。相前後して出版された石井光太『原爆：広島を復興させた人びと』[11]では、石井氏は私を直接に訪ねてきて、色々取材され確認されて資料としても立派な内容の本を上梓されたが、物書き（執筆者）にはこのように事実を確かめ、不確かな事は書かないという姿勢が大切である。私もかつて岩波講座で論文を執筆し[12]、この時に奈良国立文化財研究所（通称「奈文研」。現在は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）の町田章所長とは何度もお会いし中国の文化財の保護管理と活用についての現状を語り会った。

何しろ半世紀も前の事で、資料館勤務時代の資料はほとんど手元に残っていないから、記憶を頼りに書き起こしたので記憶違いが有るかも知れない。しかし被爆資料の保存という前例の無い分野において、基本的使命として充分では無いけれども一定の道を開いたものと自負している。したがって、私が在籍した 1974 年（昭和 49 年）から 1983 年（昭和 58 年）3 月までの約 9 年間に限定した期間、資料館で唯一の、一人の学芸員の足跡をたどりながら、どんなことが有ったのか、記録として読んで頂ければ幸甚である。

1　資料館への着任経緯と最初の取り組み

1）着任の経緯

資料館は 1955 年（昭和 30 年）開館当初から専門的職員（学芸員）が不在の館であったため、その必要性について私が着任する数年前から市の幹部職員や当局（資料館を所管する市長部局）の関係者の間において、国際化に伴う海外出張にて博物館見学の機会に専門職員の存在を知り、資料館の専門職員の採用が漠然と検討されていた。1974 年（昭和 49 年）9 月 17 日付けの中国新聞記事に、資料館に広島市で最初の学芸員として着任した私について、当時、国家資格の学芸員資格取得は「文部省が行う資格試験の合格者か、考古学講座などを設けている大学で定められた教科を履修したものに限られ、その資格がとれるのは中国地方では広島大学だけとあって、人材確保が難航」[13]とあるのは事実である。私は学芸員資格を学部時代に修得した後、大学院修士課程に進み、さらに修士課程修了後大学院の博士課程に進み、中国考古学の研究を続けていた。ちなみに、広大考古学研究室は日本考古学が中心で中国考古学を専攻する院生は私一人であった。博士課程在学時代に広島大学イラン学術調査隊の一員に選ばれたが、当時大学院生で海外の学術調査に行った例は殆んどない中でイランの砂漠近くの新石器時代初期の遺跡の発掘調査に参加し、帰国後すぐに教授陣と共同執筆した報告書『草原の道』[14]を出し、これを契機に中国と西域の研究を選び、現在に至っている。当時の海外調査は東大、京大に続いて三番目で、西日本の国立大学では最初であった。それまでは県北の帝釈峡遺跡群の発掘報告書、名越遺跡の縄文晩期の人骨の復元調査や土師ダム水没地域内の大迫古墳調査報告書と専門雑誌に中国新石器時代の

論文を発表している[15]。さらに、前述の通り、複数の百科事典の多数の項目を執筆しており、資料館の学芸員として市職員になる前に既に数点の results（業績）があった。

広島市が学芸員を探しており、考えてみたらどうかという話が広島大学考古学の松崎主任教授から直接私にあったが[16]、一般的に資料の永久保存は口で言うのは簡単だが大変難しく、まして被爆資料となると、当時、大学や研究所のどれ一つ手がけていない事実があり、種々の問題があるため困難であろうことが予測され、逡巡したのも事実であった。しかし教授が「分からない時には相談に来い、大学のネットワークを使いなさい」と励ましと背中を押してくれた。後日、研究室がらみの実に多くのご協力をして頂いた。

広島市の辞令交付直後、助役の案内で市長室において山田市長にお会いした。市民病院の医師と違って大学院博士課程修了者、海外学術参加者は珍しかったからと後で知った。市長は私の履歴書を見て「海外調査をしたのか、学芸員として頑張りなさい」と言われた。手続きのため人事課に寄った時に部長に「この辞令書は受け取れない」と言うと、驚きの様子で理由を聞かれたので、「辞令書の文言が学芸員でなく事務吏員と記入されていたので話が違う」と言うと、「職制は議会で議案として決めないといけないので、（その手続きは）していない」という説明であった。仲介した主任教授の面子の手前もあり、善処するように言われたが、役所の「善処する」とはやらないこと、とは、入ったばかりの私には理解できなかった。専門的知識と技術を持つ学芸員の配置論は、今に始まったことでなく、相当前から言われていたはずである。その背景には平和記念資料館として開館して以来、20 余年間保存対策、展示技術や資料整理等の知識を持っている専門職員（学芸員）を配置しないまま時が経過し、市側に学芸員の受け入れ態勢、職名・身分・待遇面など市条例を事前に整備しておく等の時間的余裕があったにもかかわらず、全くしていなかった点を指摘した。当時の新聞記事で紹介される自分の肩書は「学芸員」となっているが、実際には事務吏員では羊頭狗肉ではないかと市の上層部にも館長にも何度も提言したが、結局何ら進展がなかった。市条例は依然としてそのままにされており、他の政令都市の実態（学芸員・研究職待遇）を知っていたので、広島市の処遇（何故か条例改正はしない）には残念なことであった。

2）資料館初の展示更新と所蔵資料の博物館学的管理

資料館では荒田誠之助館長から、次の二つの大仕事をやって欲しいと言われた。

第一は、細部の展示シナリオの作成とそれに沿った動線計画、そして展示方法の決定であった。資料館で初めての全面大改装計画が予定されており、大筋のプランは東京の設計事務所の案が決まっていたが、実施設計の細部には展示シナリオが必要なので展示シナリオの有無を聞くと、そんなものはないと言われ、シナリオに基づく動線、展示ケースの仕様、資料の配置、照度と照明器具などの位置、中央ケースの天上高ほかが未決定事項で、これらを早急に決める必要があった。従来の展示が基町公民館から現在の資料館に移ってから展示資料を継ぎ足し継ぎ足しで積み上げてきたので、終始一貫した展示シナリオは皆無であり、そのため大改装するための新しい展示に対応するシナリオ制作が要求されたが、館長を含

め総勢 5 人の職員全部が事務吏員と技術員で専門家でなく、当時の新聞記事の言葉を借りれば「“シロウト”」の集まり[17]なので、学芸員に期待していると言われた。

次いで、関係者を集めた会議で、南側ガラス窓を壁で塞ぎ、その前に展示ケースを設置して完全に自然光の入射を遮断することになり、天井まで鉄枠を組上げ前面にアルミキャスト板を貼りつける設計事務所の案が決まり、設計事務所の担当者が基本工事の施工管理をすることになった。展示環境の一歩前進である。この改装で内部を暗くして人工照明を採用し展示ケースと一部露出展示となった。そして、展示シナリオとそれに沿った動線計画（この二つは開館以来完全になかったもの）と展示ケースの仕様と照度、資料の配置とクロスの材質等諸々の重要な部門を担当した。私が入る以前は、被爆資料を展示しておけば原爆の悲惨さは分かるだろうと考えていたのか、肝心の博物館的諸機能面は皆無状態にあった。専門的知識・技術を有する職員（学芸員）不在であったから無理もない。

第二は、繊維類（衣服）と紙の保存対策が急務であること。両方とも被爆（熱線と放射線を浴びている事）とその後の自然光が充分当たる場所で、しかも展示替えも全くしたことがない杜撰な資料管理、そして長年の額縁展示による衣類は日焼け退色などの経年劣化が著しい状態が何年も続いたのであった[18]。

先ず第一の仕事は、大改装に着手するための展示シナリオ制作と動線計画であった。従来の展示が 16 部門に分けて情念的、感性的な表現で解説されているのを半分の 8 テーマ 12 セクションに再編成し直し、学術的にも正確に、科学的に、しかも具体的に判り易い展示に変えるため大鉈を振るった。展示は歴史叙述の重要な一形態であるから、そこには歴史的、また同時に科学的な研究の裏付けを基に記述するべきものである。然るに以前の展示は専門職員がおらず、そのような意識がないため、ともすれば悲惨さを訴える文章が先行していた。全ての解説・説明パネルを一新するため、原爆被害の学術書、英文和文の論文を読みこなして連日遅くまで学芸員室に籠り一人で書き上げ、完成原稿を館長が目を通した。まだパソコンもワープロもない時代、資料館にはコピー機すらなく、原稿用紙に書いていたので大変苦労した。作業に入る前に資料の台帳他を見せて欲しいと担当者に言ったところ、資料受付簿一冊はあるが資料カードも、分類カードや展示品カードなど基本的な情報カード類が皆無、個々の資料写真もない、いわゆる博物館的機能ゼロ状態で、内情を知って驚き唖然とし、全くひどいところに来てしまった、先が思いやられると感じた。実際その通りで、新しい方法ややり方は全て手本を見せる必要があり、過重な負担が学芸員の双肩にかかって来た。

さらに初代館長の長岡省吾氏や原爆資料保存会の会員が集めた資料にはマーキング（識別可能な目印をつけておくこと）がしていないので、被爆瓦などの採集場所が不明である。資料整理の方法は、博物館学の専門書や他館との交流を通じて知識や情報が入手できるのだが、被爆資料を扱う独自の分野で閉鎖的で普通の博物館や資料館と

光が差し込む展示室
（1973 年頃、広島平和記念資料館提供）

は違うという意識が強いために博物館路線を歩むことをせずに他館との交流も無く、館としては展示以外に諸機能は知らないので何もしない事が常態化した杜撰な資料管理のまま、昔通りのやり方が踏襲されてきた。当時の職員の中にもこの資料館は博物館とは違うのだと言う者がいたが、これは資料館の崇高な存在「理念」がメモリーと記憶され、博物館の「諸機能」の区別が全く出来ない人の言い分で、それに固執することは過去の資料館がたどった道であることは歴史が証明している。歴代の職員は全て事務吏員で誰一人やっていないのは歴代館長の怠慢であると思った。そんな中で彼らに妥協する事は後戻りすることになるので、そんなことはできないと唯一の学芸員が大改革をやるのだから大変であった。後日、広大考古学教室では多くの遺跡と出土遺物の多くのデータを情報カード化しており、広大から各種のカードを取り寄せ原案（雛型）を作成し、職員全員に説明し今後はこれにすることにした。学芸員不在の期間が長く Backyard での仕事（資料管理）を知らず、展示以外充分に機能しておらず、その展示も自然採光、額縁展示という保存面で最悪の状況のもので、その間に蓄積したツケは膨大なものであった。

新たな展示では館入り口の導入部に、当時の市中の軍事施設、軍需工場を調べて地図上にドットしたパネルを作り、広島が西日本最大の軍事都市であった一面を明らかにし、また、その隣にリトルボーイの実大写真パネルを展示したのは私のアイディアであったが、従来こんな内容のパネルは無かったので、大丈夫かと言う批判を耳にしたが、これからは真実を伝えることが大切だと一蹴した。同時に全ての解説、説明パネルを従来の悲惨さを重視した記述を止めて科学的な表現に変えたため、1975 年（昭和 50 年）以前の展示と以後では全く違うのである。何事も前例のない事や誰もやってない事を実行するには勇気と決断が必要なことは言うまでもない。

後日、判り易い展示だという評価が中国新聞記事に見える[19]。勿論、迫力に欠け単なる陳列だと言う意見もあった[20]。なかには改装前の雑然と積み上げた展示に迫力があったという意見もあったが、新展示が吟味されたシナリオに基づく展示で、解説・説明パネルは全て科学的データの裏付けにより、悲惨さを訴える表現を出来るだけ押さえた記述にしていたので判り易いと好評という意見が大勢を占めていた新聞記事がある[21]。ともかく実物資料をどう保存し、また公開のためには長期的に見据えた質の高い保存法が必要であった。

繊維類、衣服の展示は大き目の額縁に入れて有孔ボード（穴あきボード）に掛ける方法が 20 年間採用され、太陽光が充分に当たる場所に展示していたものを全て中止して額装から解放したが、その時に日焼けで薄い褐色の台紙に、除いた衣服の痕跡がはっきりと白色台紙上に残った[22]。それだけ衣服が紫外線によるダメージを受けていたのであった。

開館当初から 20 年間展示されていた衣服
（佐々木雄一郎撮影、佐々木喜代美提供）

そこで、衣服は薄用紙に包み、木箱、

これは広大考古学資料用木箱の大小一セットを寄贈して頂き、これと同じ仕様でヤニの出ない木材で新たに製作した木箱に入れて収蔵庫で休ませた。展示優先であったため相当な数であった。しかも展示環境が長時間日光に晒される最悪の条件下にあったため日焼けによる退色と材質の劣化が認められたが、この段階での保存処置は出来なかった。先ず、額縁からの解放が最優先の仕事であった。専門職員が配属していたら、こんな展示は絶対にしない。資料の扱い方を知らないと言う事がどんなに資料を傷めるか、無知ほど怖い物はない。私の考えは、資料が深刻な状態になる直前には最終手段の保存処置を実施すべきで、それまでは保存環境を改善して劣化の進行を遅らせるか緩和させるかして、被爆資料に対して絶対大丈夫だと言う処置法が開発されるまでは処置はしないのが最善と思うからである。つまり保存対策と保存処置は異なるのである。

大改装の一期工事は、全館の冷暖房と照明設備工事で、これは既に終わっていた。設計事務所による基本レイアウト案に沿って展示場内部に天井まで展示ケースで壁を作って南側の窓を塞ぎ、自然採光をやめて人工照明、当時あまり知られていない 40-SDL NU（照明の紫外線放射量が抑えられた博物館・美術館用蛍光灯）を採用するよう指示した所、設備課の担当者から今の照明は普通の蛍光ランプを入れた仮設のもので最終の位置を決めたい、経費上今の蛍光ランプを使用したいと言われたが、展示室には無紫外線ランプを採用すべきで、さらに窓を塞いだ館内の照度測定値が 500～700 lx（ルクス。照度の単位）あり、これは公民館や学校の教室の照明には良いが展示室で使うには明るすぎるため、照明器具の数を減らして室内は 200～250 lx 以下、展示ケース内は 300 lx、但し遺品の衣類の展示ケース内は 100 lx 以下 50 lx 以上にしたいと協力を要請し、資料保存最優先の説明を聞いて納得してくれた。そのケース内の蛍光灯ランプを交互に外すと照度は随分落ちるため、この方法を随所に使った。

開館以来初めて実施した作業は展示替えで約 10 点の遺品の衣服・繊維類の資料を替えた。展示位置をジオラマの裏側の L 字スペースに照度 100～50 lx に抑えた場所に、年 4 回の入れ替えを閉館後に K 技術員と二人で実施したが、一ヶ月前から説明パネルやキャプションを書き上げて写植文字で外注にしたから、発注書類の作成や文字校正・キャプションケースに裁断して嵌め込む作業などを学芸員一人でやるのは大変な作業だったのを覚えている。

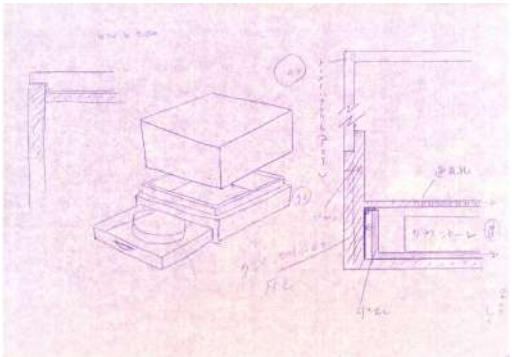
なお、2022 年（令和 4 年）秋に広島平和記念資料館を訪問する機会を得た。実に 40 年近く展示を見ていないので、随分変わった感じを受けた。あの日建物疎開作業に動員され被爆死した中学生の遺品（衣服類）40 点の展示の前で足が止まった。同じ場所で大勢の学徒が遭難したので、それを暗示するためか意図的に遺品の集合展示がしてあった。しかしキャプションがないので一体誰の遺品か、また個々の被爆の様子や凄惨なドラマがあった筈で

新たに設置された展示壁
（注：この写真はストロボ撮影のため明るく写っているが、実際の展示照明は 250lx に抑えている。広島平和記念資料館提供）

あるが見えない。過去の展示では、ジオラマや蝋人形で被害状況を示したが、現在の展示法や技術でもってしても、どう頑張って見ても被爆のオーセンティシテイ Authenticity（真実性＝ Reality）は担保出来ない。じっくり見ないで足早に移動する人が多い。ここの展示の照度は 50 lx と聞いている。資料館の利用案内から年間積算照度を計算すると 363 日×開館時間× 50 lx＝169675 lx.h（補注：lx.h＝1 時間あたりの積算照度）になるが年 2 回展示替えにすると半分の 84837.5 lx.h となる。遺品の中には色物（染色品）の衣類があり、これに対する半年間積算照度の値の妥当性はよいものなのか、それとも問題が生じる可能性の有無について検討を要しよう。永久保存が如何に難しいものか頭を悩ます問題である。

もう一つの問題は、空調ダクトからの吹き出しスリットが近いために、展示場内は人に快適な温湿度であるが展示ケース内のそれは適切な数値を示していない。私は赴任後すぐに必要な物として自記温湿度記録計を 2 台購入し、正式のオープンまでに館内各所のデータを取り館内環境を把握した。しかし、これらの機器の測定値には誤差があるためアスマン式湿度計 [23] を急拠購入し、より正確なデータを集めた。これらのデータにより次のことが分かり保存対策の科学的根拠に使った。空調機は省エネタイプの館内空気を循環させるものであり、天井のスリットから吹き出るエアーは展示ケース下部の孔を抜けて窓とケース裏を通過し空調機に回収されるが、吹き出し部は設定温度・湿度より違う数値のものが出ている。それらがダクトを経由し館内に噴出されて拡散され丁度良い温湿度となるが、湿度については調節が不充分でかなりのバラツキがある。被爆資料の展示には湿度が温度と同様重要な要素である。問題は、空調設備工事が先行し、レイアウトがあとになったことで南側窓を塞ぐ展示ケースが建てられることである。設計事務所による案が既に決定していたので展示ケースの位置は大体予測されていたが、そこにどういった資料が展示されるのか、まだ私の着任後すぐにとりかかった展示シナリオが完成していなかったので、天井の空調の吹き出し溝状孔（スリット）の位置が大体の位置に開けられていたことで湿度調整にバラツキがあった。

「放射線の影響」の展示ケースは館内と同じ温湿度にするため天井との間を意図的に開けた背の低いものにしていたので、天井のスリットからのエアーは RH（Relative Humidity。相対湿度）が被爆資料にとって最適なものではない。ここに展示する被爆女性の「頭髪」の保存管理、つまり保存と展示を両立させるにはどうすればよいのか、考えたのがアクリル樹脂の二重底でエアータイト容器を設計し製作した。下段に湿度調節剤ゼオライト（商品名：ニッカペレット。工場出荷時に RH55% に設定済み）と薬剤を計量入れた。一見すれば普通の樹脂ケースであるが、安易に考えたのでなく、設置場所の環境条件を正確に把握し、RH が不安定な場所におけるスポット的良好な環境設定を考えた結果である。



当時筆者が作成した頭髪を展示するケース図面
（広島平和記念資料館提供）

2　被爆資料の保存管理

1）資料館の資料保存環境

要するに、被爆資料一点一点に向き合い、どうすればこの資料を永く保存できるかを考え対策を講じなければならないのである。資料の保存対策の基本は温湿度の制御と管理に細心の注意を払うことだ。

もう一つ注意すべき点は、年間 100〜180 万人の入館者があり、靴底や衣服から出る粉塵で大き目の物は空調機のフィルターと洗浄で除去されるが極微細なものが浮遊微粒子となって室内に存在していることで、これが汚染因子、劣化因子になる恐れがあることである。この問題の抜本的改善策は測定機器を用いて環境調査して対策することであり、これが将来の課題であろう。解決策の一つは高性能の大型の空気清浄機の導入しかないであろう。

当時、噴水と館入り口スペースが大型バスと乗用車の駐車場となっており、修学旅行シーズンには多数のバスがずらりと並んでいた当時の写真がある。私は観光課のトップに何度も駐車禁止を申し込んだが実現できなかった。何が問題であるのかは、運転手のサービス心からか夏は出発前早くからディーゼルエンジンをかけてガンガン冷やし、冬は暖房の影響、特に夏は南風のため排気ガス内のエアーゾル状の浮遊する汚染物質の資料館への流入を懸念していたが測定できなかったからである。当時、紙屋町交差点で環境課が排気ガス調査をしている新聞記事があり、当日、測定器具と汚染物質のデータを見に行ったが、現場の装置は自動測定のため導入できなかったが、化石燃料の出す各種の汚染浮遊因子を実際に知り、大いに参考になった。被爆資料の永久保存のためには大気汚染の実態を知っておくことが重要で、一例を上げれば国宝指定の桜ヶ丘出土の銅鐸 14 個が神戸の公立館にて展示中に腐食が見られた原因は、近くを通る第二神明道路と県道が建設され、車の排気ガスの汚染物質であった事実を知っていたし、私は当時既に広島修道大学で博物館学他を講義していたから、大気汚染、地球温暖化などを学生に教えていた。これらの諸問題は、今現在なら敏感であろうが半世紀前には関心を持つ人は少なかった[24]。

2）展示と保存の両立

被爆女性の頭髪の展示と保存の矛盾する条件は二重底ケースの開発で解決したが、被爆資料は一点一点素材や被爆場所の違いを考慮し資料にこめられた記憶をどう保存すべきか、劣化が進行して資料を崩壊させてはならないのである。この頭髪も以前は額装展示で年中自然光によりかなり乾燥していたため取り扱いが極めて危険なもので、RH を最優先に考えた唯一の被爆資料の保存と展示の両方をクリヤーしたものである。しかし私は、別の考えを持っていた。それはこの頭髪が放射線を浴びており、被爆線量は米国の研究データ（当時の被爆線量暫定推定値 T65D）から推定され、その後の太陽光の当たる場所での展示で、多分組織の破壊が始まっていたのか相当傷んでいると考えられる。それは額縁から移す際に粉化した少量の頭髪片を認めたからで、今後、動かすことや触ることも絶対に避けるべきだ。おそらく将来この頭髪は脆弱化が一層進み自然崩壊して行くであろうと予測されるから、そうなる前に永久的な保存処置をするべきであろう。

電子顕微鏡等で調査すれば被爆場所も明確であり、被爆放射線量が推定できる（現在の放射線量推定方式は進化している）。繊維類の多くは遺品で、それらの本源的な価値という概念を設定すると、遺品の繊維に限定した本源的価値の構成要素は各遺品の持つ基本的情報に加えて、放射線量の推定値と熱線による焼損状況（基準が無く困難）で、定期的にチェックして劣化の進行状況を科学的データとして把握するのが目的である。

資料館には被爆資料の素材により劣化の進行状況を正確に把握し、良好な保存状態を維持して未来へと伝えねばならない使命がある。従って被爆資料の本源的価値の全体が総体で、この本源的価値の総体を壊すような展示や取扱いはすべきではない。この本源的価値の総体が数百年後にどうなっているのか正確に言える人は居ないが、予想されるのは「脆弱化」は間違いなく進行していることだ。同様に他の繊維・衣服も木綿、スフ、麻、混紡と様々あり、それらの組織の科学的調査を実施して残しておく価値がある。放射線の人体への影響は 77 年を経ても悪い影響を与えており、遺品の衣類も原爆の恐ろしさを負の側面から実物を科学的に調べた記録をカルテとして残しておくことが将来保存処置をする際の参考になるであろう。

3 「人影の石」の保存と窒素ガス封入実験

1）外部協力者の存在

半世紀前に平和記念資料館の学芸員として、もう一つ真剣に考えたのは、資料の劣化問題である。それは空調機を運転している日中は問題ないが、夜間は機械を止めており、当然夏と冬の昼と夜の温湿度に差が生じている。この少差を無視してよいであろうか。展示すれば、その期間繰り返されており、資料の永久保存を徹底して考えるならば、この微細な劣化因子にも対応すべきであることは言うまでもない。どうすべきか色々と考えたのが繊維類、頭髪、紙などに限定した資料の窒素ガス封入による保存方法であった。この方法（理論）に到達したのは、全くのチャレンジ精神の発露からで、被爆資料の永久保存にはこの方法が最もベストなものと考えたからであった。勿論、美術工芸品などの文化財の保存を研究している専門家たちには、不活性ガスによる保存方法の知識は当然知られていたが、しかし、この方法を被爆した繊維関係に応用したらどうであろうか、とか、やって見る価値があると主張する研究者や論文や論説など半世紀前には、私を除いては全く誰一人もいなかったのも事実であった。誰もやっていないので試行錯誤でチャレンジする価値があると思った。

実験には、模型でなく実物大のアクリルケースを製作し、器具や装置を調達して大型ボンベから窒素ガスを流して各種のデータをとり、それらの分析を通じて問題解決の指針とした。実験を実施したのは半世紀も前の話である。窒素ガス封入実験開始の記事が 1978 年（昭和 53 年）1 月 1 日付の中国新聞の記事にある[25]が、この段階では窒素ガスを流す方法にするか、または封入にするか未定であった。

被爆資料の永久保存は、当時、前例がないため、私は広大考古学研究室の内外の専門雑誌や書籍と諸先生方の助言と協力を得ることができ、教授や大学の人的ネットワークで東京国立文化財研究所に相談した方がよいとのアドバイスがあ

り、荒田館長に相談結果を伝え上京し東文研に行きたい旨話すと直に行くように費用を主任に指示してくれた。

東文研行きの件でとても信じられない話がある。それは志賀氏の著書（志賀 p.114-115）によると浜崎館長の時、東文研の岩崎友吉修復技術部長が広島市の依頼で来館し、資料の診断（岩崎所見）をまとめたとある。そして岩崎所見が市の保存対策への出発のような記述であるが、全く違うので訂正しておきたい。私が岩崎部長の来館を知ったのは 2021 年（令和 3 年）6 月、志賀氏の著書からであるので、実に 49 年も経過しているから半世紀近く全く知らなかったことになる。

疑問となる第一は、浜崎前館長（1974 年（昭和 49 年）3 月 31 日退職）から 4 月着任の荒田新館長への事務引き継ぎに、東文研および岩崎部長（所見）のことが引き継がれていないのか、保存対策自体数年前からの市や資料館の懸案事項で荒田館長が知らないとは到底考えられないが、何故か新館長が全く知っていなかったことが不思議である。それは荒田館長に東文研に行きたいと言った時、奈文研との違いをレクチャーした事実があるからだ。もしも荒田館長がご存知ならば、昨年東文研の岩崎部長が来館しているのでたずねてみなさいと学芸員の私に言ってくれるはずである。しかも資料館の職員も誰一人知らない点と主要人物の来館を記録する館日誌にもない不自然さがある。また展示シナリオ制作のため館の過去の記録（展示シナリオ類似の記録かメモ）の有無と現状の把握で冊子や文書類は全て目を通した覚えがあるが、何一つなかった。市のどの部局が依頼し、招聘したのだろうか、役所の組織構成から資料館としか考えられないが、資料館が依頼していないから「市の依頼」はあり得ない。

第二は、志賀氏が言及する「岩崎所見」は、前掲の 1973 年 9 月 21 日付の朝日新聞記事を指しているが、これらの内容は学芸員としての就任以降の新聞記事に保存対策の概要を話したものが報道してあり、「岩崎所見」の内容は、私が院生時代に熟知または実施済みの内容で新しいものではない。特に鉄製品の処理は、私が広大にいたころ古墳出土の鉄刀を PEG（Polyethylen-glycol ポリエチレングリコール）による減圧真空含侵法を数回実習にて経験済みである。これは奈文研で開発された画期的な方法で、東文研では日光男体山出土品にはアクリル樹脂を使用して処置し、PEG を使っていないのである。私は木簡等の木製品にも PEG を使った方法が最良と考えている。

第三は、その後の保存対策は「「岩崎所見」の具体的な内容についても実施の方向で検討」（志賀 p.116）とあるが、どの組織が「実施の方向で検討」したのか、何一つも実行されなかったのは出来なかったのが事実で、それは市役所のどの組織にも高度な知識と技術を持った専門職員の「受皿」の存在そのものがなく、翌年の学芸員の採用を待ってからであったから、岩崎所見とは完全に関係なく、後述するように私が主に広島大学で培ったネットワークで情報を得て考えた独自の方法で実施した事実（多くの新聞報道記事がある）[26] を強調しておく。志賀氏が言う、資料館の資料保存対策について「七五年に広島市は文化庁と契約を結び」（志賀 p.118）[27] も同様で、市当局にそのようなことの出来る人材は一人もなく、どの被爆資料をこうしたいと説明・折衝・お膳立て一切を仕切ったのは学芸員の私しかいなかった。更に、文化庁に参上して担当課長にお会いしたのは館長ではな

く学芸員であった意味と背景は何であったか、それは被爆資料の本源的価値を充分に知り、各種個別の保存方法を論理的に組み立てられるのは資料館の中で唯一学芸員しかいなかった。志賀氏の著書では「市」が動きだしている表現であるが、完全に事実と違っている点は、市当局は「学芸員探し」に没頭していて保存対策に着手などしていなかったのである。着手する人材（学芸員）が一人もいなかったのに一体誰が着手したのだろう。市の組織上に専門家ないし「受皿」が無い限り、動かなければ何もしないのが実態であるのは役人なら知らぬわけがない。この様な現象の背景を正しく判断をした上で記述すべきであろう。

岩崎所見の件で最大の不思議な点は､私が東文研で西川杏太郎修復技術部長(岩崎部長の後任)、登石健三保存科学部長の両氏にお会いし被爆資料の説明をした際に、前任者岩崎部長の話は一言も出なかった事実と、両氏とも広島平和記念資料館へ行ったことがなく、被爆資料の保存対策はどこもやっていないから慎重にすべきで、先ずは実物を拝見してからにしたいと言われた（これは資料保存の専門家として極めて当然なことであろう）ところからして、前年に岩崎部長が来館し「岩崎所見」を残していることを完全に知っていない事実は、何を意味しているのか。それは組織で対応しておらず、公式の市の要請と診断依頼などなかったのではないかと判断出来る。要するに、西川、登石両部長の正式招聘は、私が東文研を訪問したことが嚆矢であったのは紛れもない事実である。間違いなく岩崎前部長は東文研と言う組織で対応するというルール無視と上級機関である文化庁への連絡もせず来広している。この点後述するように、正式に招聘した西川部長は関係機関へ全て連絡して対応していて両者の間に大きな開きがある。このような初めての重要な案件（資料の診断）の招聘依頼を事前に訪問もせずに電話や書簡のみでできるだろうか、出来ないと思うのである。私がとった行動のように、国の、しかもその方面では一流の機関に初めて依頼するには、先ず、アポイントをとり写真資料などを持参して直接訪ねて事情を説明するのが常道であり、また礼儀でもあろう。

東文研は東博（東京国立博物館）に隣接する建物で、東博には著名な考古学者で考古課室長として母校広島大学出身の先輩本村豪章氏がいて広大教授から話が入っており、先輩からのルートで西川部長への仲介の労をとって下さり全てがスムースに運んだのであった。広島市かまたは資料館が岩崎氏を正式に招聘（私は市の招聘はないと思う）したのなら依頼文書が残ると思うが、西川、登石両氏が全くご存知ないのは不可解な話である。上京する前に荒田館長に東文研の専門家の招聘の話をしたら心配するなと背中を押してくれていたので両部長に 10 月に来て頂き、持参した検査器具で展示環境調査を実施したことは日本博物館協会の『博物館研究』に掲載した拙稿（1975 年（昭和 50 年）6 月 25 日発行）にて紹介している [28]。展示室内の照度が 3000lx と計測されたのには大変驚いた。

「岩崎所見」の最大の欠点は、自然光照射と額縁展示の拙さの二点を指摘していないことである。前掲の朝日新聞記事にもそのことを全く触れていない。専門家の岩崎氏が一番に指摘しなければならないのは、展示室内の自然光照射と額縁展示であろうが、それについても全く言及していない。私が招聘した西川、登石両部長は、この点を現場にて対応した館長と私の前で言及されている。私は市に採用される数日前に資料館を訪問し館長の案内で展示を見た時に館長に指摘済み

である。悪い所は具体的にこの点が悪いですよと率直に言及するのが専門家の役目ではないのか。「診断」に来たのなら医者に例えると一番重要な見立てを見逃しているから、華陀や扁鵲のような天下の名医とはとても言えない。

東博には、私の研究分野が中国新石器時代とスキタイ（ウクライナ大平原を疾駆した）などの騎馬民族の青銅器なので東洋館に資料がある関係で院生時代に何度も東博に行き、考古室長の先輩を訪ね各種の情報をいただいた。当時、海外調査でイラン学術調査に選ばれた話をしたらアフガンやイランを研究している人を数名教えて頂いたので連絡して情報を得、マツダ自動車会社から私名義の車１台を無償で頂いたので三井郵船で輸送しイラン各地を踏査し、前掲『草原の道』(1973年）に取りまとめた。東博の先輩から海外学術調査の経験ありの情報が西川部長に伝えられていて、調査終了後、西アジアが話題となった。先輩は無名の私の為に「伯楽之一顧」をしてくれていたのであり、海外発掘調査や数種類の百科事典に執筆している事実を知ると研究分野は違うが私を研究者と扱ってくれた。広大考古学の主任教授や東博の良き先輩たちのおかげである。それはこのような立派な研究者との交流、論文抜刷の交換、五種類の百科事典に執筆していたこと、そして十数編の論文が東京大学史学会が発行する『史学雑誌』の「回顧と展望」に拙稿が既に何度も紹介されており、その分野の研究者は先ず目を通すので私は東アジア研究の常連組として名が知られていたことによるものである。

志賀氏の著書によれば、市の保存対策が岩崎所見の提言からスタートしたと書いているが、これも完全に間違っている。市の保存対策は、空調設備を設置したこと、窓ガラスを紫外線カットフイルムに貼替えたこと、収蔵庫を設置したことである。勿論これは保存対策の一環であるが、従来の劣悪な展示環境を替えただけのいわばインフラ整備をしたに過ぎず、他館ではとっくに済んでいることで、肝心の被爆資料をどのように保存するのか、市も資料館も資料保存について何一つ基本方針もなく、また具体的なアクションプランなど何一つ実施していなかったのは、初代学芸員として着任した私が一番よく知っている。

志賀氏の著書には、上記の対策以外に「展示ケースの中の酸化防止の薬品処理」(志賀 p.150）と記述するが一体どんな種類の薬品をどのように使用したのか、また誰が処置したのか疑問があるのは、学芸員の私が一切知らない事であるし、酸化防止を必要とする展示ケースがないのである。きちんとした理由もなく訳の知れない薬剤を使う保存処置は絶対にしては成らぬことで、鉄則でもある事実を知らない人がやったのであろう。

1973 年 9 月 21 日付の新聞記事に「市、改装時に実現へ」と具体的な保存対策をたてる検討を始めたことは専門家の学芸員を確保してからと報道しているのが事実である [29]。学芸員として最初にやった事は、あの額縁展示を全面的にやめたこととレイアウトの変更、盛りだくさんの展示を半分に減らしたことと、館内の展示環境がどういう状態にあるのかは科学的調査で基礎的データを得ることが最重要で、それをせずに保存対策など立てようがないことは学芸員なら判ってくれると思う [30]。

志賀氏の著書に依ると、第三期工事は休館しないでロビーを仮設展示室にして「従来の一〇七〇点の展示資料を六〇〇点程度に抑え、年三回入れ替えを行ない、延べ一八〇〇点を展示する試みが取り入れられました」という記述がある（志賀

p.152)。美術館は特別展で全展示品を入れ替えるであろうが、普通、資料館・博物館の展示品入れ替えは、極一部の数十点程度の物で、600 点、年三回も替えるようなことは先ずしない。学芸員なら当然知っているが、被爆資料を単に陳列するのでなく、先ず何をどう展示すべきか展示資料の選択、次いで展示順序、照明と照度の調節、動線計画、セキュリティ対策、説明や解説パネルなどを入念に考えたシナリオを作って展示するのが常道で、年間三回もシナリオを毎年作らないといけない事になる。専門家が一人しかいない施設で、そんな馬鹿な事をする余裕などあるわけがなく、学芸員による展示活動の実務を全く知らない人の記述である。さらに、ロビー仮設展示をやっていないのは、ロビーへの入り口部が改装工事個所で鉄骨組立て・アルミ板貼り付けのため、切断・溶接作業等、最も危険な場所であったし、しかも夜を徹して資料を移動させた記憶が無い。要するにこの記事も事実と違い、全く話にならない虚言としか言いようがないのである。一体何を根拠にしたのであろうか。志賀氏の著書の保存に関する記事は間違いが多く、将来、資料として使用するには問題がある。

2)「人影の石」の保存

もう一つ、これを読む読者、とりわけ研究者（学芸員）に伝えたいことがある。それは人影の石の復元の件である。旧住友銀行広島支店の正面入り口の階段で 1971 年（昭和 46 年）2 月資料館に寄贈されロビーに設置し露出展示された。市へ寄贈された段階で全体が黒っぽい状態で、肉眼では識別できない状態（当時の写真から判断）であった。

館長から「死の影の復元は無理だろうか」と相談を受けた様子を当時の新聞記事[31]から私の発言を要約すると、「花崗岩に熱を加えると摂氏 580 度前後で低温石英が高温石英に変化する転移点を思い出し、原爆の熱線を受けた石段の表面転移点を遥かに上回る高熱を受けている。それなら高温石英となり、影の部分とは違う筈、死の影は必ず残っている。消えたナゾを解きほぐすきっかけだった」。

そこで、先ず、「死の影」の写真、それもできるだけ早い段階のものから、その後に撮影された写真を朝日新聞社ほかのメディアの協力で集め、年代順に並べ、消えて行く過程を正確に追った。この結果、石段の在った位置は爆心地から 260 メートルの紙屋町で、市内でも指折りの交通量があり、資料館に移転する前の数年間、交通量の急増に比例して急速に薄れていったことを、広島県や市の大気汚染データをもとにつきとめ、しかもすぐ側を宇品線電車路が走り、金属粒子や塵埃等の汚染物質が元凶と判断した。

そこで、復元方法を考え、見通しがたった所で、被爆直後に原子爆弾災害調査研究特別委員会の地学班のメンバーとして国の総合調査に参加した広島大学理学部地質学の小島丈児教授に面会し、集めた全ての資料を見せて説明して助言を受けた。先生は人影の周囲の花崗岩が熱線の照射で転移し新しい面が形成され熱線を受けなかった部分が元の状態に人体部分が融けて黒くなっている。実は、袖壁のてっぺんに、マトリックスの中の黒雲母の直径 2 ミリ位の粒が高熱で融けてガラス化しているから、ルーペで見なさいとアドバイスし、水で洗う処置に立ち会って頂いた[32]。つまり、高熱を受けた部分が変化している確実な証拠である。なお、志賀氏の著書では 2000 年（平成 12 年）から国立奈良文化財研究所が実施した「人

影の石」の資料調査の結果を受け、資料館が「人影の石」の展示説明文の一部を変更したことが以下のように説明されているが[33]、この説明では読者に以下の点で誤解を招きかねないという意味で不正確であることを述べておきたい。志賀氏は「資料館の展示説明文は、この報告を受けて、「強烈な熱線により、周りの石段の表面は白っぽく変化し、人が腰かけていた部分が元のまま黒く残りました」とあった従来のものから、「人が腰かけていた部分が影のように黒くなって残りました」と変更されます」(志賀 p.181。下線は引用者)とし、それは調査の結果「石段の色の変化は、必ずしも熱線による石の化学変化の影響だけではなかったよう」(同上)だからと説明している。現在の資料館の「人影の石」の展示説明文は「原爆の強烈な熱線により階段は白っぽく変色し、腰かけていた部分が影のように黒くなって残りました」とあり、志賀氏が言う展示説明文の変更点は後段の「影」の部分の説明であり、「元のまま黒く残りました」とあった「元のまま」を省略し「影のように黒くなって」としたことである。だが、展示説明文の前段の「原爆の強烈な熱線により階段は白っぽく変色し」の説明は現在もそのまま展示説明文として用いられていることは補足しておきたい。なぜなら、この説明は当時の私が小島教授の報告書を引用して書いた説明文であり、志賀氏の著書ではあたかもこの点をも変更したかのような説明になっているが、この点は小島教授説の表記が正しいのである。

前掲の石井光太氏の著書(p.62)にも長岡氏が護国神社境内で花崗岩の台座に腰掛けようとしたところ手にチクッとしたので良く見ると熱線による表面剥離現象に気付いている。ちなみに、資料館には材木町にあった伝福寺の花崗岩製献花台の軸があり、黒い部分は風雨に晒され汚れた部分で白い部分は熱線を浴びて形成された新しい面である。両面を触診すれば分かる[34]。

1975 年の展示更新時の伝福寺の献花台(左)
(横田禎昭寄贈、広島平和記念資料館蔵)

アクリルカバーを付けた「人影の石」
(広島平和記念資料館提供)

旧住友銀行広島支店の建物は 1928 年(昭和 3 年)に建てられ、正面玄関は大きな廂がなかったため被爆までの 17 年間と被爆後から 1967 年(昭和 42 年)までの 22 年間は風雨に晒され、1971 年(昭和 46 年)に市へ寄贈するため切断されるまでには木柵にガラス枠で覆いがあった。資料館ロビーに置かれて安心したのか 4 年間露出展示、この間に入館者から出る汚染物質による石全体の汚染で影が見えなくなっている事実がこの時期に撮影された写真で判る。

つまり館内汚染が進行していたのに気付いた私は水洗い処置後には厚さ 10mm のアクリル板カバーを製作し隙間をウレタンフォーム材で充填し、外

部からの汚染空気の流入を完全に遮断している。志賀氏の著書（志賀 p.180）では「空気の遮断も不十分であったことから劣化は防ぎ切れてはいませんでした」と書いているが、彼は何を見て何を根拠にして記事を書いたのであろうか。アクリルカバーの設置後も劣化が進行しているのが事実ならば、他の要因を考えるべきであろう。1975 年（昭和 50 年）の保存処理以降、人影の石の劣化が進行しているのが事実なら大変な事で、専門家による処置を必要とするだろうが、事実と違うのである。

ロビー展示中（1975 年（昭和 50 年）以前と以降）と本館内展示中の人影の石のカラー写真数枚を 2022 年（令和 4 年）に同館学芸員より入手し、また実物を実際に見たので詳細に観察すると、1975 年（昭和 50 年）に保存処理後の状態を維持しており、写真と実物を見る限りどう見ても劣化が進行している風ではなく、47 年前に私が実施した保存対策が旨くいっているものと判断される。年数回大型カメラで記録写真（カラー）を撮っておくことを提案しておきたい。

小島教授とはこれが縁で親しくなり、爆心直下の清病院の塀の上に載っていた鉄平石（複輝石安山岩）の貴重な被爆資料を研究室から出して寄贈して頂いた[35]。この鉄平石は長さ 30cm、幅 15cm、厚さ 2.5cm と小さく目立たないが研究者が見れば、すごい資料が展示してあると驚く代物である。それは、強烈な熱線で表面がガラス状に融けた直後、高熱ではじけた細石片が裏返しに癒着した現象を示す資料である。

私の在職中に実施した保存対策は全て公表し新聞に報道されており、誰でも概略を知ることが出来るが、唯一の例外は、紙の保存法に東文研の指導で「ラミネーション法」を実施すると新聞で報道されている[36]が、サンプルに瑕疵が見つかり、直前で中止した。将来、改良され信頼度が増せば再度検討されようが現段階ではしない方が良い。

3）窒素ガス封入保存法と封入実験への取り組み

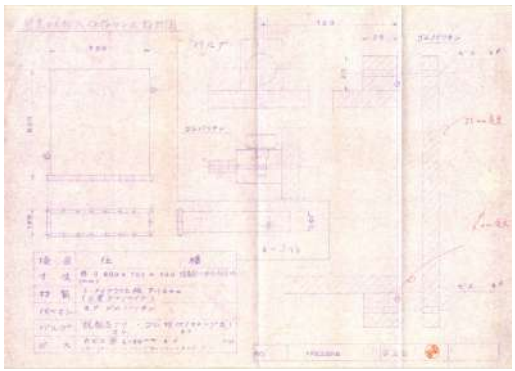
さて、本題の窒素ガス封入実験の件に移りたい。東文研との間に相互信頼関係の太いパイプができ、短い期間に西川・登石両部長を含め、計 8 名の紙、カビと害虫の専門研究員を招聘し保存対策を協議した。館の改装も一段落したので保存が急がれる繊維類の処置方法の大綱を考えることになった。当時私は毎年上京し東文研に行っていたので、西川、登石両部長に、外国の保存の専門雑誌に不活性ガスの応用の記事（実験段階）を読んだ記憶があることを話し相談したのが最初である。主に遺品の衣服は展示の際に広げたり、収納で折り畳む作業が必ずあり、その個所がほぼ同じであるため、繰り返すと破損する可能性があることと、被爆女性の頭髪の保存対策に最適と考えたと説明し、持参していた概略図を見せた。これまで記述してきたが、普通の文化財と違って被爆資料の保存方法など前例がないため、先ず私が考えたものを東文研の専門家と相談し、アドバイスを受けて深化、または修正して実施したのはリスク回避を考えた結果である。とにかく被爆資料の劣化防止が急務であることと継続性及び一貫性のある処置法であることを話した。

東文研で西川、登石両部長にお会いした当日、会談が終わった後、西川部長からこの後、文化庁文化財保護部へ行き濱田隆課長を訪ねなさいと私の目の前で電

話され、広島の原爆資料館の学芸員が行くから、その話を聞いて欲しい旨話された。昼食も早々に切り上げ、霞が関の文化庁へ行き課長他 2 名の技官の方々にお会いし、被爆資料の保存対策の概略と支援を東文研が担う件と負の遺産として将来何らかの指定を受けたいと話すと、暫く考えたのち、今の段階ではまだ早い、と言われた。国の機関のトップ級の発言には重みがあり、将来への示唆を含んでいる。被爆資料が負の文化遺産としての本源的価値がある件で文化庁の文化財保護部の課長にまで届いたのは私が最初であろう。このことは広島に帰り、館長に具に報告した。

西川部長は、私の要請を組織全体で対応し、国が被爆資料の保存に助言と支援をしている事実を明確にするためには、近い将来、上級機関の文化庁と委託契約をする必要のあることを予測して、関係先の課長に話を通しておこうとされたのであった。何度も繰り返すが、岩崎部長の行動自体が異例なもので、組織として対応していない点と上級機関に一切根回しもせず、6ヵ月後の定年退官を控え、計測器も持たずに資料館を訪れたのは個人的なパフォーマンスとしか思えないし、「岩崎所見」も関係者間には熟知の内容のもので新しい内容はないのである。西川部長は、数年後に文化財審議官に栄転され、最後は東京国立博物館次長になられた。上京の折には是非お寄りなさいと言われていたのでお会いした。それまでに論文抜刷を贈呈していたので話が弾んだ。西川先生は仏教美術に造詣深い専門家であり、磨崖仏関係の報告書を頂いた記憶がある。

両部長は、「窒素ガス封入法は我が国には前例がなく、まだどこの博物館も研究所も取り組んでないが良い方法で初歩的段階でのデータを取るのも良いと思う、そして欧米の二、三の博物館では実験段階の研究をしているらしいが、詳細なデータがない」と言われた。透明アクリル樹脂製の容器類は私が担当することになり、他の細かな点、板の厚さ、開口部の仕様と孔の位置、バルブの設置位置などの助言を受けた。



当時筆者が作成した窒素ガス封入ケースの図面
（広島平和記念資料館提供）

こうして私が入ってちょうど一年後の 1975 年（昭和 50 年）8 月 27 日に広島市と文化庁の間で被爆資料の保存対策の正式協定が締結された中国新聞報道記事があるが、被爆衣類の保存には我が国の伝統的文化財（美術工芸品）の保存研究上トップクラスの専門家の知識と技術にお願いするのが正しい道と思い、その路線を敷いたのである。具体的には紙類、繊維（衣服類）等の窒素ガス封入方法の初歩的な研究と実

窒素ガス封入ケース（レプリカ、写真右）と実際に使用した付属器具（写真左）（広島平和記念資料館「被爆 75 年企画展広島平和記念資料館のあゆみ第二部 8 月 6 日へのまなざし」の展示風景写真、広島平和記念資料館提供）

験（テスト容器としてアクリルケースの開発）である。アクリルケースの設計と製作を私が担当したので、市内数ヵ所の事業所を訪ねて図面を見せて出来るかどうか打診した。

最終的に県内の水族館のアクリル水槽の製作実績があり、技術面で信頼できるN製作所に決めた。ケースは800 × 700 × 190mm厚さ10mm、バルブ2個が付くが、それぞれに厳しい条件がついている。例えば、アクリル板は溶融接着にすること、これは普通の接着剤による接着は容器内に圧力の負荷が基準値を越えた場合、接着面が剥離する可能性があるからである。バルブ製作も本体は四角柱材からネジも円柱材から全て削り出す方法で製作したのは、その部分からガスが漏れる可能性をゼロにしたいからである。両側にバルブが付いた筒形のアクリル容器は附属品で、ガスボンベから出た窒素ガスは乾燥しているため容器内にRH55%のゼオライトを入れ、通過するガスに適正な湿度を与える装置である。1978年（昭和53年）1月1日付けの『中国新聞』に「今春から保存実験」と窒素ガス使用の実験開始を報じており、最初のアイディア段階から約2年半後に長年温めていたプランが実現化への第一歩となった[37]。

最終的には窒素ガス循環システム、容器内部の気体を窒素ガスと交換する事による画期的な保存方法で、必要な個数ケースを作り、中に衣服を広げて入れておきシリコンチューブで繋ぎ、窒素ガスのregulator（調節装置）を見ながら緩く窒素ガスを流す方法なら、展示する時はバルブを回して栓とし、管先にゴム栓を付けてガス洩れを防止し収蔵庫から移動する。学校の理科教室のテーブルにガスが配管されているように、展示室と収蔵庫内にも窒素ガスの供給装置を組み込む方法（システム化と巨大地震対策化、安全対策）もある。この方法なら衣類に直接に触れる（畳む・広げる作業）必要がなくなりベストな保存法・展示法である。この窒素ガス封入法が最適と考えたが、当時、残留酸素、換言すれば窒素ガスの注入量など簡単に調べる方法がなかった。成果主義の役所では、期間内に成果の上がらぬ実験に予算は付けられないとなり、残念ながら実験継続を断念した。

半世紀前に被爆資料のうち、衣類（繊維類）や頭髪等の有機物に対して最も有効と考えられる方法の一つとして始めた窒素ガス封入実験は、国内の博物館や資料館および大学、研究機関での実施例が全くないため、実施前に想定した大小様々な諸問題と実験中に顕現した問題解決のため各種のデータを得ることに主眼を置いた。諸々の実験はプロジェクトチーム的な組織ではなかったが、被爆資料の永久保存という大きな目標のために東文研や東博などの研究機関の専門家や大学の諸先生方、民間の樹脂容器製作業者等々、多くの人たちから専門的知識や技術提供と皆さんの協力に支えられた結果であり、関係した人たちに感謝する次第である。

半世紀経過した2021年（令和3年）初夏に広島平和記念資料館の学芸員からの情報提供で、「酸素検知剤（商品名エージレスアイ）」と言って、ケース内の脱酸素状態がピンクからブルーへと色が変化、要するに酸素濃度が目視できる優れものがある事実を知り、驚くと同時に、こうした分野も当然進化していると思った。当時はこのようなものが無く断念したが、半世紀経過した最近、熊本県玉名郡菊水町（現和水町）江田にある前方後円墳出土（明治6年発掘）の国宝の鉄剣、75字の銀象嵌銘文があり、東京国立博物館の平成館に展示されているがケース

内に窒素ガスを封入している[38]。また、埼玉県行田市稲荷山古墳出土の国宝指定の金象嵌「辛亥年」銘鉄剣、計 115 文字、発掘は 1968 年（昭和 43 年）で 10 年後保存修理の際文字が発見されて全国の注目を集めた。現在埼玉県立さきたま史跡の博物館に窒素ガス封入ケースで展示公開されている[39]。

要するに、窒素ガス封入法は完全に実用化されており、国宝級の考古学資料の保存と展示に応用されている事実がある。と言うことは、半世紀前に考え実験した窒素ガス法による被爆資料の本源的価値の総体を保存する方法は正しかったことが証明されたことになる。この方法が重要な文化財の保存に極めて有効であることが認識されてくると今後増えていくものと思われる。酸素検知材等の資料を引用すると、気密性に優れ、窒素ガスを充填し、脱酸素剤により 5 年間メンテナンス不要とある。科学的調査研究する事なく安易に使うべきではないが検討に値する資料であろう。

4　今後の資料館の学芸員養成について

これまで述べたような被爆資料の保存対策を今後考えるためには、保存科学方面のより高度な知識と技術を持った専門家（学芸員、研究者）の確保、出来れば欧米の博物館が自己の Conservation（資料保存のための）ラボを充実させ、外部へ委託せずに自分の所で処理しているように、「自前」でやれるような人材を養成するシステムを作るべきである。それには語学に堪能な学芸員を採用し、国内や欧米の博物館や研究所に留学させればよい。あと数年すれば、被爆百年時代となる。被爆資料は百年いや二百年それ以上と言う永いスパンで考えるべきもので、それが本当の永久保存であり、少なくとも近未来に被爆資料の完璧な保存体制を実施している資料館になって欲しいと思う。

余談になるが一学芸員に過ぎなかった私は、市長にレクチャー（中国の華南の都市について）した縁で親しくなった秘書課長に話し、こんな展望（vision）を持って仕事に当たり、その第一歩が学芸員の処遇改善で、学芸員は研究職または教員職の給与にするべき（国内に既に研究職の館あり）と、また人事課には学芸員採用試験問題の専門問題作成で出入りしていたから人事部長にも提言したことがある。『戦国策』に「先ず、隗より始めよ」という俚諺があり、実行すれば有能な人材が向うからやってくる、と言うと、夢物語だと言われたが、ICOM（国際博物館会議）の一組織である ICCROM（文化財保存修復研究国際センター）や ICTOP（人材育成国際委員会）、大学院時代に読んだことがある IIC（国際文化財保存科学会議）の保存科学に関する専門雑誌など、専門性のより高度な知識と研究能力と実践的技術を身に付けた人材養成は、これらのガイドラインを参考にすればよい。その他 BM（British Museum 大英博物館）や MET（Metropolitan Museum メトロポリタン美術館）のシステムを参考にして「身の丈」に合うものから出発すれば良いと思う。

それは、被爆した繊維類の組織研究の事例は聞いたことがなく、国内外の研究所等に外部委託するのでなく、資料を所蔵している広島平和記念資料館こそ実施する資格と使命があるからである。明治維新後の大学や高等教育機関にはお雇い外人教師を採用したが、優秀な学生を欧米に留学させ、帰国した彼らを教官に迎

えて外人教師と交代させた歴史的事実があり、日本人は経験とやれる能力を持っている。広島市が本気で近未来の資料館の在るべき姿を考えるべきである。

もう一つは、資料保存のより高度な知識と卓越した技術を所持する研究者・学芸員のネットワーク（フェローシップ制）を構築し研究データの集積が目標で、当初は国内で始め、研究テーマによっては国外（上記の自前論に矛盾する）に拡大すればよい。これを実現すれば国際的な協力体制（ネットワーク・一方通行でなく対等な関係）ができ、この分野において国内の一資料館を脱皮して名実ともに国際的な資料館に生まれ代わるものと思う。

おわりに

旧広島県産業奨励館、即ち、原爆ドームが 1995 年（平成 7 年）6 月に国の史跡に指定され、また翌年の 1996 年にはユネスコの世界遺産に登録された。原爆投下の悲惨さの実相を伝える建物として永久保存すべきものであることは言うまでもない。しかし残念な事に世界情勢は 2022 年（令和 4 年）2 月 24 日ロシア軍がウクライナに侵攻し、首都近郊のブチャでは多数の市民を虐殺しているし他州都へもミサイル攻撃で甚大な被害を出している。非常に危険なのはプーチン大統領が核兵器使用の可能性を公然と言及したことだ。広島と長崎の被爆の惨禍に今こそ学ぶべきである。

被爆資料の永久保存が恒久平和への道でもあり、将来、被爆資料の一部が負の文化財として国の指定を受けることを考えるならば、先ず資料の永久保存を確実に実施している事を示さなければならない。平和記念資料館初代の学芸員として、そのように思うのは、原爆で犠牲となった多くの人達への Requiem でもある。最後に平和記念資料館のさらなる発展を祈りたい。

脚注

1 広島平和記念資料館で「被爆 75 年企画展 広島平和記念資料館のあゆみ第二部 8 月 6 日へのまなざし－資料を守り伝え続ける」が 2021 年 2 月 27 日から同年 9 月 13 日まで開催された。

2 筆者の中国考古学に関する最初の単著は、横田禎昭『中国古代の東西文化交流』（雄山閣出版、1983 年）であり、資料館に在職中に刊行した。その他、その後の筆者の略歴と主な業績については、「横田禎昭教授 略歴・主要論文目録」（『総合政策論叢』5、島根県立大学研究活動・総合政策学会委員会編・刊、2003 年 3 月）を参照のこと。

3 中国の大学との主な共同研究としては、北京の中国社会科学院での講演記録や大学間交流協定締結の寧夏回族自治区の最高学府である寧夏大学との国際共同学術調査（文部省の科研）でゴビ砂漠東端にある阿拉善（アラシャン）砂漠を含む鄂爾多斯（オルドス）地区で撮影した 6 年分の膨大な数量の写真とデータファイル構築作業などがある。

4 広島県安芸郡府中町の下岡田官衙遺跡は古代山陽道駅館遺跡で広島県では最初の国の史跡指定（2021 年 3 月 26 日付）となり、地元紙に大きく報道され（「下岡田官衙遺跡　府中町初の国史跡へ　調査半世紀「長年の夢」」『中国新聞』

2020 年 11 月 21 日)、県の考古学史上必ず記録される快挙となった。筆者は同遺跡調査指導委員会会長職、そして 2022 年からは同遺跡保存活用計画検討委員会の委員長を務めている。詳細は横田禎昭「安芸国府の研究史」(府中町教育委員会『下岡田遺跡発掘調査報告書：第 1 次－第 11 次調査の記録 1（府中町文化財調査報告)』2020 年所収）を参照。

5 「被爆資料劣化に危機感 改善へ奔走　保存の礎築いた初代学芸員横田さん」『中国新聞』2021 年 7 月 20 日。

6 志賀賢治『広島平和記念資料館は問いかける』岩波新書、岩波書店、2020 年 12 月。以下、同書からの引用は「志賀 p.（ページ数)」と略。なお、志賀氏は 2013 年 4 月から 2019 年 3 月まで資料館の館長を務めた。

7 「原爆資料の科学的な管理体制が整う 専門の「学芸員」置く～風化を防ぎ永久保存へ」『中国新聞』1974 年 9 月 17 日。

8 志賀 p.114-117。

9 「原爆資料の永久保存策急げ　国立文化財研の部長が警告「強い風化の危険」市、改装時に実現へ」『朝日新聞』1973 年 9 月 21 日。

10 『世界考古学事典』（平凡社、1979 年)、『大百科事典』（平凡社、1984 年)、『日本大百科全書』（小学館、1986 年)、『世界大百科事典』（平凡社、1988 年）など、「黄河文明」などの項目執筆を担当した。

11 石井光太『原爆：広島を復興させた人びと』集英社、2018 年。

12 横田禎昭「(中国)新石器時代」『岩波講座日本考古学』別巻 2、岩波書店、1986 年。

13 『中国新聞』1974 年 8 月 1 日。

14 広島大学イラン学術調査隊編『草原の道』亜紀書房、1973 年。

15 『土師：土師ダム水没地域埋蔵文化財報告』(1970 年)、田河禎昭「中国農耕文化の原初形態」(広島史学研究会『史学研究』120、1974 年 3 月)、同「新石器時代中国の家畜」(同『史学研究』124、1974 年 9 月)、同「中国新石器時代の墓葬における塗朱人骨について」(『東洋学論集：池田末利博士古稀記念』池田末利博士古稀記念事業会実行委員編、1980 年）など。他に田河禎昭「第二章府中町の原始・古代（律令以前)」(『安芸府中町史第 1 巻（通史編)』府中町史編修委員会、1979 年）も参照。なお、「田河」は旧姓。

16 その経緯については前掲注 7 の中国新聞記事（1974 年 9 月 17 日）も参照。

17 前掲注 9 の「原爆資料の永久保存策急げ 国立文化財研の部長が警告」『朝日新聞』1973 年 9 月 21 日。

18 この展示更新と資料保存については当時の担当学芸員として、田河禎昭「転換期を迎えた広島平和記念資料館」(『博物館研究』10-6、日本博物館協会、1975 年 6 月）で紹介したので、本稿とあわせて参照されたい。

19 「装い新たに開館 展示物減らし分類「わかりやすい」と好評」『中国新聞』1975 年 8 月 2 日。

20 「反応さまざま 衣替えして 1 か月半の原爆資料館「視覚的でよくわかる」「迫力なお“陳列館”に」『中国新聞』1975 年 9 月 15 日。

21 前掲注 19 の中国新聞記事（1975 年 8 月 2 日)。

22 「いたみ目立つ 30 年目の展示品 原爆資料館　衣類など 20 点ボロボロ 全資料 4700 点　遅れる“カルテ”作り」(『中国新聞』1975 年 4 月 13 日)も参照のこと。

[23] 乾球と湿球の温度から公式によって相対湿度を読み取る方式の湿度計であり、安定した湿度計測が可能とされる。

[24] 詳しくは横田禎昭「文明誕生と環境革命」(『聖教新聞』学芸欄、2008 年 3 月 11 日）でも述べた通りである。

[25] 「被爆資料 風化させまい 今春から保存実験 樹脂板・チッ素ガスなど使用」『中国新聞』1978 年 1 月 1 日。

[26] 例えば「消えた “死の影” 何とか復元できないものか 30 年の風化に挑戦」(『中国新聞』1975 年 4 月 15 日)、「「死の人影」よみがえる 石に焼き付いた原爆の熱線」(『朝日新聞』1975 年 5 月 13 日）など。

[27] 「傷み激しい被爆紙類を保存」『朝日新聞』1975 年 8 月 27 日。

[28] 前掲注 18 の「転換期を迎えた広島平和記念資料館」(『博物館研究』10-6、1975 年 6 月)。

[29] 前掲注 9 の『朝日新聞』1973 年 9 月 21 日。

[30] 「原爆資料館の常設展示 年に 4 回入れ替え 保存へ照明落とす 見やすく 8 部門に整理」(『中国新聞』1975 年 4 月 1 日)、前掲注 22 の「いたみ目立つ 30 年目の展示品 原爆資料館」(『中国新聞』1975 年 4 月 13 日）のほか、前掲注 11 の田河「転換期を迎えた広島平和記念資料館」などを参照。

[31] 前掲注 26 の 1975 年 4 月 15 日付の『中国新聞』と同年 5 月 13 日付『朝日新聞』。

[32] 「熱線のあといまも生々「死の影」復元助けた小島広大教授 被爆鉄平石を資料館に寄贈」(『朝日新聞』1975 年 5 月 23 日）も参照のこと。

[33] 志賀 p.181。

[34] 爆心地付近の伝福寺から寄贈されたこの献花台は、それまでは収蔵庫にあったが、この台の側面が原爆の熱線を受けてざらざらになっていることに気づき、その変化がわかるように展示した。

[35] 前掲注 32 の『朝日新聞』(1975 年 5 月 23 日）も参照のこと。

[36] 前掲注 27 の『朝日新聞』1975 年 8 月 27 日。

[37] 前掲注 25 の『中国新聞』1978 年 1 月 1 日。

[38] 東京国立博物館で導入されている窒素ガス封入展示ケースについては、同館の以下のサイトを参照（いずれも 2023 年 4 月 29 日閲覧)。平成館の展示ケースについては https://www.tnm.jp/modules/r_free_page/index.php?id=132(「文化財を守る－保存と修理－」、東洋館の展示ケースについては https://www.tnm.jp/modules/rblog/index.php/1/2012/09/21/?bclm=1346306424（「1089 ブログ～プレオープンツアー「東洋館をめぐる旅」に潜入取材！」2012 年 9 月 21 日付)。

[39] 埼玉県立さきたま史跡の博物館の国宝展示室で導入されている展示ケースについては、以下の同館サイトを参照（2023 年 4 月 29 日閲覧)。
https://sakitama-muse.spec.ed.jp/%E5%B1%95%E7%A4%BA%E5%AE%A4-1/%E5%9B%BD%E5%AE%9D%E5%B1%95%E7%A4%BA%E5%AE%A4
(「国宝展示室」)

広島平和記念資料館資料調査研究会　研究報告

相原秀二資料と「平和データベース」
ー広島平和記念資料館の文書資料の在り方

久保田明子（くぼた　あきこ）

広島大学原爆放射線医科学研究所附属被ばく資料調査解析部　助教

1970　東京都生まれ
　95　立正大学大学院文学研究科修士課程修了
　　文教大学附属高等学校地理歴史科講師（～2015年3月）
　　横浜国立大学経済学部飯島渉研究室（～2004年3月）
2004　青山学院大学文学部飯島渉研究室（～2015年6月）
　06　国文学研究資料館リサーチアシスタント（～2014年3月）
　12　学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻博士後期課程入学
　15　学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻博士後期課程退学
　　現職

主な著書
久保田明子「『キツネの足跡』を追いかける－京都大学所蔵荒勝文策関連資料について」政池明『荒勝文策と原子核物理学の黎明』京都大学出版会、2018年3月、315～334頁所収

主な論文
久保田明子「収蔵史料目録の『史料情報共有化データベース遡及入力について』」（アーカイブズ研究系「アーカイブズ情報の資源化とネットワークの研究」プロジェクト編『アーカイブズ情報の資源化とネットワーク（国文学研究資料館　平成16年度～平成21年度研究成果報告）』人間文化研究機構国文学研究資料館、2010年2月、137～148頁、所収
久保田明子「科学史関連のアーカイブズに携わって：アーカイブズ学側から」『科学史研究』第3期　第54巻　第272号、20～21頁、2015年1月、所収
久保田明子、杉原清香、田代聡「原爆記録映画「広島・長崎における原子爆弾の影響」について：医学調査映像を中心に」『長崎医学会雑誌』93（特集号）、283-287頁、2018年12月
Akiko KUBOTA, Kaori IIDA, Satoshi TASHIRO, ‘Atomic Bomb Survivor Studies and their Current Significance: Comparison between the Practices of the ABCC-RERF and the RIRBM.’ “Hiroshima Journal of Medical Sciences” 69（1）, pp. 1-8., March, 2020.

1．はじめに：ジョン・レノン、オノ・ヨーコと原爆記録映画

2022 年大晦日、原爆記録映画『広島・長崎における原子爆弾の影響』に関してのニュースが共同通信より配信された[1]。それは最近公開された外務省の史料（外務省外交史料館所蔵）によるもので、1969 年、当時すでに著名なアーティストであったジョン・レノンとオノ・ヨーコが連名で日本の佐藤栄作首相（当時）宛に出した文書である。内容は同映画を広く海外で公開することを日本に求めたものであった。本文書資料は、平和活動でも知られるこの夫妻の、1 つの具体的な動きを示す資料であると同時に、多くの関連文書群を含めれば、1960～1970 年代における冷戦による世界の状況やそのなかでの日米関係の検討を可能とする

[1] 第一報として、2022 年 12 月 31 日に「ジョン・レノン夫妻平和訴え　首相に原爆映画公開を要請」が配信された。（https://www.47news.jp/8760408.html（2023 年 3 月 16 日確認））中国新聞では 2023 年 1 月 1 日に掲載があった。その後、詳細な続報「佐藤栄作首相に原爆映画公開を求めた真意とは　外務省外交史料館に眠っていた「平和への切なる思い」」（https://nordot.app/991541686441099264?c=39546741839462401（2023 年 2 月 4 日））が配信された。上記の記事は、杉田正史記者による。

資料となる。これはまた、1つの文書資料から、ビートルズ研究、アーティストによる平和活動の歴史、冷戦の世界史、日米関係史、そして原爆被爆に関する研究など、実に様々な展開が可能であることも示している。

上記で公開を求められている映画は、日本映画社（日映）が撮影した。連合国軍の監視下、1945年秋より広島と長崎の両被爆地で撮影され、1946年4月に映画が完成した後、同年5月にアメリカに送られたまま、被爆地を持つ日本では見ることがかなわない状況で時が過ぎた。返還運動を背景に日本に戻ったのは1967年11月であり、その後、映画の一部（14分程度）を文部省（当時）が削除した短縮版が1968年に広島市で上映された。そしてその後、上記のジョン・レノンとオノ・ヨーコの行動が見られた。

撮影の対象は、被爆地の状況と、そこでの学術調査であった。この学術調査とは、原爆による被害を科学的に調査するために、学術研究会議（現在の日本学術会議）によって敗戦確定の直後（1945年9月）より派遣された、物理学や医学など9つの班による研究者の組織で、当時の大学や理化学研究所に所属する著名な研究者を中心としていたものであった。日本映画社はもともとニュース映画や科学映画の製作をしていた会社であったので、その製作にはそういった経験が生きた一方、被爆の状況を映し出す映画としては、人道的に見て批判される側面もあった[2]。ただ、そうはいっても、1945年の被爆直後の現場を捉えた映像記録として非常に貴重である。現在は、DVDで販売されており、比較的容易に映像を見ることが可能になっているが、少し前までは見る機会を得ることが難しく、「幻の映画」とも言われたものであった。

原爆を投下した国であるアメリカにいたジョン・レノンとオノ・ヨーコが、そういった性格を持つこの映画について、どのように知り、どのような経緯で映画の公開を要請するに至ったのか興味深いところであるが、例えばそのことを考えるうえでも、まず映画そのものを知ることが大切であろう。その手掛かりとなる資料の一つに、現在筆者が研究対象としている、相原秀二資料がある。

2．広島平和記念資料館所蔵の相原秀二資料

2-1．相原秀二資料が広島平和記念資料館の所蔵である意義

相原秀二とは、前項で述べた原爆記録映画『広島・長崎における原子爆弾の影響』を製作した当時の日映の社員であり、本映画の製作に深く携わった人物の一人である。相原秀二自身によって、当該映画製作時に生成された当時の文書の一部が保存され、また後年自身によって回想され執筆された文書が作成されたが、その文書群が、彼の死後ご遺族から埼玉県平和資料館を経由して広島平和記念資料館に寄贈された。つまり、この相原秀二資料は、彼の人生のある時期、原爆記録映画に携わった時期を中心とした、原爆記録映画に関するコレクションである。そのため、これが広島平和記念資料館に収蔵されることは適切であり、館も、そ

[2] 例えば阿部・マーク・ノーネス「中心にあるかたまり：『広島・長崎における原子爆弾の効果』」ミック・ブロデリック編著／柴崎昭則・和波雅子訳『ヒバクシャ・シネマ：日本映画における広島・長崎と核のイメージ』現代書館、1999年8月、111-144頁、など。

の使命を果たしてきた。

同館では、本資料収蔵後に整備を実施し、その後、本資料を中心とする企画展を実施した（企画展『廃墟にフィルムを回す：原爆被災記録映画の軌跡』2009 年）。常設展のなかにも、一部関連資料を提示している。また、原爆記録映画を長崎の原爆被災の記録としてとらえて行われる研究にも寄与した[3]。このように、本資料は、資料整備後に、

（1）平和博物館である広島平和記念資料館として適切な企画展の実現
（2）同資料館の常設展の一部としてその展示活動に寄与
（3）原爆実相を探求する研究に寄与

という、「広島平和記念資料館条例（平成 6 年 3 月）」に定められた使命にのっとった活動を支えてきたと言える[4]。

2-2．相原秀二資料のデジタル化

筆者は、広島平和記念資料館資料調査研究会（資料調査研）の会員となって以来、ここでの研究テーマはずっと相原秀二資料についてである。これは、自身の専門が文書資料についての研究を行うアーカイブズ学であるからと同時に、自身の所属する広島大学原爆放射線医科学研究所（広大原医研）の所蔵資料との関係からである。広大原医研の附属被ばく資料調査解析部には原爆医療を中心とした原爆に関する文献や文書資料のコレクションがあるが、そこに相原秀二ら日映が撮影した原爆記録映画の、アメリカから返還されたフィルムがある。これは現在、経年劣化等で状況が大変悪いため復元もままならないが、大切に保管しており、その調査研究を進めている[5]。また、1945 年秋より行われた学術研究会議（現・日本学術会議）による原爆に関する学術調査への関心から日本の学術体制成立に関する研究も行っているが、その学術調査団を映し出している映像記録としての映画への関心とともに、学術調査団に参加した理化学研究所の仁科芳雄など多くの研究者との交流があった相原秀二に強い関心を持っている[6]。

つまり、相原秀二資料は、原爆被爆に関する広島平和記念資料館での展示活用のための資料であるばかりでなく、研究利用としては、

1）長崎の原爆に関する被災記録としての研究利用（既述：長崎の原爆に関する研究への寄与）
2）広大原医研所蔵の映画フィルムに関連する調査研究（他機関所蔵関連資料の情報の充実）

---

[3] 例えば、大矢正人氏「相原秀二資料に見る長崎原爆の残留放射線」（『平和文化研究（長崎総合科学大学長崎平和文化研究所）』第 33 集（2012 年 11 月）、11-72 頁、所収）など。

[4]「広島平和記念資料館条例（平成 6 年 3 月）」第 3 条（事業）（http://reiki.city.hiroshima.jp/HAS-Shohin/jsp/SVDocumentView）によれば、館では「原子爆弾による被災及び平和に関する資料の収集、保管、展示及び供用」、「原子爆弾による被災に関する調査研究」といった事業を行う、とある。

[5] 久保田明子・杉原清香・田代 聡「原爆記録映画「広島・長崎における原子爆弾の影響」について 医学調査映像を中心に」『長崎医学会雑誌』93（特集号）、2018 年 12 月、283-287 頁

[6] 科学研究費（挑戦的研究（開拓））「日本の学術体制史研究：研究基盤となる日本学術会議資料整備と研究環境構築の検討」（2020～2023 年度）（研究代表：久保田明子）

3）日本の学術体制史研究（日本史、科学史研究への寄与）

といった、近似ではあるがそれぞれ少しずつ性格の違う研究への活用ができる。

特に、原爆被害をどのように学術的に調査し、研究したのか、というのは、科学、医学、また科学史、政治学、社会学など近年、様々な研究分野から関心が寄せられつつあり、国内外で関心が高まりつつある[7]。つまり、本資料は広く研究に活用される可能性を持っている。

しかしながら、博物館は、文書館（アーカイブズ）と違い、こういった文書資料をレファレンス（閲覧や活用などの提供）する専門館ではないので、こうしたことを館の業務のなかで主要とすることは難しく、それらにいちいち対応するには、館の職員は現在多忙過ぎる。

広島は幸いに素晴らしいことに、県には広島県文書館[8]、広島市には広島市公文書館[9]があり（長崎は専門館としては両方ともなく、現在、設立の運動が進んでいる[10]）、そこにも原爆被害に関する重要な文書資料が多く収められているが、既に収蔵されている「相原秀二資料」を原爆記録映画の映像に映る事象に関するモノ資料を多く展示する広島平和記念資料館から引きはがして移管するという選択の可能性は、無いであろう。

では、博物館所蔵の文書資料のアクセスについて、どうしたらよいであろうか。一つの方法として、資料のデジタル化とその公開があると考える。ただし、資料をデジタル化すればそれで終わりとするような「デジタル化＝最終目的」としてはならない。この発想は「デジタル化したから、もう原本は破損／廃棄してもいい」という思考をたどることがあるので大変危険である。あくまで「原本資料をより長く後世に伝えていくため」という考えを基本とし、そのうえで、活用のし

---

7 例えば、Kenji Ito（伊藤憲二）, Transnational scientific advising: occupied Japan, the United States National Academy of Sciences and the establishment of the Science Council of Japan., “The British Journal for the History of Science: BJHS”（2023）, pp.1-15.（DOI: https://doi.org/10.1017/S0007087423000031）

8 広島県文書館（https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/monjokan/）には、様々な試料についてのデータベースシステムが充実している（https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000746archives）。原爆に関しては「広島県立文書館が所蔵する原爆関係資料について」でまとめられている。https://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki_file/monjokan/mokuroku/genbaku20140805.pdf

9 広島市公文書館（https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/hiroshima-municipal-archives/）には、原爆にとどまらず広島市に関する様々な文書があり、その一部はデジタルアーカイブズとして公開が進んでいる（https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/hiroshima-municipal-archives/5503.html）。そのほか、原爆学術調査（医学）を率いた都築正男の資料など、関連の寄贈資料コレクションも多数ある。（https://www.city.hiroshima.lg.jp/soshiki/5/139001.html）。

10 例えば、四條知恵「散逸する長崎の歴史資料～公文書館設立への提言～」（『平和文化研究（長崎総合科学大学長崎平和文化研究所）』第 40 集、2019 年 5 月、81-89 頁、所収）（https://nias.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=829&item_no=1&page_id=13&block_id=17）。長崎の原爆の資料は、当然ながら長崎原爆資料館を始め長崎県立長崎図書館、長崎大学等での収蔵がある。また、原爆関連資料の保存に関する活動も長崎では現在盛んである。例えば、取り組みとして、長崎原爆の戦後史をのこす会『原爆後の 75 年：長崎の記憶と記録をたどる』書肆九十九、2021 年 8 月、など。

やすさを求めるという意味でのデジタル化を実施すべきである。筆者はそういった考え方のもとで相原秀二資料のデジタル化を考え、資料調査研の研究開始からずっと研究費をほぼ全額当該資料のデジタル化経費にあててきた。それでもまだ資料全体のデジタル化完了までは程遠いが、今後も研究が継続できる限り、そういった方針で行く所存である。

昨今、デジタル化、デジタルアーカイブズなどの取り組みを多く聞く。それ自体は大変すばらしく、重要であることは間違いない。しかしながら、デジタル化したものは、そうはいっても「仮想」であり「にせもの」である。また、媒体としてもその寿命は決して長くなく、現時点のデータが永続的に堅牢であるとも言い難い。体験していただければ、また想像していただければわかるが、やはり本物には本物の力がある。例えば、広島平和記念資料館所蔵の象徴的な展示の１つに、「三輪車」がある[11]。この三輪車について、デジタル情報でいろいろと知ることももちろん有益である。そして、例えば、混雑のなか薄暗い館内で説明文をじっくり読むことはときに難しい。しかしやはり、筆者個人としては、是非皆さんに広島に実際に来ていただき、資料館のなかで、本物の「三輪車」と対峙して欲しいと願う。デジタルの情報と合わせて、「被爆地」という現地で実際の資料に触れるというのが、とても豊かな体験となるのではないだろうか。

また、例えばデータベースなどもそうであるが、こういったものは「作ってしまったらゴール」ではなく、完成後、その後適切な対応を実施しながら永続的な運営をしていくことが重要である。インターネットを巡ると、更新できず、時が止まって漂っているデータベースやデジタルアーカイブズを見かける。つまりそれは、コンピューター環境の目まぐるしい発展、それに伴うシステムや仕様の更新に追い付かない実態、劣化するハード環境やデータに対応すべきなのに、いつも／いつまでも満たされない予算や人員（人材育成）など、デジタル環境の永続的運営の難しさを物語っている。そのため、デジタル化は重要で可能であれば実施したほうが良いと強く考えるが、するならするで、それなりの覚悟と準備（グランドデザインと長期計画）が必要であり、そのため、一層「デジタル化＝最終目的」として安易に実行してはならないと考える。

それでもなぜデジタル化をするのか。それは、原本資料を保存し継承していくため、ということに尽きる。原本はときどき見ていただいて本物の威力を発揮させる。一方でデジタルを活用することで、広く多くの皆さんに、資料について比較的簡便に出会ってもらい、自身が望めばより多くの情報にアクセスできる場を設ける。そうすることで、極力、原本の劣化破損を防ぎ、資料を出来るだけ延命させ、長く継承することを可能にすると考える[12]。

ただ、そうすると、筆者が相原秀二資料について単にデジタル化のみをするこ

11 https://hpmm-db.jp/list/detail/?cate=artifact&search_type=detail&data_id=19519

12 以上は、2022 年 12 月 3 日に開催された広島平和記念資料館資料調査研究会研究発表会での報告の際にも主張した（久保田明子「広島平和記念資料館「平和データベース」に入った相原秀二資料について：原爆被爆映像に関する文書資料・博物館における文書資料の保存と活用に関する考察」）。なお、本件は、四條知恵氏が「データベースを活用した広島県立文書館における資料調査」『広島県立文書館だより』47 号、2023 年 3 月、2-3 頁、で言及してくださった。

とは、一方で、永続的な運営を担わない点で大変に無責任である。その点は当初より大変悩ましいところであった。そうしたところで、広島平和記念資料館が「平和データベース」をリニューアルし、状況が好転する。

3．広島平和記念資料館の「平和データベース」

3-1．「平和データベース」と相原秀二資料

図１　広島平和記念資料館ウェブのトップページにある「平和データベース」へのリンク
ページの下部にあるので少々見つけにくい（https://hpmmuseum.jp/）

2022 年 2 月 1 日、広島平和記念資料館の「平和データベース」が、抜本的なリニューアルをした。中国新聞の報道では[13]、国立国会図書館が運営する日本の分野横断型文献検索サイトである「ジャパンサーチ[14]」への情報提供開始やスマートフォン対応などのリニューアルポイントの説明のなかで、今回、文書資料のデジタルデータにアクセスできるようになったことが指摘されている。この対象となった文書資料が、デジタル化を進めてきた相原秀二資料である。

それでは「平和データベース」とは何か。以下、ウェブページでの説明を引用する[15]。

> 広島平和記念資料館が所蔵する原爆、平和関連の資料をデータベース化したものです。

[13]「原爆資料館　DB を一新　所蔵品情報見やすく／文書コーナーを新設」『中国新聞』2022 年 2 月 2 日、水川恭輔記者（https://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=115804&fbclid=IwAR3uVM3Qoug6EbR4RYcWbdmGBsz3D6Ar8C1CsI9c0-JOsNmFTT5ltRHCV5Y）
[14] https://jpsearch.go.jp/
[15]「平和データベースとは」（https://hpmm-db.jp/）

> 平和データベースの資料の使用について
> 平和データベースに掲載されている「被爆資料」「写真」「原爆の絵」の画像を、原爆被害の実相を紹介いただくために、印刷物への掲載や、テレビ番組等に使用いただくことができます。
>
> ただし、使用目的や写真等によっては掲載・使用いただけない場合があります。不明な点につきましてはご相談ください。

つまり、使用できない場合もあるが、前提としては、「原爆被害の実相を紹介」するための活用を期待している。これは、実際の展示とは違った、新しい体験をもたらす。コロナ禍のなかでのこの展開は、また特に意味があった。そしてまた当然ながら、これを利用したら実際の展示を見る必要が無い訳ではなく、むしろ、このデータベースを活用してくださったらなおのこと、是非、広島へ来て、実際の展示を見て欲しい、という誘導の役割も大きく持っていると考える。博物館において、実際の展示とこういったデジタルの発信は、相互を補完し、かつまた相乗効果を期待できると考える。

ただ、相原秀二資料のような文書資料の場合、実際に館に来て問い合わせをして、必要な文書を選び出し、原本を実際取り扱う、ということは、展示を見ることと違って、閲覧者も、館側の担当者も時間がかかり、簡単とは言えない。もし「文書資料」に書いてあるテキスト情報をまず確認したい、ということであれば、実は、このようなデータベースでの提供は、閲覧者も担当者も便利である点が多いと考える。

「平和データベース」のなかの相原資料は、まず、「カテゴリで探す」のなかの「特別コレクション」を選択する（図 2 参照）。この「特別コレクション」の取り扱いについては、ウェブ上の記載によれば[16]、

> 広島平和記念資料館が所蔵する、個人や団体等による大規模な寄贈資料などの目録を閲覧することができます。
>
> 一部の資料については、オンラインで画像を閲覧することもできます。
>
> 資料の閲覧等については広島平和記念資料館学芸課（代表電話 082-241-4004）にお問い合わせください。

つまりは全部ではないが、一部、オンラインで文書を「画像」として閲覧することが可能となっている。例えば研究利用の場合などは、少なくとも 1 度は原本を確認すべきであろうが、それでもまず概要を把握しようと調査するには、画期的に便利であろう。

また、図 3 で示したように、相原秀二資料について、実際の展示ではなかなか示しにくい、詳細な説明も付されている。この画面は「特別コレクション」

[16]「特別コレクション」（https://hpmm-db.jp/collection/）

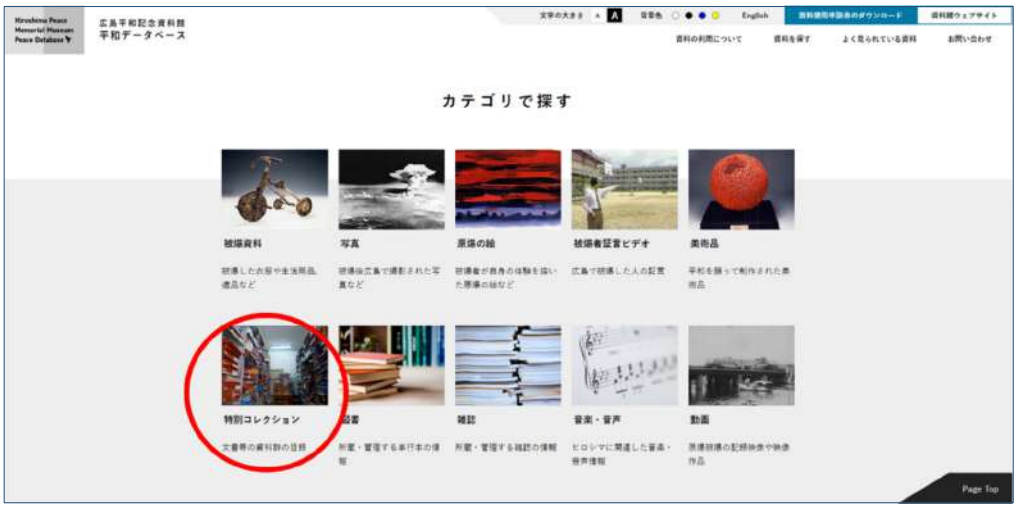


図 2 「カテゴリで探す」

図 3　広島平和記念資料館「平和データベース」上での相原秀二資料の説明

のページにある「相原秀二資料」のリンクを選択すると現れるが、同じ画面には、PDF ファイルで見られる詳細な目録にも辿り着くようになっている。更に、PDF の目録からは、オンラインで見ることができる文書資料の画像へのリンクもあるので、そこを選択すれば、すぐその文書を画面で確認できる。この一連の動作は、実物展示とは全く違う原爆資料との対面であり、原爆被害の実相の見方を増やしたと言える。

3-2．広島県産業奨励館を「原爆ドーム」と呼ぶこと
：AH02-1204「撮影記録報告用紙」（昭和 20 年 10 月 5 日）に見る「ドーム」

相原秀二資料は、原爆被害の資料と言う性格だけではなく、当時の映画製作の様子を示す資料でもあるので、映画史の資料としても検討できる。例えば、撮影に関する資料は、上記の「平和データベース」での PDF 目録で、検索語を「撮影」として調べることで関連資料に辿り着くことができる。

また、そこから、別のことに気が付くこともある。資料記号 AH02-1204「撮影記録報告用紙（昭和 20 年 10 月 5 日）（図 4）は、学術研究会議の 9 つの研究

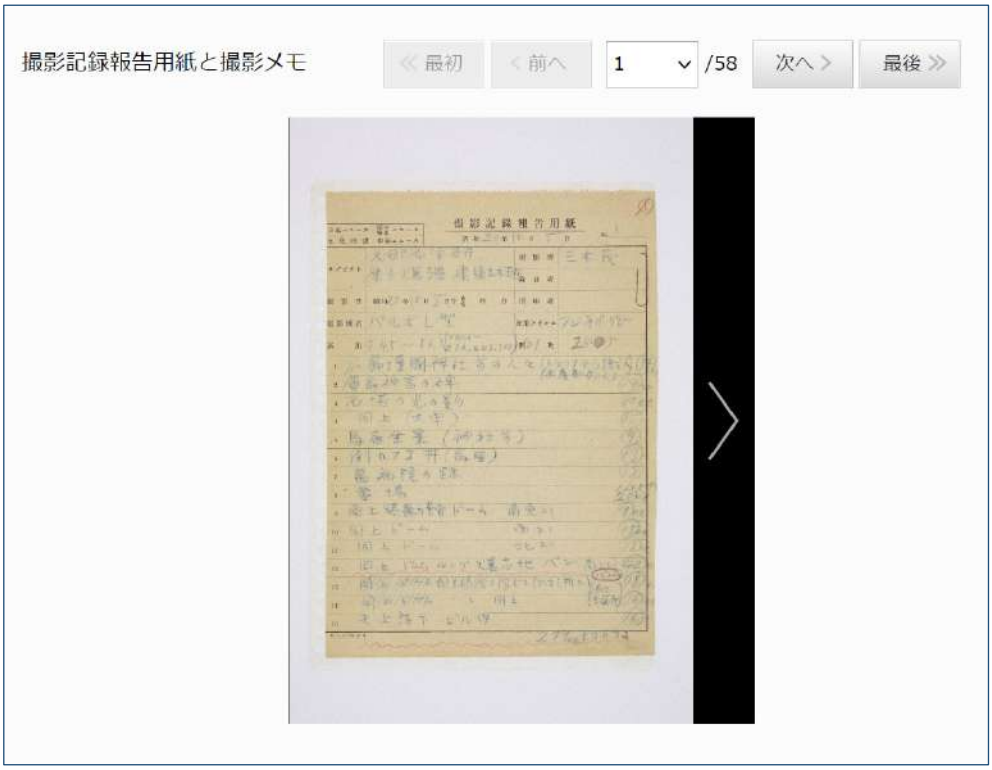


図 4 「平和データベース」内で見る相原秀二資料：
「撮影記録報告用紙」（昭和 20 年 10 月 5 日）（AH02-1204）

分野のうち建築土木班の調査を撮影する際の書類で、撮影者は、日映のカメラマン・三木茂と書かれている。また、撮影機材、撮影に関する設定も書かれている。もし映画史・映像の研究者であれば、現在完成している当該映画からこの文書資料に該当する箇所があるかどうか、またその映像の撮影方法や演出などについての議論ができるかもしれない。筆者がここで少し注目したいのは、撮影場所のリストである。それを書き起こすと以下のようになる。

1. 広島護国神社前の人々（トラックから降りる人　水産部屋の人）
2. 広島神宮の碑
3. 石塔の光と影
4. 同上（大写）
5. 鳥居全景（神社前）
6. 倒れてる鳥居
7. 島病院の跡
8. 墓場
9. 商工奨励館ドーム　南東より
10. 同上ドーム　西より
11. 同上ドーム　北より
12. 同上ドームロング　爆芯［ママ］地パン　南より
13. 同上ドーム　相生橋際三階ビル（ひさし折丸）
14. 同上ドーム　　同上

15. 天上［井］落下　ビル内

1 から 15 まで、これは撮影のルートを示しているのかどうなのか、あるいはそれぞれ個々の場所を検討することもできると思うが、今回は、上記の 9 から 14 にある「ドーム」と言う言葉に着目したい。連続する 6 か所の最初の記載は「商工奨励館ドーム」となっており、つまりこれは、現在私たちが「原爆ドーム」と呼ぶ建造物のことを指していることがわかる。「ドーム」と言う言葉は建造物の形状を指しているので、その言い方が特異であるということではないが、それでも、東京から来た撮影班が、1945 年 10 月という早い段階で「ドーム」という呼び方をしていたことがここからわかる。あの建造物をいつごろから「原爆ドーム」と呼ぶようになったのか、と言う問題とはまた少し別ではあるが、それでも、呼称の定着の経緯を検討するうえでの一つの材料となるかもしれない。

つまり、文書資料はこのように、ぱっと見ただけでインパクトがあることは少なく、地味ではあるものの、じっくり読み込んでいけば、1 つの文書記録からいろいろな要素を見つけることが可能である。そして、書かれている内容を詳細に読みたい場合は、原物の展示を館でじっと見つめるよりも、こうして PC を通して落ち着いてみる方がやりやすいと考える。つまり、文書資料のデジタルでの発信は、こういった面では相性が良いと言えよう。

3-3．理化学研究所に残された被爆者の遺骨と物理班の調査研究
：AH01-0093「爆央附近の放射能（ローリッツェン電気計）」を巡る資料と研究

2020 年 11 月、理化学研究所に残る仁科芳雄資料から、広島の亡くなった原爆被爆者の遺骨が見つかったニュースが流れた[17]。この遺骨は、物理学者で当時の調査団を主導していた重要な科学者である仁科芳雄が率いる理化学研究所の物理学者たちが広島での調査の際に採取し、原爆放射線の測定をするために活用したものである。被爆者の骨をそのように扱う、ということには、現代では嫌悪感を持つ方もいるかもしれないが、実相を科学的に明らかにせねばならない、亡くなった被爆者のためにもそうせねばならない、という科学者のある種の過酷な負担でもあったかもしれない。批判を受ける心配のあるなか、このように発見された遺骨を公表し、広島に届けてくださった理化学研究所の在り方

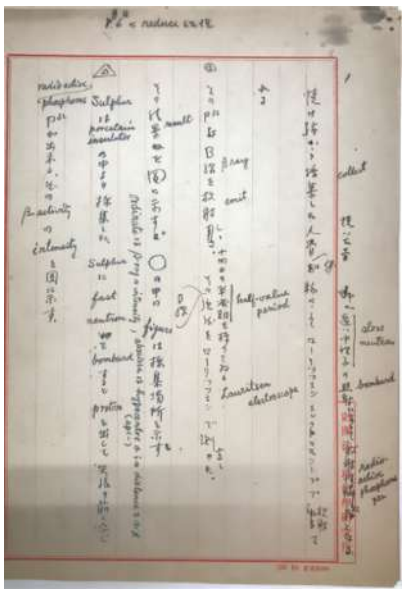


図 5　物理班調査に関するメモ

[17] 例えば、「原爆犠牲者　理研に遺骨　名前 4 人確認　広島市　近く供養」『中国新聞』2020 年 11 月 10 日（水川恭輔記者）、「理研に被爆者の遺骨　原爆開発に携わった物理学者の部屋で発見、広島市に引き渡し」『毎日新聞』2020 年 11 月 12 日（小山美砂記者）、「原爆投下直後の遺骨、博士の資料箱に　名前のメモも発見」『朝日新聞』2020 年 11 月 13 日（比嘉展玖記者）など続々と報じられた。また、後日続報や詳細な記事も出た。

は真摯であると考える。そしてまた、この遺骨から測定した放射線のデータが、研究成果を生む基盤となった。そしてその証左の一部となり得る資料が、相原秀二資料にも見られる。

図5の物理班調査に関するメモ書きの資料は、現在デジタル化を委託しているところなので、まだ平和データベースに反映されていないが、今後、追加される資料である。ここには、物理班の初期の調査について、英単語を書き添えながら書かれている。これを書き出すと以下のように読める。

・（上部）8月6日に reduce（減少）した値
・（欄外）動きが遅い中性子（slow neutron）の照射（bombard）によって放射性燐 P32（radio-active phosphorus　p32）となる。
・焼け跡から採集（collect）した人骨（焼いた骨）1g は粉にしてローリッツエンエレクトロスコープで放射される。
・その P32 はβ線（β ray）を放射（emit）し、14 日の半減期（half-value period）を持っている。そのβ線をローリッツエン（Lauritsen electroscope）で測定した。
・その結果（result）を図に示す。○の中の figure は採取場所を示す。
ordinate（縦軸）はβ ray からの intensity（強度）、abscissa（横軸）は hypocenter（爆心地）からの distance（距離）を示す。
・Sulphur（硫黄）は porcelain insulator（磁器製碍子）の中より採集した。Sulphur（硫黄）は fast neutron（高速中性子）を bombard（照射）すると proton（プロトン）を出して矢張り前と同じ radioactive phosphorus（放射性燐）P32 が出来る。そのβ activity の intensity（強度）を図に示す。

この英単語の頻出具合から、英語での説明か英訳を試みていることが想像できる。占領下での、アメリカ（GHQ）の監視のもとでの調査であったため、英語での報告がされていることは想像に難くない。この資料はそういった一面も示す。

また、この内容は、相原秀二資料の別の資料とも関連する。

図6は、「平和データベース」内で閲覧が可能な相原秀二資料「爆央附近の放射能（ローリッツェン電気計）」（AH01-0093）である。同資料は「理化学研究所彙報　原稿用紙」の用紙に鉛筆で両面に書かれている。1ページ目（表面）には、タイトルとして「爆央付近の放射能（ローリッツェン電気計）と書かれ、1945 年 8 月 17 日、9 月 4 日、10 月 2 日、10 月 20 日の測定値が記載されている。2ページ目（裏面）には、本資料の作成日である 1946 年 2 月 28 日の日付と、作成者として「木村」とある。これは、理化学研究所の物理学者で調査に参加していた木村一治である。先の図5と図6の両方を合わせて要点を整理すると、以下のようになるだろう。

図6　「爆央附近の放射能（ローリッツェン電気計）」（AH01-0093）

［調査時期］　1945 年 8 月、9 月、10 月

［調査班］　理化学研究所研究員による物理班員
［調査方法］　爆心地近くの放射線をローリッツェン電気計で測定
（1）磁器製碍子にある硫黄を採集
（2）放射性燐 P32 の測定のために遺骨を粉にし、β 線の強度を測定

この要素は、学術調査団の調査研究結果をまとめた、1953 年に刊行された『原子爆弾災害調査報告集』に所収されている 2 本の論文
（1）山崎文男、杉本朝雄、木村一治「広島における人骨中に生じた放射性燐 P32 について」[18]
（2）山崎文男､杉本朝雄「広島における硫黄中にできた放射性燐 P32 について」[19]
の内容と合致する。

また、同書に収録されている 1945 年 11 月 30 日に行われた調査団の第 1 回報告会の速記録によれば、物理学科学地学科会の代表者である仁科芳雄の発言として「物理の方としてやりましたことは、まず放射能の研究です。…広島の方は陸軍軍医学校のほうのお方と一緒に理化学研究所の人が 2、3 人まいりまして、やりましたことはいろいろありますが、まず骨、それから磁器製碍子の裏についております硫黄の放射能を測りました。これは原子爆弾の爆発の際に生ずる中性子によって物質を放射能にした結果であります。」[20] との記録があるがあるが､これも内容が一致している。

つまり、相原秀二資料の関連する複数の資料を活用することで、こういった原爆による放射線の影響に関する研究の、実際の調査のある側面を知ることも可能である。また、被爆者の遺骨はいたずらに弄んだのではなく、このように実相解明のための一助になっていた可能性を示す。私たちは、こういうことを知ったうえで、21 世紀になって広島に帰ってきた遺骨の意味を考えてもいいのではないだろうか。

4．おわりに

本論では、広島平和記念資料館に収蔵されている文書資料の活用について、相原秀二資料を題材に、文書資料の博物館としての活用の仕方、デジタル化、同館がリニューアルした「平和データベース」での同資料での在り方の一例を述べてきた。

博物館や大学など研究機関に収蔵される文書資料は、まず第一に、述べてきたように、資料が整理されたのちに初めて閲覧に供したり、研究に利用するなどの活用が実現する、と言うことである。つまり、社会に発信するためには、そのた

18　日本学術会議編『原子爆弾災害調査報告集日本学術振興会、1953 年､』所収
19　日本学術会議編『原子爆弾災害調査報告集』日本学術振興会、1953 年、所収
20　日本学術会議編「原子爆弾災害調査研究特別委員会 第 1 回報告会速記録」『原子爆弾災害調査報告集』日本学術振興会、1953 年、所収

めの準備となる資料整理をすることが重要となる。

そして、その整理の後、文書資料を多くの皆様（原爆被害のことを知りたいと考えている一般の方々から研究や報道に使いたい人々など）にどのような方法で提供できるかと考えた時に、デジタルデータでの活用の一例を示した。

これは、実はとても特別な発想でもなく、比較的想像しやすい、常識的、当たり前のことを言っているのであるが、その割に、現在、このようなことをスムーズに実現しているところは、残念ながら多くない。

原爆に限らず、博物館や研究機関に所蔵されている多くの資料は、その物量の多さや重要性の割に、割かれる人員、資金、あるいは場所（環境）が適切に／十分に準備されることが多くなく、多くの収蔵機関では間に合っていない。社会、あるいは様々な研究において活用したいという需要が高いことに比べて、供給する側が整っていないことが多くみられる。

さらにいえば、「1945 年から始まる原爆被害に関する資料」という性格から、まずわかりやすく 2 つの問題が確認できる。

1 つは「原爆」ということ、つまり「戦争時の核兵器使用」に関する資料、「放射線被災」に関しての資料という点である。2022 年から始まったロシアのウクライナ侵攻は、核兵器使用の懸念、またはウクライナ国内の原発への攻撃等による放射線災害事故リスクなど、核、被ばくを巡る懸念を大きく膨らませてきた。その懸念が実現しないほうがいいものの、一方で実際に起きてしまった際にどうするか、という備えもまた残念ながら検討する必要が現在は出てきている[21]。そういった際に、最近の進んだ科学や人文社会学系の学術研究とともに、戦争による核兵器使用による初めての被害（戦争被災／核被災／緊急被ばく医療）となり、そういったことの原点となった広島と長崎の「原爆」の「経験」を改めて見直す必要がある。つまり、私たちの多くは、「今」、または「いつも」こういった資料にアクセスし、活用したい。そしてその需要は現在高まってきているのだ。

実は、こういったことについて、広島平和記念資料館は開館以来重要な責務を果たしてきている。しかしながら、原爆被爆の、様々な「モノ」資料についての「展示活動」を主眼とする館の性格上、文書資料に関しての細やかな対応を強く求めるのは、負担として大きいところである。そこに、デジタル化したデータを活用した「平和データベース」が確立し、提供が開始されたことは、まずは大事な前進であったであろう。

もう 1 つは原爆被災が早くとも「1945 年」が起点である、と言う点である。もうすぐ原爆投下から 80 年であり、また原爆被災は 1945 年だけのできごとではなく現在も終わっていないが、そのことが、文書資料活用について難しくしている部分がある。

大きいのは、「原爆が終わっていない」、あるいは「たった」80 年「しか」たっていないことだ。それは、当事者／関係者が現在も多くいる、ということでもあ

21 例えば広島大学原爆放射線医科学研究所の田代聡所長のインタビュー記事「核攻撃、その時に求められる医療とは　タブーに挑む研究」『毎日新聞』2023 年 3 月 16 日掲載、森口沙織記者（https://mainichi.jp/articles/20230312/k00/00m/040/240000c?fbclid=IwAR1IPuuHXvOWPdhwGEOsn2c78kejgwN_HgjPwz-1WA5jzXMBCNyfiHFDAVs）

り、文書資料の公開や活用の際は、こういった方々の個人情報やプライバシーを頑強に尊重し守る必要がある。この問題は、現場となった被爆地であれば、尚更に繊細に検討する必要がある。例えば、私たちは、平安時代の文学者、戦国時代の武将、近代日本の文豪などの赤裸々な日記や書簡などを見ることが可能で、それによって学術も形成する、大事な行為だ。しかし、原爆被爆というある意味大きく深刻な被害に関しての、あまり古くない「最近」の人々の記録を、デジタルを含む様々なコンテンツで、無防備に／安易に公開し消費していくことは決してしてはならないと考える。

もちろん、当事者／関係者が公開し活用して欲しいという強く願う資料もある。しかし、その願いに沿って公開したときに、資料の管理者が細心の注意を払っても、思いもよらないどこかの誰かを傷つけてしまう可能性は付きまとうことがある。それは、個人に関するプライバシーや個人情報の保護の問題であることが多いが、例えば、今回の例で言えば、「遺骨」という言葉もまた、そういった種類の言葉の 1 つと考えられるのではないだろうか。筆者は、「遺骨」の件を例として挙げることに抵抗があったが、逆にこの問題を指摘することが重要ではないかと考えたため、例示した。80 年「も」経ってまだまだこういう部分が解決できないところもまた、私たちに原爆が残した／与えた、非常にネガティブな影響かもしれない。

更に言うならば、これまで述べてきた様々な状況や問題点を考えると、ここはやはり、原爆被害に関する文書資料専門の機関を設立することが必要ではないか、と考える。これに関する検討は今後の課題とするが、ここで述べてきたこと、文書資料の整理の重要性、文書資料の保存管理（デジタル化を最終目的としない理念の継承）、文書資料をめぐる様々な取り扱いについてのデリケートな留意点の問題、など、本論で見ただけでも、原爆被害、あるいは放射線被災といった専門性をもった文書館、原爆アーカイブズ（Atomic Bomb Archives: ABA）は十分に必須だと思わされ、被爆地の責務であると考える[22]。

付記

2023 年 4 月に刊行された林重男、井上祐子『原爆写真を追う：東方社カメラマン林重男とヒロシマ・ナガサキ』（図書出版みぎわ）では、著者の井上氏が、本論で取り上げた相原秀二資料をつぶさに検証して論じている。

[22] 久保田明子「「捨ててええんよ」被爆資料の 75 年」『長崎医学会雑誌』95、2020 年、230-235 頁、所収

展示環境改善の新たな試み（1）
エアタイトケース内の有機酸除去への光触媒の検討

高妻　洋成（こうづま　ようせい）

独立行政法人国立文化財機構　文化財防災センター長
兼　同奈良文化財研究所　参事

1962　宮崎県生まれ
85　京都大学農学部林産工学科卒業
87　京都大学大学院農学研究科修士課程修了
92　京都大学大学院博士後期課程単位認定退学
92　京都芸術短期大学専任講師
93　京都造形芸術大学専任講師
95　奈良国立文化財研究所（現　奈良文化財研究所）研究員
2010　奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 保存修復科学研究室長
21　独立行政法人国立文化財機構　文化財防災センター長・同奈良文化財研究所副所長現職
23　現職

主な著書
文化財のための保存科学入門、角川書店、2002年（分担執筆）
遺物の保存と調査、クバプロ、2003年（分担執筆）

主な論文
木質文化財の保存と修復の化学の展望（総説）、木材学会誌、第61巻、238-242（2015）
木簡など木製遺物の保存環境、木簡研究、37号、225-237（2015）
テラヘルツイメージングを用いた壁画・屏風の非破壊調査、応用物理、第23号、159-166（2013）（共著）
木製遺物を包含する埋没環境の調査－青谷上寺地遺跡の土壌と地下水－、考古学と自然科学、第61号、27-41（2010）（共著）

1．はじめに

広島平和記念資料館における展示は、室内環境に資料を暴露した状態での展示と資料をケース内に配置した展示とに大別される。後者のケース内での展示に用いられるケースには、外気の影響を受けないように設計された気密性の高いケース（エアタイトケース）と気密性については特に配慮していないケースの 2 つがある。一般に、展示ケースはガラス、金属板、木質ボードおよび木質ボードに接着剤で貼りこまれたクロスから作られていることが多い。新調した展示ケースは、展示に供される前に木質ボードや接着剤等から発生する有機酸等を除去するため数か月間の「枯らし」が一般におこなわれる。

しかしながら、長期間にわたって「枯らし」をおこなったとしても、これらの材料からの有機酸等の発生を十分に抑制することはできず、場合によっては、展示をおこなっている間にケース内の有機酸等の濃度が高くなることもある。特にエアタイトケースの場合、気密性が高いが故に有機酸等がケース内に蓄積されるため、ケース内の資料の劣化を引き起こすことも懸念される。展示ケース内の空気質の改善方法には、現在、換気（「枯らし」に相当する）、汚染源の特定と除去、吸着材による除去、および遮蔽材による発生源の被覆がある。近年、酸化チタンに特定波長の可視光 LED を照射することで、酸化チタン上に発生した OH ラジ

カルとスーパーオキサイドアニオンにより有機酸等を水と二酸化炭素に酸化分解する技術が開発されている。この技術は、すでに空気清浄機として市販されているものである。

本研究は、展示ケース内の有機酸等の効率的な除去への光触媒空気清浄機の応用の可能性を検討するものである。

2．広島平和記念資料館におけるエアタイトケース内の空気質

光触媒を用いた実験をおこなう前に、実際に広島平和記念資料館において使用しているエアタイトケース（図 1）内の有機酸の測定をおこなった。有機酸の測定は、光明理化学工業株式会社製北川式ガス検知管有機酸（酢酸・ギ酸）910 を同社製エアサンプリングポンプ ASP-1200 に取り付けて、展示ケース内の空気を 200mL/ 分の流量で 1 時間吸引しておこなった。測定日は 2022 年 3 月 17 日、3 月 24 日、3 月 31 日、4 月 8 日、4 月 22 日および 5 月 6 日である。測定の結果、いずれにおいてもガス検知管で測定できる上限値である 400μg/m^3 を超

図 1　エアタイトケース

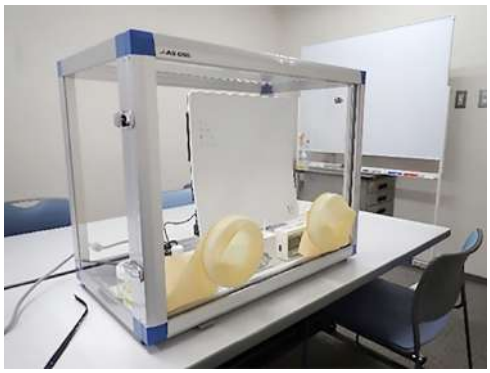


図 2　実験装置

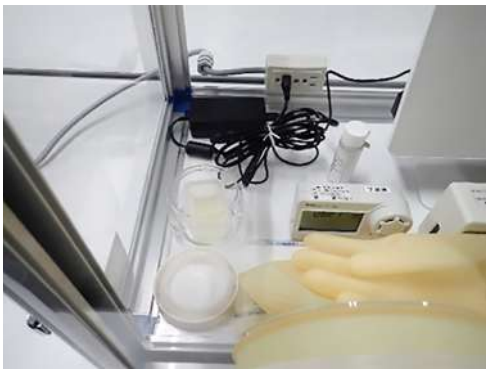


図 3　酢酸蒸気の導入

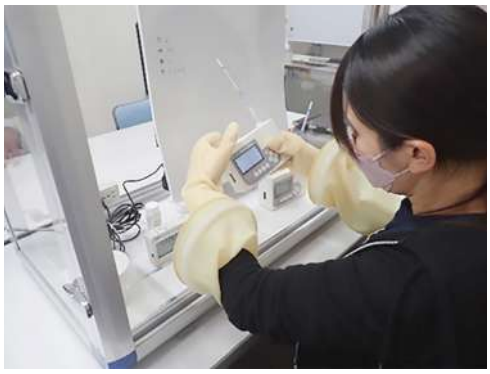


図 4　空気質の測定

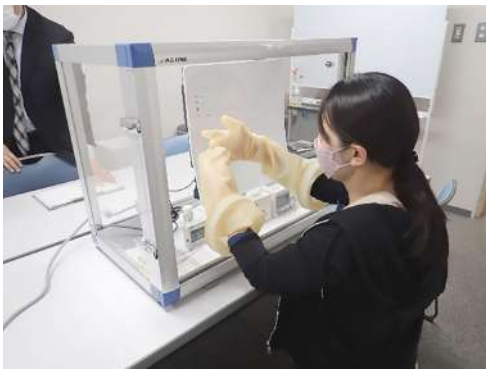


図 5　空気清浄機の稼働

えていることが明らかとなった。

3．実験

グローブボックス（アズワン製平面扉 PC（コンセント付き）1-9034-03）内に、市販の食用酢を浸み込ませた脱脂綿を入れた密閉蓋付の容器、ガス検知管システム（2. で用いたものと同じ）、光触媒空気清浄機（カルテック株式会社製 KL-W01）を設置した。食用酢の入った瓶の蓋を 5〜10 分間開けて酢酸蒸気をグローブボックス内に導入した後、同容器の蓋を閉め、空気質の測定をおこなった。空気質の測定条件は、2. で述べた条件と同様である。空気質の測定後、光触媒空気清浄機を 1 時間稼働させた。光触媒空気清浄機を停止後、再び、空気質の測定を上述と同じ測定条件でおこなった。

4．結果

食用酢の入った瓶を 5〜10 分間開けて酢酸蒸気をグローブボックス内に導入したところ、酢酸換算で検知管の測定上限である 400μg/m^3 を超える濃度となった。グローブボックス内に設置した空気清浄機を 1 時間稼働させた後、同様の条件で酢酸濃度を測定した結果、41μg/m^3 まで低下していることが明らかとなった。以上のことから、光触媒空気清浄機を用いることで、短時間で酢酸を分解除去できることが明らかとなった。

5．今後の課題

今回実験に用いた有害ガスは酢酸蒸気のみである。展示ケース内で発生する可能性のある有害ガスには、この他にギ酸、ホルムアルデヒド、アンモニア等があり、これらに対しても光触媒空気清浄機が有効に機能するかどうかを確認する必要がある。

光触媒による有害ガスの酸化分解は、単一のプロセスで進行するものではないことが十分に考えられ、一時的であるにせよ分解生成物がケース内に発生する可能性があり、中間生成物を含めた分解生成物の精密測定を実施する必要がある。

さらに、光触媒空気清浄機は可視光 LED を用いているとはいえ、空気を循環させるための駆動部があり、長時間の運転により熱を発することが考えられる。ケース内の温湿度環境を正常に維持できるかどうかについて、発熱量などの検討をしなければならない。

また、実験は市販の光触媒空気清浄機をグローブボックス内で稼働させて実施しており、実際のエアタイトケースにどのように実装するかについても検討の余地を残している。

今後は、これらの課題に取り組み、展示ケース内の空気質の改善に光触媒空気清浄機を安全に応用できるようにしていきたいと考えている。

資料

広島平和記念資料館資料調査研究会規約

（名称）

第１条　本会は、広島平和記念資料館資料調査研究会（以下「研究会」という。）と称する。

（目的）

第２条　研究会は、広島平和記念資料館の常設展示、企画展示の充実に資するため、原爆平和等に関わる各分野において資料の調査・収集・保存に関する学問的研究を行うものとする。

（事業）

第３条　研究会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

（1）展示に関する調査研究
（2）収蔵資料に関する調査研究
（3）原爆・核問題等に関する調査研究
（4）被爆前後の広島の都市、市民生活に関わる調査研究
（5）調査研究に伴う資料の収集
（6）総会の開催及び研究成果の公開
（7）他研究団体、機関との連携
（8）その他本会の目的を達成するための必要な事項

（会員）

第４条　研究会の会員は別表に掲げる者とする。

２　研究会の目的に賛同する者は、総会の承認を得て、会員になることができる。

３　研究会を退会しようとする会員は、その旨を研究会に申し出るものとする。

（名誉会員）

第５条　研究会の名誉会員は４月１日時点で本会に入会から５年以上が経過し、満75歳以上の者で本会に対し功績のある者とする。

２　名誉会員は、総会の承認を得て、名誉会員になることができる。但し本人から辞退の申し出があった時はその限りではない。

３　名誉会員は本会の事業に関する助言を行うものとし、本会の事業である調査研究は行わず、総会での議決権（役員の被選挙権を含む）を有しない。

（役員）

第６条　研究会に次の役員を置く。

（1）会長　　１人
（2）副会長　１人
（3）監事　　２人

２　役員は、総会において選任する。

（役員の職務）

第 7 条　会長は、研究会を代表し、その業務を総括する。

2　副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、又は会長が欠けたときは、その職務を代行する。

3　監事は、会計及び会務の執行の状況を監査する。

（役員の任期）

第 8 条　役員の任期は 2 年とする。ただし、補欠により就任した役員の任期は、前任者の残任期間とする。

2　役員は、再任されることができる。

（会議）

第 9 条　研究会は、会員をもって構成する総会において、次の事項を議決する。

（1）事業計画及び収支予算の決定

（2）事業報告及び収支決算の承認

（3）その他研究会の運営に関する重要な事項

2　総会は、会長が招集する。

3　総会の議長は、会長又は会長の指名する者があたる。

4　総会は、会員の現在数の半数以上が出席しなければ開会することができない。ただし、当該議事につき書面をもってあらかじめ意思を表示した者及び代理人として表決を委任した者は、出席会員の数に加えることができる。

5　総会の議事は、出席会員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

6　会長は、必要と認める時は、総会の会員以外の関係者の出席を求め、意見又は説明を聞くことができる。

7　会長が緊急を要すると認めた場合、持ち回りにより会員の現在数の過半数の同意によって議決することができる。

（会長の専決処分）

第 10 条　総会の権限に属する事項で、総会を開催する暇がない時は、会長において専決処分することができる。

2　前項の規定により専決処分したときは、会長は、次の総会においてこれを報告しなければならない。

（事務局）

第 11 条　研究会の事務を処理するため、平和記念資料館学芸課内に事務局を置く。

2　事務局の組織及び運営に関し必要な事項は会長が別に定める。

（会計年度）

第 12 条　研究会の会計年度は、毎年 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終わる。

（委任）

第 13 条　この規約の変更及び施行について必要な事項は、総会の議決を経て別に定める。

附　則

この規約は、平成 10 年 8 月 18 日から施行する。

この規約は、平成 25 年 3 月 25 日から施行する。

この規約は、令和 5 年 4 月 1 日から施行する。

広島平和記念資料館資料調査研究会　会員名簿

1　会員

氏　名	専門・対象分野	現職
神谷（かみや）　研二（けんじ）	医学（放射線生物学）	公益財団法人放射線影響研究所　理事長
久保田（くぼた）明子（あきこ）	アーカイブズ学研究	広島大学原爆放射線医科学研究所　助教
高妻（こうづま）　洋成（ようせい）	保存科学（有機質材料）	独立行政法人国立文化財機構　文化財防災センター　センター長
佐渡（さど）　紀子（のりこ）	国際政治（国際安全保障）	広島修道大学国際コミュニティ学部　教授
四條（しじょう）　知恵（ちえ）	歴史学	広島市立大学広島平和研究所　准教授
高橋（たかはし）　博子（ひろこ）	アメリカ史（核兵器関連資料調査）	奈良大学文学部　教授
竹﨑（たけさき）　嘉彦（よしひこ）	地理（地図・航空写真）	中国書店
根本（ねもと）　雅也（まさや）	社会学	一橋大学大学院社会学研究科　専任講師
松田（まつだ）　弘（ひろし）	近現代美術史	東広島市立美術館　館長
水本（みずもと）　和実（かずみ）	国際関係論（核軍縮、安全保障等）	広島市立大学　名誉教授
吉田（よしだ）　幸弘（ゆきひろ）	プロダクトデザイン、空間デザイン	広島市立大学芸術学部　教授

2　名誉会員

石丸（いしまる）　紀興（のりおき）	建築学（建築計画、都市計画・形成史等）	㈱広島諸事・地域再生研究所　代表

（令和５年 11 月１日現在）

広島平和記念資料館資料調査研究会 研究報告　第19号

発　行　令和5年（2023年）11月22日

編集・発行　広島平和記念資料館資料調査研究会
事務局　広島平和記念資料館　学芸課
〒730–0054　広島市中区中島町1番2号
TEL（082）241－4004

印　刷　サブローAD株式会社